

東洋美術大観 六

Days Revisited Japan - Vol 6



Blank Page Digitally Inserted



東洋美術大観 六

















東洋美術大觀第六冊

目次

第七編 德川時代承前

第五章 浮世繪

本書の略叙—浮世繪の名義—浮世繪の濫觴及始祖—岩佐勝以—岩佐勝重—雛屋立圃—菱川師宣—懷月堂—鳥居清元—鳥居清信—羽川珍重—鳥居清倍—鳥居清滿—鳥居清長—鳥居清經—西川祐信—西川祐尹—宮川長春—西村重長—石川豐信—磯田湖龍齋—鈴木春信—富川房信—奧村政信—月岡雪鼎—月岡雪齋—石田玉山—蔀關月—鳥山石燕—戀川春町—百川子興—勝川春章—勝川春潮—勝川春英—勝川春好—勝川春童—勝川春亭—勝川春扇—喜多川歌麿—喜多川菊麿—喜多川藤麿—歌川豐春—歌川豐廣—歌川豐國—歌川國重—歌川國貞—歌川國芳—北尾重政—北尾政演—北尾政美—窪田俊滿—細田榮之—葛飾北齋—葛飾北岱—有坂北馬—魚屋北溪—柳川重信—柳々居辰齋—菊川英山—溪齋英泉—菊川英章—安藤廣重……五百三十三—五百三十七  
諸家の遺作……五百三十七—五百三十九

- 第二百五十五 岩佐勝以筆伊勢物語圖
- 第二百五十六 豐國祭圖屏風一雙二圖及一部分
- 第二百五十七 菱川師宣筆風俗圖卷二部分
- 第二百五十八 宮川長春筆美人圖
- 第二百五十九 西川祐信筆美人觀櫻圖
- 第二百六十 奧村政信筆美人少女圖
- 第二百六十一 鈴木春信筆今様八橋圖
- 第二百六十二 磯田湖龍齋筆今様高砂圖其一、其二
- 第二百六十三 勝川春章筆花下美人圖
- 第二百六十四 歌川豐春筆美人琴書圖
- 第二百六十五 鳥居清長筆秋樓遊興圖
- 第二百六十六 喜多川歌麿筆美人少女圖



第二百六十七 同筆螢狩圖

第二百六十八 細田榮之筆美人少女圖

第二百六十九 葛飾北齋筆美人裁衣圖全圖及一部分

第二百七十 同筆鍾馗圖

第二百七十一 安藤廣重筆猿橋圖

第六章 圓山派

圓山應舉

小圖第四十七 山跡鶴嶺筆圓山應舉像

第二百七十二 圓山應舉筆蓬萊仙奕圖

第二百七十三 同筆千代圖

第二百七十四 同筆墨竹圖屏風其一、其二

第二百七十五 同筆鯉魚圖雙幅其一、其二

第二百七十六 同筆三笑圖

第二百七十七 同筆松鷹圖

第二百七十八 同筆綠楓巨瀑圖

圓山應瑞

第二百七十九 圓山應瑞筆竹鷄圖屏風

木下應受—今井應禎—圓山應震—圓山應春—圓山應立

圓山家の門人—源琦

第二百八十 源琦筆潘妃蓮步圖

並河源章—長澤蘆雪

小圖第四十八 長澤蘆雪筆五百羅漢圖

五百五十三—五百五十五

五百五十四

五百四十一—五百四十九

五百四十三

五百四十九

五百四十九—五百五十

五百五十一—五百五十二



第二百八十一 長澤蘆雪筆孔雀圖

長澤蘆洲—長澤蘆舟—長澤蘆鳳—山口素絢

五百五十五

第二百八十二 山口素絢筆孔雀圖

素絢の門人矢野夜潮—森徹山

五百五十五—五百五十六

第二百八十三 森徹山筆松鶴圖

徹山の門人森一鳳—渡邊南岳—南岳の門人大西椿年—中島來章—吉村孝敬—吉村孝章—吉村孝文—赤村孝一—孝敬の門人駒井孝禮—八田古秀—古秀の門人福知白瑛—玉韞—山跡鶴嶺—與文鳴—龜岡規禮—土岐濟美—西村楠亭—白井直賢—島田元直—山本守禮—佐々木應祥—岡村鳳水—上部苗齋—植松應令—春舉—別所友賢—應震の門人島田雅喬—國井應文—圖司南峯—應立の門人

五百五十六—五百六十

第七章 四條派

四條派と圓山派と—吳春

五百六十一—五百六十四

第二百八十四 吳春筆寒林落日圖

第二百八十五 同筆柳陰漁舟圖屏風一雙

二圖及一部分

第二百八十六 同筆孤鷺群禽圖屏風一雙

二圖及一部分

第二百八十七 同筆風雨飛鷺圖

第二百八十八 同筆磯馴松圖

第二百八十九 同筆竹筍圖

第二百九十 同筆江口君圖

全圖及一部分

松村景文

五百六十四—五百六十五

第二百九十一 松村景文筆秋花圖

第二百九十二 同筆垂櫻雙鳩圖

五百六十五—五百六十八

第二百九十三 同筆瀑下孤鴉圖

松村玉文—吳春の門人岡本豐彦

五百六十五—五百六十六

第二百九十四 岡本豐彦筆蕭何追韓信圖



第二百九十五 同筆網魚圖

岡本亮彦—岡本俊彦—岡本茂彦—岡本常彦—柴田義董……………五百六十六—五百六十七

第二百九十六 柴田義董筆美人圖

柴田義峰—長山孔寅—紀東暉—東暉の門人—爾餘吳春門人—景文の門人—橫山清暉—原田九美—森義章—國分文友—西山芳園……………五百六十七—五百六十八

第二百九十七 西山芳園圖筆柳鷺圖

西山完瑛—景文の門人—豐彦の門人—田中日華—鹽川文麟……………五百六十九

第八章 岸派

岸駒……………五百七十一—五百七十九

第二百九十八 岸駒筆醉李白圖

第二百九十九 同筆樹下三嬌圖

第三百 同筆竹鶴圖屏風一雙中の一帖

第三百一 同筆自畫壽像

岸岱……………五百七十九—五百八十一

第三百二 岸岱筆駒迎圖小障子

岸慶—岸禮—岸誠—岸成—岸連山……………五百八十一—五百八十二

第三百三 岸連山筆蘆雁圖障子

岸良—岸恭—岸駒の門人—河村文鳳—河村琦鳳—橫山華山—橫山華溪—望月玉川—村上松堂—村上松嶺—白井華陽—爾餘岸駒門諸家—岸岱の門人—神戶麗山—柴田泰山—岸規……………五百八十二—五百八十八

第九章 原家

原家の技風—在中—在正—在善—梅戶在親—在照—在謙—原家の門人—高倉在孝—畑在周……………五百八十九—五百九十二

第十章 若冲、月僊及狙仙

伊藤若冲……………五百九十三—五百九十四

第三百四 伊藤若冲筆紫陽花鷄圖



月僊……………五百九十四—五百九十六

第三百五 月僊筆衆盲圖卷一部分

月僊の門人世繼寂窓—森狙仙……………五百九十六—五百九十八

第三百六 森狙仙筆群猿圖全圖及一部分

第三百七 同筆封侯圖

第三百八 同筆雙猿圖三幅對一幅の一幀

第三百九 同筆秋鹿圖







# 東洋美術大觀

## 第七編 徳川時代承前

### 第五章 浮世繪

本書の略叙

浮世繪の名義

浮世繪の濫觴及始祖

岩佐勝以

岩佐勝重

雛屋立圃

菱川師宣

懷月堂

鳥居清元

鳥居清信

浮世繪は別に浮世繪派畫集ありて廣くその遺作を網羅し、その沿革史も亦これに詳敍せるを以て、本書はたゞその梗概を述べて、最も著名なる大家の佳作を載するに止む。そもく浮世繪の名稱は、有職人物畫及支那人物畫に對する時様の邦俗人物畫を指すものにして、浮世は即ち俗間の義なり。されば時様の邦俗を畫けるものは、古來和繪の繪卷物等の中にも少からずして、皆浮世繪とも呼ぶべきに似たれど、謂はゆる浮世繪は、主として本時代に發達せる風俗畫の一流派を指すものとす。而してこの流派の萌芽は早く天文、永祿の頃に發し、狩野秀頼、狩野内膳、重郷及狩野山樂等の如きも、往々時様の邦俗を畫きしかど、専らこれを以て世に聞え、目してこの派の始祖とも爲すべきは岩佐勝以なり。勝以通稱又兵衛、道蘊、雲翁等の號あり。畫を狩野内膳、重郷に學び、又土佐光信の風に私淑し、終に一家を成し、浮世又兵衛と稱せらる。慶安三年六月廿二日江戸に歿す。享年七十三。長子勝重通稱源兵衛、越前福井侯に仕へ、延寶元年二月廿日歿す。父に學びて家風を襲へりと雖も、その技父に及ばず。勝重の子以重陽雲と號し、亦家風の畫を能くせりと云ふ。勝以より稍後れて京都に雛屋立圃あり。野々口氏、諱は親重、松翁と號す。土佐風を學びて亦時様の風俗畫を作る。その挿畫に成れる版本少からず。寛文九年九月卅日歿す。歳七十一。

岩佐勝以は實に浮世繪の開祖なりと雖も、謂はゆる浮世繪の旗幟眞に分明なるに至れるは菱川師宣に在り。師宣は安房の人、通稱吉兵衛、晩年薙髮して友竹と號す。父祖以來の家業たる繡箔、上繪よりしておのづから畫を巧にし、江戸に出でゝ専ら浮世繪を作り、版行の繪本及一枚繪を以て大いに世に行はる。元祿七年歿す。歳七十七。師宣の子に吉左衛門師房、沖之丞、師永あり。門下に古山太郎兵衛、師重、菱川師平、菱川和翁、菱川友房、古山師繼、古山新九年、師政等ありと雖も、皆師宣に及ばず。殊に師政に至りては、鳥居派の風化を受けて、菱川派の特徴頗る薄れたり。

師宣に次いで寶永乃至享保の頃懷月堂安度或曰安慶あり。通稱を岡崎源七と云ふ。その末流安知、度繁、度辰、度秀等あり。壯跋の筆致、特徴殊に著き一派とす。

享保の前後は實に斯派鬱勃隆興の時期なり。懷月堂の外、鳥居清信、西川祐信、宮川長春、西村重長、奥村政信等の名手一時に輩出せり。鳥居の祖を清元とす。清元通稱庄七、元大坂の俳優なりしが、貞享四年江戸に下り、劇場の看板を畫き、元祿十五年四月廿八日享年五十八にて歿す。その子庄兵衛、清信に至りて大いに著れ、爾後累代劇場の看板を畫くを業とす。清信は享保十四年七月廿八日六十六歳にて歿しぬ。門人清



羽川珍重

鳥居清倍

重、藤次郎清忠、清朗及羽川珍重等あり。珍重最も著る。通稱太田辨五郎、諱は沖信、繪情齋と號す。寶曆四年七月廿二日七十六歳にて歿す。清信の子庄二郎清倍家を嗣ぎ、寶曆十三年十二月二日五十八歳にて歿す。次子龜次郎清滿嗣ぐ。天明五年四月三日五十一歳にて歿す。一枚繪の外、その挿畫に成れる黒本及黄表紙少からず。門人中清長、清經最も著る。清長師家を相續せり。本氏關口、通稱市兵衛、文化十二年五月廿一日六十四歳にて歿す。錦繪の外、その挿畫の黄表紙甚多く、繪本亦少からず。鳥居家歴代の中、畫技最も勝れたるは實に清長なり。清經通稱大次郎、錦繪の外、その挿畫の黒本、黄表紙及嘶本甚多し。竝に明和、安永頃の版行に係る。清長の後はその門人にして清滿の孫なる庄之助清峰嗣げり。文化十二年二世清滿と名のり、明治元年十一月廿一日八十二歳にして歿す。錦繪の外、その挿畫に成れる黄表紙、合卷の書あり。清峰の子清芳<sup>三世</sup>家<sup>清滿</sup>を嗣ぎ、以て今の清忠に及ぶ。

鳥居清長

鳥居清經

鳥居清峰

西川祐信  
雖屋立圖の後、京都の浮世繪は傑出の大家を出さざりしが、享保の頃に至りて、關西絶後の名手とも稱すべき西川祐信出でぬ。祐信通稱初め祐助、又孫右衛門、後右京と改む、自得齋、文華堂等の號あり。狩野永納及土佐光祐に學びて別に一家を成し、多く版行の繪本を畫きて盛に世に行はる。寶曆元年九月十一日八十一歳にて歿す。その子祐尹嗣ぐ。祐尹通稱祐藏、得祐齋と號す。亦繪本を畫けり。寶曆十二年八月廿五日五十七歳にて歿す。

西川祐信

西川祐尹

宮川長春

宮川長春は通稱初め長左衛門、後喜平次と改め、春旭堂と號す。初め師宣を慕ひ、中ごろ懷月堂に倣ひ、後兩者を渾融して別に一家の妙を成せり。寶曆二年十一月十三日七十一歳にて歿す。門人春水、長龜等あり。一笑、正幸等も亦その末流とす。

西村重長、石川豐信

磯田湖龍齋

鈴木春信

富川房信

西村重長仙花堂と號す。著畫の繪本あり。寶曆六年六月廿七日六十餘歳にて歿す。門人石川豐信、磯田湖龍齋、鈴木春信、富川房信等皆著る。豐信初め西村重保、通稱を孫三郎と云ふ。著畫の繪本少からず。天明五年五月廿五日七十五歳にて歿す。湖龍齋諱は正勝、通稱庄兵衛、後法橋に敘せらる。安永、天明の交、亦繪本を畫けり。鈴木春信通稱を穗積次兵衛と云ふ。從來の版畫は丹繪、漆繪乃至紅摺のみなりしが、春信に至りて始めて錦繪を出せり。明和七年六月十五日五十三歳にて歿す。錦繪の外、繪本の著畫多し。門人駒井美信あり。富川房信本氏は山本、通稱丸屋九左衛門、吟雪と號し、多く黄表紙の畫を作れり。寶曆、明和の交頗る世に行はる。

奥村政信

奥村政信通稱は本屋源六、文角、親妙、梅翁、芳月堂、丹鳥齋等の號あり。漆繪及浮繪は政信の創意に出づと云ふ。繪本及草子類の著畫多し。明和五年二月十一日七十九歳にて歿す。その子利信及門人文志政房あり。

月岡雪鼎

月岡雪齋、雪溪

京都の浮世繪は西川祐信を以てその代表とすべきが如く、大坂の浮世繪は實に月岡雪鼎を以て始めて世に著れたる大家とす。雪鼎本氏は木田、通稱丹下、諱は昌信、信天翁と號す。月岡は姓氏の如くなれど、實はその號なり。高田敬輔に學びて別に一家を成し、法橋に敘せらる。その畫ける繪本多く、又最も春畫に名あり。天明六年十二月四日七十七歳にて歿す。長子雪齋諱は秀榮、字は大溪、法眼に敘せらる。次子雪溪



石田玉山

蒔關月

鳥山石燕戀  
川春町

百川子興

勝川春章

勝川春潮

勝川春英

勝川春好

勝川春童

勝川春亭

勝川春扇

喜多川歌麿

喜多川菊麿

喜多川藤麿

歌川豊春

歌川豊廣

亦法橋たり。雪鼎の門人に桂宗信、石田玉山、黒井武禪、蒔關月等あり。玉山最も著る。諱は友尙、字は子德、法橋に敍せられ、大坂に住し、多く讀本及名所圖會の挿畫を作り、盛に世に行はる。文化九年七十六歳にて歿す。門人石田玉峰も讀本の挿畫を作れり。關月も亦法橋たり。寛政九年十月廿日五十一歳にて歿す。名所圖會の挿畫あり。その子關牛及門人山月、中井藍江等あり。竝に大坂の人とす。

鳥山石燕本氏は佐野、諱は豊房、狩野周信に學び、後浮世繪の一家を成す。天明八年八月三日歿す。門人戀川春町、百川子興等皆著る。春町本氏は倉橋、通稱壽平、諱は格、狂歌の名を酒上不埒と云ひ、又壽山人、春町坊等の號あり。みづから黄表紙を作りてこれを畫き、盛に世に行はる。黄表紙の作風爲に一變す。寛政元年七月七日四十六歳にて歿す。門人戀川好町等あり。百川子興は又榮松齋長喜と云ふ。錦繪の外、天明乃至文化の頃、盛に黄表紙の挿畫を作る。門人一樂齋長松あり。

勝川春章は宮川春水の門に出づと雖も、畫風長春とは異なれり。春章通稱祐助、縱畫生、旭朗井、酉爾、李林、六々菴、千尋等の號あり。錦繪の外、繪本の著畫少からず。寛政四年十二月八日六十七歳にて歿す。畫名一時に高く、門下濟々、春潮、春英、春好、春童、春鶴、春常、春喬、春紅、春林、春旭、春泉、春曉、春龍、春里、春艶、春朝等あり。春潮は通稱吉左衛門、東紫園、中林舍、三江等の號あり。初め黄表紙を畫き、後専ら錦繪を出し、文化の頃よりは吉左堂と號して、専ら狂歌狂文の戯作を業とす。春英は通稱磯田久次郎、九德齋と號す。繪本及黄表紙の畫を作れるもの甚多し。文政二年七月廿六日五十八歳にて歿す。門人春亭、春扇、春玉、春山、春徳あり。春好は初め春翁と云ふ。通稱徳次郎。多く似顔を畫く。文政十年六月歿す。春童は又春道と云ふ。本氏は林、蘭德齋と號す。安永、寛政の頃、盛に黄表紙を畫けり。春鶴以下は傳記、歿年明ならずと雖も、何れも安永、天明の頃、黄表紙及錦繪を畫けり。春英の門人春亭は本氏山口、通稱長十郎、松高齋、勝汲壺、醉放逸人、戯墨庵等の號あり。畫風後歌川派に倣へり。盛に黄表紙及合卷の畫を作る。文政三年八月三日五十一歳にて歿す。春扇は通稱清次郎、登龍齋、可笑齋の號あり。初め堤等琳に學び、後春英の門人たり。文化、文政の頃、黄表紙、合卷を畫けるの夥しきこと、春亭と拮抗せり。

喜多川歌麿は鳥山石燕の子にして、幼名市太郎、通稱勇助、後勇記と改む。諱を信美、字を豊章と云へり。紫屋、忍岡、燕岱齋、裏町齋、一窓主等の號あり。春章に次げる大家とす。文化三年九月廿日五十三歳にて歿す。錦繪の外、その畫に成れる黄表紙、洒落本、狂歌書等甚多し。師宣、長春、春章に次いで、畫名最も盛なりき。門人菊麿、藤麿、蕙麿、式麿、行麿、道麿、秀麿等あり。菊麿一に喜久麿に作る。通稱六三郎。又千助、諱は潤、字は士達、墨亭、觀雪齋の號あり。草子類の著畫多し。安政三年十二月五日六十歳にて歿す。藤麿は紫霞齋と號せり。

勝川、喜多川の二派より稍後れて出でたるを歌川派とす。その祖豊春、通稱但馬屋庄三郎、後新右衛門と改む。初め京都に在りて鶴澤探鯨に學び、後江戸に下り、石川豊信の門に入り、みづから一家を成す。雍髮して一龍齋潜藏、又潜龍齋と號す。浮繪は豊春に至りてその巧を極むと云ふ。文化十一年正月十二日八十歳にて歿す。門人豊廣、豊久、豊國等あり。豊廣本氏は岡島、通稱藤次郎、一柳齋と號す。文政十一年五月廿日五



歌川豊國

歌川國重

歌川國貞

歌川國芳

北尾重政

北尾政演

北尾政美

窪田俊滿

細田榮之

葛飾北齋

十六歳にて歿す。草子類の挿畫を作れること夥し。その子豊清、孫豊熊等あり。豊國本氏は倉橋、通稱熊吉、一陽齋と號す。文政八年正月七日五十七歳にて歿す。錦繪及草子類の挿畫を作れること極めて夥し。門人甚多く、枚舉に遑あらず。國重、國貞、國芳最も著る。國重は通稱源藏、後素亭、一瑛齋、一龍齋の號あり。師の養子と爲りてその女に配し、一時二世豊國と稱せり。謂はゆる本郷豊國これなり。天保六年十一月朔日五十九歳にて歿す。錦繪及草子類の挿畫を作れり。その門人亦少からず。國貞本氏は角田、通稱を庄五郎又庄藏と云ひ、一雄齋と號し、後一陽齋と改め、二世豊國と稱せり。月波樓、北梅戸、桃樹園、香蝶樓、一蟠、富望山人、富眺菴等の別號あり。元治元年十二月十五日七十九歳にて歿す。多く錦繪及草紙類の挿畫を作れること、豊國と相如けり。門人甚多し。國久を養子として家を嗣がしむ。國芳本氏は井草、幼名芳三郎、後通稱を孫三郎と云ひ、一勇齋、朝櫻樓と號し、亦多く錦繪及草子類の挿畫を作る。文久元年三月五日六十五歳にて歿す。門人甚多し。

歌川に次いで出でたるを北尾派とす。その祖重政、幼名太郎吉、通稱を久五郎と云ひ、後太助と改め、紅翠齋、花藍と號し、又台嶺、一陽井、恒醉夫、醉放散人等の別號あり。或は重政に代ふるに繁昌の字を以てす。文政二年二月十一日八十一歳にて歿す。草子類の挿畫及繪本甚多し。門人政演、政美、窪田俊滿、柳郊、美丸等あり。政演本氏は磐瀬、幼名甚太郎、通稱初め田藏、後京屋傳藏と云ふ。諱は臧、字は伯慶、後諱を醒、字を酉星と改む。即ち小説の作者として著名なる山東京傳なり。文化十三年九月七日五十六歳にて歿す。草子類の挿畫を作れること夥し。その中自著少からず。繪本の著書亦多し。政美本氏は赤羽、後鉄形と改む。通稱三次郎、杉臯又蕙齋と號す。江戸の組上燈籠は政美の畫けるを初めとす。云ふ。安永五年以來盛に草子類の挿畫を作りしが、寛政七八年以後は畫風を一變して、専ら草畫の畫譜を出す。工藝用畫手本の行はるゝはこれを嚆矢とす。文政七年三月廿一日六十四歳にして歿す。その子鉄形、赤子、紹意と號し、福井侯に仕ふ。紹意の子蕙林は狩野雅信に學びて津山藩の畫師たり。紹意、蕙林は浮世繪家に非ず。窪田俊滿、通稱を安兵衛と云ふ。左筆を能くするを以て尙左堂と號す。兼ねて戯作を業とし、その名を南陀伽紫蘭、又黃山堂と云へり。初め畫を建部凌岱に學び、春滿と號せしが、後北尾重政の門に入り、勝川派めきたるを避けて俊滿と改む。その著書、黃表紙及洒落本少からず。文政三年九月廿日六十四歳にて歿す。

細田榮之諱は時富、通稱彌三郎、鳥文齋と號す。畫を狩野典信に學びてみづから浮世繪の一家を成す。多く錦繪を出し、又少しく黃表紙の挿畫を作れり。文政十二年七月二日歿す。門人榮理、鳥高齋、榮昌、一樂亭、榮水、一貫亭、榮尙、琢齋、榮玉、鳥園齋、榮深、翠松齋、榮月、鳥囀齋、榮壽、榮笑、榮龜、鳥玉齋、榮京及榮山等あり。

葛飾北齋本氏は中島、幼名時太郎、通稱を鐵三と云ひ、後或は三浦屋又百姓八右衛門、或は土持仁三郎など云へり。葛飾はその所生の郡名を取りて稱せしなり。初め畫を春章に學びて勝川春朗と號し、又狩野寛信の門に入り、春章に破門せられて叢春朗と改め、又菱川宗理と云ひ、更に北齋と改め、後辰政、辰齋、戴斗、雷斗、雷震、錦袋舍、爲一、畫狂老人、巾などの諸號を用ゐ、戯作者としては是和齋、魚佛、群馬亭、時太郎可候の號



葛飾北岱

有坂北馬

魚屋北溪

柳川重信

柳々居辰齋

菊川英山

溪齋英泉

菊川英章

安藤廣重

諸家の遺作

ありき。勝川風狩野風の外、宗理風、土佐風、西洋畫及支那畫を併せ學び、終にみづから一格を成す。初め多く草子類の挿畫、狂歌の摺物等を畫き、後繪本を出して大いに世に行はる。嘉永二年四月十八日九十歳にして歿す。その女榮應爲と號し、父に學びて畫を善くせり。北齋の門人頗る多し。その著れたる者を葛飾北岱、有坂北馬、魚屋北溪、柳川重信、柳々居辰齋等とす。北岱は盈齋と號し、少しく草子類の挿畫を作れり。北馬は本氏星野、通稱五郎八、蹄齋又駿々齋と號す。弘化元年八月十六日七十四歳にて歿す。草子類の挿畫を作れること北岱より多し。北溪本氏は岩窪、通稱初五郎、後金右衛門と改む。諱は辰行、拱齋、葵岡等の號あり。初め狩野雅信に學び、後北齋を師とす。多く狂歌書の挿畫を作れり。嘉永三年四月九日七十一歳にて歿す。柳川重信は本氏鈴木、通稱重兵衛、柳川はその住所の町名なり。多く草子類及狂歌書の挿畫を作る。天保三年閏十一月廿八日四十六歳にて歿す。辰齋、通稱は滿納半二、諱は政之、多く狂歌の摺物を書けり。

菊川英山、諱は俊信、重九齋と號す。通稱近江屋萬吉。初め畫を北溪に學び、又鈴木南嶺の門に入り、後みづから一家を成す。初め多く俳優畫、美人畫を出し、文化、文政の頃、草子類の挿畫を書けり。門人中、溪齋英泉、菊川英章稍著る。英泉、本氏は池田、通稱善次郎、後里介、諱を義信、又茂義、字を混聲と云ふ。讀本の挿畫を以て盛に行はる。藍摺の山水錦繪は英泉の創意に出でたり。嘉永元年八月廿六日五十七歳にて歿す。英章一に英笑に作る。本氏は淺野、春齋と號す。錦繪の外多く團扇繪を書き、又文政の頃小説の挿畫を作れり。

安藤廣重、諱は元長、幼名徳太郎、通稱十右衛門、後徳兵衛と改め、一立齋と號す。歌川豐廣に學び、後専ら景色畫の錦繪を以て一家を立つ。安政五年九月六日六十二歳にて歿す。門人森田重宣及後藤重政相繼いで二世廣重と稱せり。

右略敘する所の外、作者枚舉に遑あらず。左に上記諸家遺作の尤品を列舉し、以て浮世繪風格の變遷を示す。若し更にこれを精しくせむと欲せば、宜しく浮世繪派畫集を併せ看るべし。

## 第二百五十五 岩佐勝以筆伊勢物語圖

勝以の遺作にして署名あるは川越喜多院の三十六歌仙及紀貫之像（浮世繪派畫彙に出づ）等あるに過ぎず。その餘は多くたゞ印識あるのみ。本圖亦然り。例の面相長願の特徴は、著からずと雖も、人物の描法、樹木の畫風、勝以の妙技は、本圖に於いて亦これを觀るべし。

## 第二百五十六 豊國祭圖屏風一部

この圖は署名、印識共にこれを缺くと雖も、傳へて勝以の筆と稱す。その人物面相の特徴を觀ても、勝以若くは其一派の作なること疑ひなし。群集雜踏の狀を曲盡し、個々活動の態を描寫せる技倆の非凡、眞に斯派の祖たるに耻ぢずと謂ふべし。

## 第二百五十七 菱川師宣筆風俗圖卷二部



浮世繪の巻物は、師宣、長春等の遺作に多し。而して本巻は師宣遺品中の最大尤品なり。師宣の長技たる流麗の彩筆、能く時様風俗の鏡面たりしさまは、これを觀ても思半に過ぎむ。

第二百五十八 宮川長春筆美人圖

懷月堂及英一蝶等の風を取り、變じて以て一家の格を成せし長春の技風は、本圖以てこれを觀るに足れり。

第二百五十九 西川祐信筆美人觀櫻圖

第二百六十 奥村政信筆美人少女圖

第二百六十一 鈴木春信筆今様八橋圖

第二百六十二 磯田湖龍齋筆今様高砂圖 其一、其二、

第二百六十三 勝川春章筆花下美人圖

第二百六十四 歌川豊春筆美人琴書圖

第二百六十五 鳥居清長筆秋樓遊興圖

第二百六十六 喜多川歌麿筆美人少女圖

第二百六十七 同筆螢狩圖

第二百六十八 細田榮之筆美人少女圖

祐信、政信、春信等の作は、畫風尙古雅の趣あり。湖龍齋、春章、清長に至りて巧麗妍媚を極む。豊春、榮之各々別に一體を成し、歌麿最も嬌態を肆にせり。各家の技風皆一種の特徴を有す。こゝに掲ぐる諸作、以て略その面目を窺ひ、併せて浮世繪の變遷を知るに足る。この中歌麿の螢狩の圖は款識なしと雖も、當にその畫風に依りて歌麿の佳作たること明なるのみならず、圖中團扇を手にせる美人と同形の人物は、歌麿の錦繪にもありて、その得意の圖なることを知るに足れり。

第二百六十九 葛飾北齋筆美人裁衣圖 全圖及一部分

第二百七十 同筆鍾馗圖



北齋の畫風は、初め春朗と稱せし頃、全く勝川風なりしが、その後次第に一家の特色を發揮し、晩年に至りて益々著し。こゝに掲ぐる美人裁衣圖はその中齡北齋と稱せし頃の作に係り、勇士騎獅圖は老齡に至りて特色最も顯れし頃の作とす。在來の浮世繪諸家の風を一變し、主として支那畫を折衷し、縱横健跋一代に獨歩せし力量は、この二品を觀ても優にこれを認むるに足れり。

## 第二百七十一 安藤廣重筆籠渡圖

何れの國の繪畫史に觀ても、山水畫の發達は人物畫に後る。蓋し人物畫の背景漸く進みて獨立するに至るを以てなり。されば浮世繪に在りて、専ら景色畫を以て家を成せるは、實に廣重を以て嚆矢とす。本圖以てその技風の概を見るべし。北齋と廣重とは、眞に斯派の掉尾を爲せる一雙の後勁と稱するに堪へたり。







第二百五十五 伊勢物語圖 岩佐勝以筆

紙本着色

竪二尺四寸五分、横一尺二寸九分

東京 黒田太久馬君藏

(第五百三十七頁參看)



（標準百三十正五卷）

東京 黒田木八郎發行

第二八四七正卷附一八二八卷

加本音

第二百五十五 時變辭譜圖 卷廿四以并



秋風吹くも  
くもすも  
せりり









第二百五十六 豊國祭圖屏風一雙 傳岩佐勝以筆

紙本金地着色

各堅五尺五寸二分横一丈一尺七寸二分

第三圖は精妙なる筆致を細觀するに便せん爲め其二扇を大寫したるものなり

東京 侯爵蜂須賀茂韶君藏

(第五百三十七頁參看)



（第三十三頁）

東京 新報社發行

大蔵省の事務

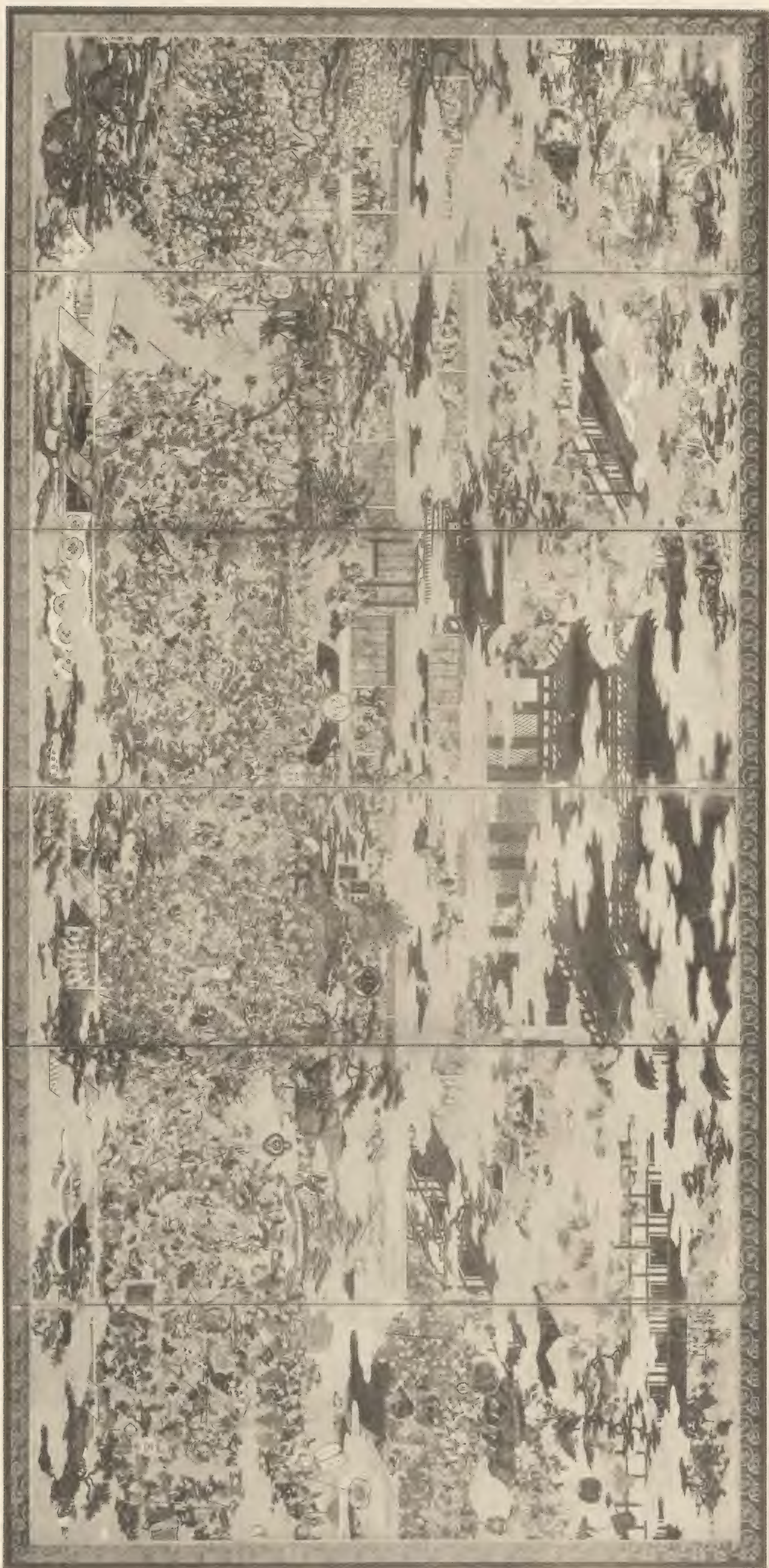
三圖の關係は、華北の關係を、三圖の關係を、其二圖

各圖正只正々二條圖一丈一尺二寸二分

日本金銀貨

第二百五十六 豊國祭圖 風一雙 朝谷分額以并

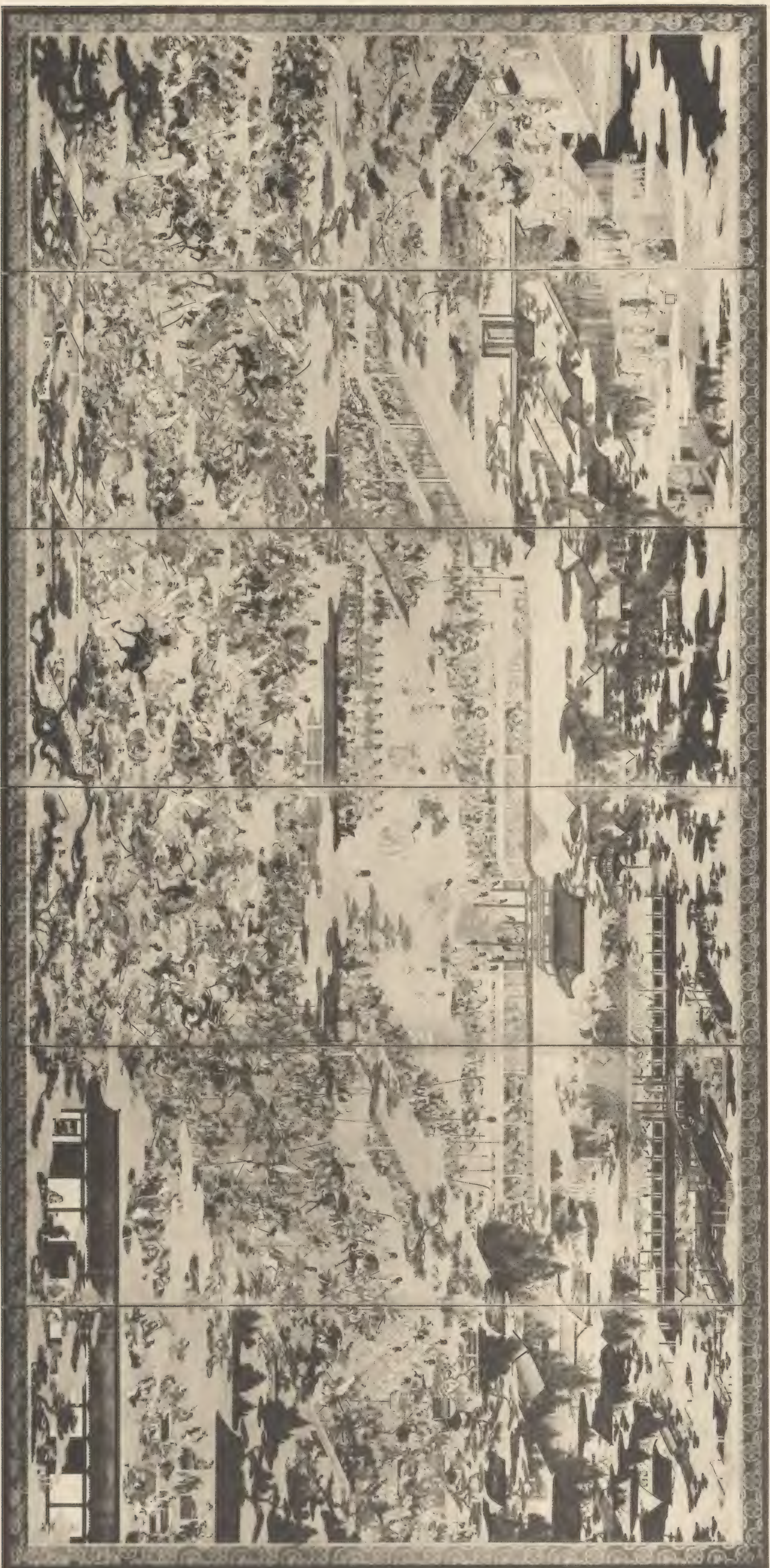


























第二百五十七 風俗圖卷(其二段) 菱川師宣筆

全二卷絹本着色

各竪一尺四寸二分五厘

東京 益田 孝君藏

(第五百三十七頁參看)





(續正百三十計頁卷管)

東京 森田 孝作藏

香煙一具四七二卷正里

全二卷(本卷計)

續二百正十斗 風俗圖卷(其二) 葵川 福宣筆



















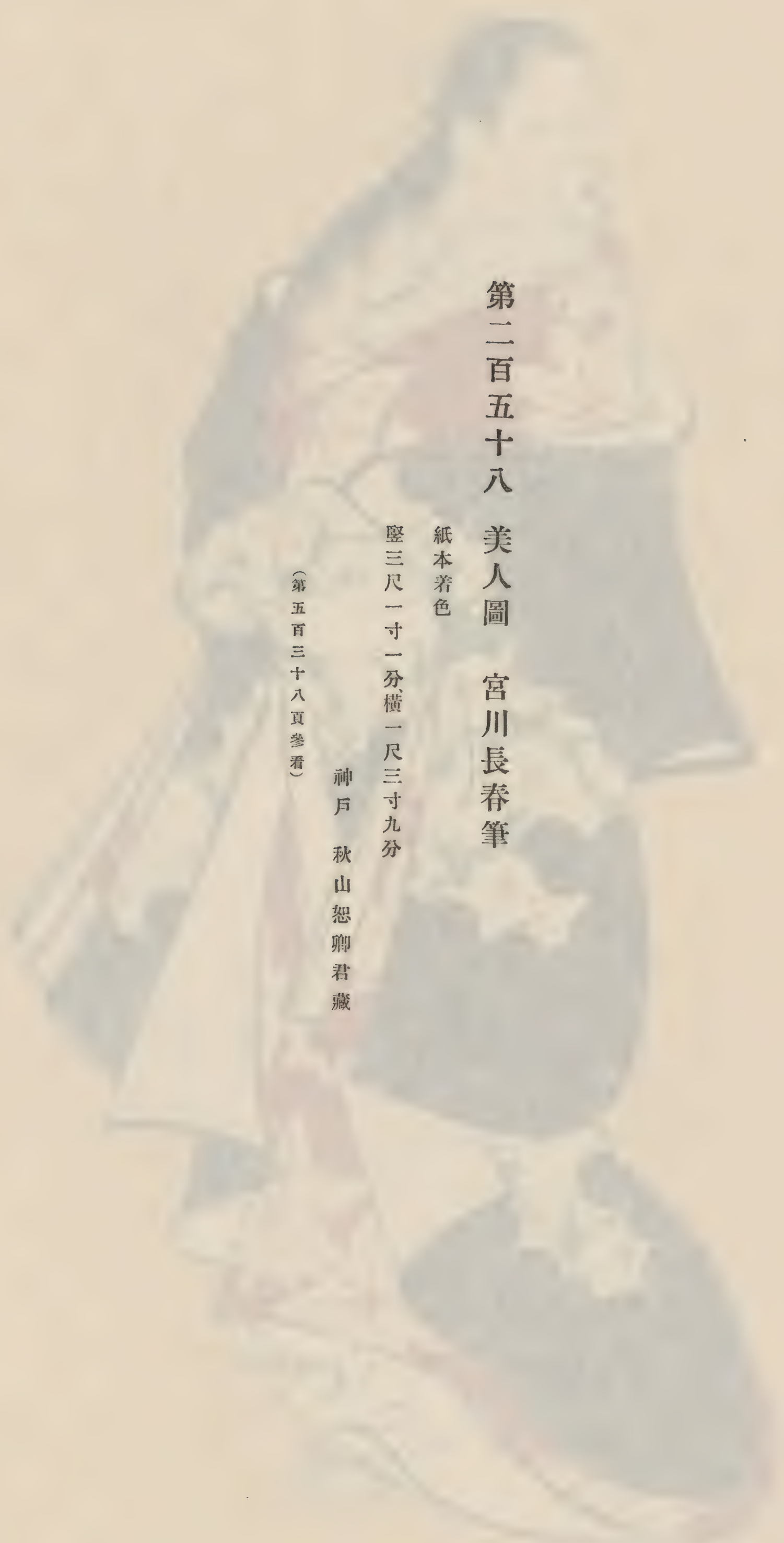
第二百五十八 美人圖 宮川長春筆

紙本着色

竪三尺一寸一分、横一尺三寸九分

神戸 秋山恕卿君藏

(第五百三十八頁參看)





（續前頁三十八頁通釋）

幅員 蘇山感順普藏

三三三三三三三三三三三三三三三三

三三三三三三三三三三三三三三三三

二二二二二二二二二二二二二二二二  
美人圖 宮川是春雅





可也  
清  
吉  
八  
三  
三  
三  
三







第二百五十九 美人觀櫻圖 西川祐信筆

絹本着色

堅三尺一寸五分、横一尺二寸

神戸 福岡清次郎君藏

(第五百三十八頁參看)





三十八頁

轉頁 隨提帶大酒

三十八頁

三十八頁

二頁正十次 美人躑躅圖 西川龍











第二百六十 美人少女圖 奧村政信筆

絹本着色

竪七寸五分 横一尺一寸四分

東京 服部一三君藏

(第五百三十八頁參看)



（第百三十八頁）

東京 堀江 一三三

昭和七年正月一日

清水

第一百六十 美人也 岡 奧林匹亞











第二百六十一 今様八橋圖 鈴木春信筆

紙本着色

竪二尺九寸一分横九寸

神戸 服部一三君藏

(第五百三十八頁參看)



卷之三 八

轉司 羅精一三書

卷之二 八

辨本條

卷之二 六十一 今對八部圖 證本條











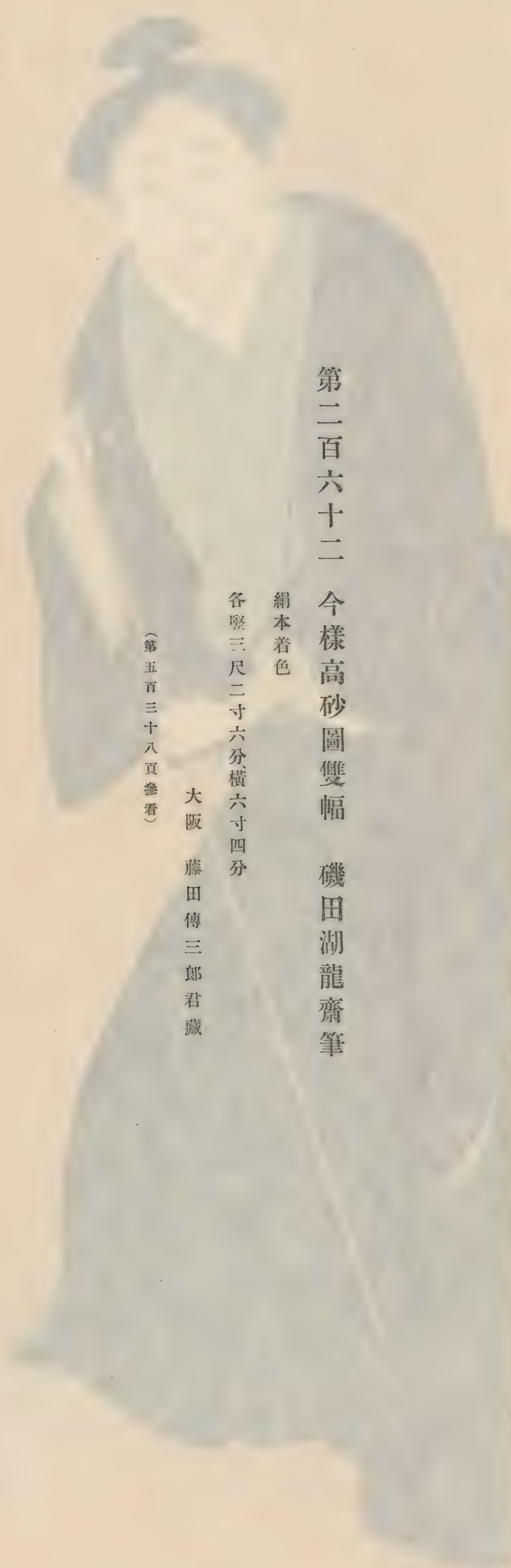
第二百六十二 今様高砂圖雙幅 磯田湖龍齋筆

絹本着色

各竪三尺二寸六分横六寸四分

大阪 藤田傳三郎君藏

(第五百三十八頁參看)





（第三十八回）

大頭 龍田村三頭首

番頭三頭二十六卷第六回

龍田村

第二百六十二 今將高野圖變神 龍田村龍田首













法橋湖龍齋







第二百六十三 花下美人圖 勝川春章筆

絹本淡彩

竪三尺一寸一分 横一尺一寸一分

(第五百三十八頁參看)

東京美術學校藏









縦画生勝百爾春章筆









第二百六十四 美人琴書圖 歌川豊春筆

絹本着色

竪一尺七寸一分、横三尺一寸五分

神戸 小林敬直君藏

(第五百三十八頁參看)



(卷正百三十八頁卷終)

轉載 小林夢道書齋

型一八小七一袋謝三只一卡正袋

備本卷終

卷二百六十四 美人琴書圖 堀田豊春作











第二百六十五 秋樓遊興圖 鳥居清長筆

紙本着色

竪一尺三寸八分、横二尺一寸七分

神戸 松本文恭君藏

(第五百三十八頁參看)





二 圖書三十八頁

轉頁 附末文

總一頁三十八卷謝二頁一七小卷

謝本卷也

卷二百六十五 煥射靈輿圖 鳳凰衛其羊





清長画







第二百六十六 美人少女圖 喜多川歌麿筆

紙本淡彩

竪二尺九寸八分、横九寸

神戸 福岡清次郎君藏

(第五百三十八頁參看)









芳唐筆









第二百六十七 螢狩圖 喜多川歌麿筆

絹本着色

竪一尺五寸六分横二尺一分

神戸 服部一三君藏

(第五百三十八頁參看)



（推定）百三十六頁

神戶 關西 一二三

第一 八五七次巻附二頁一巻

附本巻

卷二百六十  
盤律圖 喜達川郷郷











第二百六十八 美人少女圖 細田榮之筆

絹本着色

竪三尺六分横一尺二寸九分

近江國八幡 福本嘉兵衛君藏

(第五百三十八頁參看)





（一）種目之十八（紅毛書）

並五圖八冊 附本島直博君藏

第三八六卷附一頁二枚正發

附本館印

卷二百六十八 美人也文圖 藤田桑玄





為文書、榮之筆







第二百六十九 美人裁衣圖 葛飾北齋筆

絹本着色

竪一尺三寸五分横二尺六寸二分

乙圖は筆致を精観するに便せん爲め二部分を大寫したるものなり

神戸 服部一三君藏

(第五百三十八頁參看)



師其 張一三 著

57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62

△圖上並列を留置するに於て、左端の二層板を矢張り

翅一尺三寸正衣謝二尺六寸二分

餘本萍也

卷一百六十 美人類 奕圖 葛蘭北齋并



畫中群  
顏催雁  
西外一  
口出遊

君之紅袖目に  
一て物は  
能舞言二練  
盤云負  
老之生世



高師  
如畫







畫中  
顏催  
外・史  
口出  
日

居之紅地目に四月坐  
一之物子部  
金之煩  
能舞亭二練懸

能舞亭二練懸

高村

高村









第二百七十 鍾馗乘獅圖 葛飾北齋筆

紙本淡彩

竪三尺九寸、横一尺九寸

（第五百三十八頁參看）

神戸 武岡豊太君藏



(雍正百三十八頁卷書)

轉凡 爲國體文雅

三三以此中一以八下

本本新

卷二百三十 脫以與福圖 爲國正書





至江ノ浦  
一ノ巻







第二百七十一 籠渡圖 安藤廣重筆

絹本淡彩

竪一尺四寸七分、横一尺九寸三分

東京 高嶺秀夫君藏

（第五百三十九頁參看）



（東京大学蔵）

東京 高麗書本館蔵

墨一八四七寸長一尺八寸三分

日本書院

卷一百一十一

鑑賞圖 文獻通考















奉り、「圓山應舉」同書に依るに、故老の談には、門地を得むが爲に便宜を。又三井寺圓滿院門跡大僧正祐常二條綱平公三男、號月清、法名無量壽、院安永二年十月廿八日寂、五十一歳に召され、その近習と爲る。同

三井寺三井寺に藏せらるゝ應舉の諸作子群雁圖は明和四年春、難福圖卷は同五年秋、雪之間障は同六年、孔雀圖は同八年、巨瀑圖は安永元年夏に依りて考ふるに、その三井寺に出入せしは、明和中の事なり。

圓山應立家記に「代々圓滿院宮御家來」さあるは應舉以後の事なり。かくて畫名忽ち籍甚し、安永元年後桃園天皇の詔を奉じ、女院御所盛化

門院の御屏風一雙に東山、西山圖、女院御所恭禮門院の御黒戸に荷花圖、大女院御所開明門院御殿の御障子に乗合舟圖及御屏風數雙に四

季山水圖を作る。「圓山應舉」、金子靜枝が六角子爵家の日記に依りて記せるに從ふ圓山應立家記に、禁裏御繪師ヲ務ム、家紋ハ九曜ノ星、櫻町帝ヨリ七五ノ桐（應舉桐と稱して代々家紋とせり、圓井應陽談）ノ御

紋ヲ拜領ス、此應舉已來參内揮毫、名印ヲ免許セラル、官位昇進ノ儀被仰出ル處、後世畫道ノ衰微ニ成ルベクトテ固辭スさあるは、この時の

事ならむ。天明元年又朝命を奉じて、牡丹孔雀圖屏風一雙を畫く。明和乃至天明の頃は四條通高倉東入る立賣中之町に住せり。同町の天明

三年の宗門帳に左の記載あり。「圓山應舉」

天明三、九月

娘 やち

淨土宗門人別帳

下女 いさ

一代々淨土宗

兩山末東九條鳥丸長福寺旦那

智恩院末四條通大宮西入悟眞寺

下男 嘉吉

一圓滿院御門跡家來同居

五條下寺町本覺寺中隆智院旦那

作 右近

家主伊勢屋さい抱屋敷

これに由りて觀れば、當時應舉は既に圓滿院の近習を辭し、その子右近應瑞これに代はりしことを知るべし。天明四年尾張國海東郡馬島

村明眼院の障子今品川益田孝の邸に在りを畫き、同六年初冬紀伊國串本無量寺の障壁を畫き、同七年夏讃岐琴平神社別當金光院今本社務所の鶴之間、虎之間、同

年暮冬但馬國城崎郡大乘寺の山水之間、芭蕉之間の障屏を畫き、同八年丹波國金剛寺の障壁に畫く。同七年の作に係る王義之圖には源應

舉と署せり。源姓を用ゐしはこの頃よりの事にや。同八年四條の家火災に罹り、暫く南禪寺中歸雲院に寓し、その屏障を畫き、又故郷穴太村

に歸り、村內觀音寺の屏障現存すを畫く。「圓山應舉」これより後は姉小路兩替町西入る北側に住せり。寛政元年より二年に亘りて禁裏御造營あり。

命を蒙りてその障壁に畫く。終日黻黼を撤せずして筆を執れりと云ふ。日本繪史日本繪史寛政御造營記に依るに、この時應舉の畫ける所左の如し。

常御殿一之間 襖畫杜審言早春遊望詩之心、御床張付、御袋棚張付、絹張群青引極彩色、畫松上四枚、竹下四枚

仙洞御所御小書院一ノ間 襖耕作物圖、唐畫春夏景、悠雲箔砂子泥引極彩色

御小座敷上之間 襖畫梁苑雪、御床張付、畫同上、御違棚張付、畫同上、御小襖絹張付、畫上、四枚、雄砂子泥引薄彩色

同二ノ間 同秋冬、仕立同上

又雪中山水圖及定家卿十二月花鳥歌意圖を作りて、女院御所恭禮門院に奉る。「圓山應舉」禁裏障壁畫の稿本中早春遊望圖稿は應瑞これを岡村

徽芳に與へ、これを裱装せる幅の中に記して曰く、「先師遷齋翁、寛政年間、奉勅、畫早春遊望圖于便殿、硯口此小粉本、令その數圖は門人植松應令これを得て今に存ぜり。令の



裔植松與右衛門(駿河原驛)これに藏す

寛政五年初冬大乘寺竹之間の障子を書く。この年より歩行漸く艱み、視力亦衰へしが、尙翌六年冬には金光院七賢之間、同七

年夏には大乘寺孔雀之間の障子を書き、以上障壁大抵皆現存す又歿前一月八曲屏風一雙に保津川眞景圖存現を書けり。同年七月十七日歿す。享年六十三。

四條大宮西悟眞寺に葬り、法名を圓譽無三一妙居士と云ふ。岡村徹芳記傳應立家記、悟眞寺過去帳、墓帳及圓山家過去帳墓碑に刻せる源應舉墓の四字は、圓山應立家記に「妙法院

宮座主眞仁法親王御染筆下シ置ル」とあり。應舉京都の儒醫木下萱齋直市の女安永六年九月廿七日歿、法名圓室妙鏡信女、圓山家過去帳を娶り、「圓山應舉及圓二子、一女あり。長子應

瑞、後出づ女子やち京都奉行所御地屋敷同心、櫛橋重左衛門に嫁す「圓山應舉」及季子應受後出づこれなり。岡村徹芳記傳及圓山應舉家譜門人甚多し。竝に後に出づ。その肖像門人四五人の寫せる中最も似たるを以て後に傳ふと云ふ、國井應陽保管及

畫印東山西行菴宮田小文藏尙存ぜり。歿後七年門生等相議りて追薦の展觀を催す。目録あり明治廿七年その百年忌に當り、國井應陽等同志と謀りて、一碑を圓

山公園に建つ。同卅年三月成る。山階晃親王篆額を書したまひ、子爵佐野常民その文を作れり。應舉の逸話甚多し。左に畧これを掲ぐ。



小圖第四十七 山跡鶴筆圓山應舉像

嘗應龜山候之召、道經大枝山、樂其水石、留山中三日、到則侯命畫屏風、乃寫前日所歷山水眞景、奔湍怪巖之勢、絕奇超妙、況其氣韵流動、與境融會、不俾彼嘉陵江圖擅美于古、可謂一大盛事矣。後朝鮮聘使觀其屏風、歎曰、此畫入神、非凡筆所能及。岡村徹芳文化年間記す所、國井應陽藏文書。

相傳、應舉晚年每過街見鷄、駐杖熟視久之、固長鷄畫、如祇園祠步障、觀者莫不嘆美也、而尙如之、宜矣、其得精絕、畫乘要略。

幽鬼の圖を寫せしに、ある婢女晚景に是を見て、氣を失ひしこと、口碑に傳へたり。いづれも妙境に入らずといふことなし。其工夫は壯女の死せる者の面相を見て書き初しと云。其眞蹟を見るに、常の顔面にて眼中に意あるのみなり。(近世名家書畫談)。

天明の頃、金工の名譽ありし長常は、類ひなき上手なり。應舉また畫に於て上手なりしが、智恩院宮家諸大夫、樫田阿波守といふ人、長常に小柄を彫りてよ、應舉に下繪をかゝせんとあつらへければ、長常うけがひたり。因て樫田氏應舉に下繪のこををししかくといひければ、速に畫ておくりし故、即ち長常のもとに持參して與へければ、長常いふ、此下繪にては得はれじといひたり。いかなればと問ければ、我にほらさんどて、應舉は畫の上手なれば、我彫たるかねくせを其儘書たり、惡きたがねくせなれば、常に直さんと思ふ、其癖を彫らんとするは、いと難き事なり、癖を直さんとして、自らくせのほられたるはあるべしと物語れば、樫田氏ものゝ上手の妙なるを感じて、小柄をほらすことを止められたりとぞ。(同上)。

或時應舉に臥猪の圖を乞ふ者あり。應舉未だ目のあたり野猪の臥たるを見ざるに、幸ひ矢背より老婆薪を負ひ、我が家に來る。此事を問ふに、山中にてはたま／＼見ることありと答ふ。因て托して云、汝かさねてこれを見れば、早く來りてわれに告よかし、厚く賞すべしと云やりけるに、月餘ありて、老



婆が家のうしろなる竹林中に野猪來り臥す。老婆是を見るより、速に京に來りてかくと告げれば、舉が云、汝まづ歸りて、必ず驚すべからずとて、速に門人兩三輩を従ひ、矢背に到れば、野猪はなを竹中に臥居たり。舉直に筆をとりてこれをうつし、老婆に厚く物なごゝらせ、其夜吾家に歸る。其後これを寫眞して、後又鞍馬より來る老翁に、臥猪のことを問ふに、山中常に是を見ると云。因て書く所の圖をもて示しければ、老翁これを見て、畫はよしといへども、臥猪にはあらず、必病猪なりと云。舉おごろきて其故を問へば、臥猪は安眠の中といへども、其態度おのづからいきほひあり、僕山中にして病猪を見るに、實にこの畫のごとしといへければ、舉はじめて曉りて、老翁に臥猪の形容を具に問ふ。翁これを説くこと甚詳なり。これに因て、舉さきの畫所をすて、翁の口傳によりて改め寫す。後又矢背の老婆に、さきに見る所の野猪を問へば、老婆云、惟むべし、彼野猪翌朝竹中に死たりと告ぐ。舉是を聞き、いよゝゝ老翁が云しを感じ、ふたゝび老翁の來る時、後に圖する所の幅を示しければ、是ぞ眞の臥猪なりとて、驚歎せしとなり(同上)

予折節其(應舉)宅ニ至テ清談ス。曾テ曰。氣分清爽ノ時、畫ヲ成テ進呈申度ト。予モ又イツニテモ自由ニ調ル事故、晚カラズトシテ不責。然ルニ或時淡彩ノ孔雀ノ畫、六十三歳ノ行年、予ニ呈スルコトヲ題シテ贈レリ。而其翌年病ニ臥シテ、已前ノ如ク畫クコト不能。遂ニ其年ノ内ニ物故セリ(古書備考、話者不明)

應舉初専ラ春畫ヲ畫テ、其寫眞ヲ極ム。其時ノ市令密ニ一卷ヲ畫カシメ、關東ヘ下ス。皆其精絶ヲ賞シ、高賞ヲ以テ其類ノ卷ヲ誂ヘ畫シム。是ヨリ富ヲナセリ。其後鶏ノ繪額(祇園)カ、ゲ、自分ノ上タルニアラズ、寄進ノ主有テナリ。其額大ニ評判宜ク、名ヲ舉シト云フ(古書備考、坦記)

圓山應舉曾て鶏を祇園社頭的神樂堂に書く。一猫來て蹲窺これに迫る。これより應舉特に名を得たり(石亭書談)

京都の骨董商數人合同して一大衝立を作り、以て祇園祠前へ納めんとす。應舉に其畫圖を托す(中畧)圖成つて祠前に掲げ、毎に其傍近を逍遙して、諸人の品評を聞むとす。久うして聽く所なし。偶一老人あり。熟視して云ふ。美なる哉。運筆の妙、將に搏たんとす。然れども其體秋鶏にして然して春草を啄む。奇怪も亦甚しと。應舉吃驚且つ恐懼、群集を排して老人に尾し、其家を訪ひ、禮を厚くして其所以を問ふ。鶏の羽毛たるや、春秋に變化あるを知悉するを得たり。祠前の畫は撤去し、更に季に循いて描けるもの、今現に拜殿に在り(圓山應舉、現在のものは安永五年の筆)

圓山應舉が隣家より火起りけると、常に往來する所司代の家に仕ふる防火丁某、朋輩數人と馳來り、火を防ぎ、其災を免れたり。應舉深くこれを勞ひ、金若干を與へしも受けず。之を強ゆれば即いふ、若寸功を賞し玉は、某の背に一筆描き玉へ、これを刺せしめて、身と共に永く惠を保たむと。應舉止めて曰く。我筆を惜むに非ず、人の身に書くこと快からず、絹に畫きて與へんど。某聽かず。應舉即ち死靈の圖を描く。某即之を刺せしむ。悽怨言はむとす。傳へて遠近に名高し。某未だ之を見るを得ず。會々祇園祭禮の時、社殿寶鏡の中に怨靈の現はれたるに驚き、よく見れば、己が背の刺文なり。其夜より心地悪く、夢寐にこれを見、遂に病となり、狂したるが如し。一僧これを聞き、幽靈の面部を針もてつきつぶし、鏡に寫して見せければ、病癒えたり。因に記す。應舉が妹病死せしが、瘦はてゝ髪もおごろに、色青ざめ、肋骨さへ數へらるゝさまを、應舉は何心なく寫せしに、誰とて怖れぬものなかりしとぞ(繪畫叢誌)

近江國滋賀郡別所村圓滿院に、圓山應舉の精神を凝らして畫きし七難の圖といへるものあり。當時此圖の評判高きを以て、借覽を請ふもの頗る多かりけるが、光格天皇は其往々妄になるべきことを深く惜ませ給ひ、寛政七年九月九日を以て、爾後此卷物は寺門を出すことを禁止せよとの宣命



あり。夫より出門禁止と名づけしとぞ。(同上)

應舉常に門人に教へていはく。凡そ畫圖の術たるや、物象を寫して精神を傳ふるにあり。されば其用意只製作の如何にあるなり。苟も其理に精しければ、名を成すに足りぬべし。儒門にてこれをたとふれば、なほ文士の博覽強記なれば、詞章湧くが如く、行文も亦縱横なるが如し。何ぞ寫字三昧にして止むものならんや。古へいへることあり。紀傳は其事を敘して、其形を載すること能はず。賦頌は其美を詠じて、其像を備ふること能はず。これを傳ふるものは畫圖なり。この故に眞物を寫し、新圖を編するにあらずれば、畫と稱するに足らず。豪放磊落、氣韻生動の如きは、寫形純熟して後、自ら會解するものにあらずや。近世諸家の後進を導くを見るに、概ね古圖を臨倣して、直に己が有となし、名を録し印を下して、自ら耻づることを知らず。却て新意を出すことを禁ず。これ徒に筆墨を弄する者のみ。李杜の詩を題し、人麿、赤人の詠を喟じて、己が肺肝よりすといひて、人を欺くに異らず。識者より見れば、耳を掩ふて鈴を偷むが如く、其弊いふべからずと。(日本繪畫史、圓山應舉亦同じ)

祐常法主管て暑を其庭苑に避く。瀑布のなきを遺憾とす。應舉に命じ、筆下瀑布を落さしむ。樹上にかくるに、銀河の九天より瀉下するが如く、鑠金の炎熱去りて襟懷灑然。(圓山應舉、この畫今存せり)

應舉毎に人に云て曰く。我れ意の如く畫を作らむとす。然れども其資乏しく、人の助くるなし。以て遺憾とする所なりと。豪商三井氏其意を恣にして揮灑せしむ。應舉大に歡び、水筆を以て屏風に向ひ、雪中の松樹老穉二圖を作り、金泥を吝まず之を塗抹し、墨痕金光粲爛相映す。(同上、亦現存)

應舉他に囑せられて武人馬騎の畫を描く。當時大坪本流の達人某之を一見し、歎じて曰く。此畫當流の奥祕を傳ふるものに非ざれば描く可からず。應舉は武家の出身なるか。如何にして此騎法を詳にせると。(同上)

應舉筆小幀西湖圖の賛に曰く。寛政四年、大村侯命瓊浦譯司神代某、令唐山商沈養山、取杭州西湖水來、越前人柴山延良適在瓊浦、請其餘瀝、壺以歸郷、攝平野僧海音、乞其半壺、携之入京、以貽予、々々以其水磨墨作數幅、尙有餘瀝以贈源仲選、以作西湖圖云。皆川愿識。(繪畫叢誌)

世人應舉を誇るに、目に一丁字なく、僅かに皆川淇園に學びて、其落款を寫するに止まると。(中畧)曾て皆川淇園の博聞強記を慕ひ、毎に就て故實を聞き、其技を補益する事尠からず。其年齒に於けるや、應舉は長ずる事一年。玆に於て、學事には尊んで師とし、繪事には教へて以て弟子とす。淇園嘗て詩を賦し、之に贈りて曰く。前代名畫顧陸倫、今觀君筆豈翹臻。其推重せるを見るべし。(圓山應舉)

### 應舉の詩歌及尺牘あり。左にこれを掲ぐ。

貧人多夢神、福人多夢祿、余非貧福人、書畫入夢足。右吳月溪、兄應需、天明二年夏日、源應舉書。(莊子圖自書讚)

說法利生明歷々、心中所行闇昏々、慚愧近世黃衣客、財色纏身上獄門。安永丙申孟秋、應舉書畫。(小津與右衛門藏白藏主圖自書讚)

かげとめてひとり樂しむはるの夜は、花ゆきよりも月はまされり。(老狸鼓腹圖自書讚)

山しろのこまのわたりにおほけれど、ことし初めて三つばかりに。(紫茄圖自書讚)

一筆啓上致候。其後者御疎遠罷過候。秋冷之節、益御靜安、被成御摘、珍重奉賀候。當方無異、乍憚御安慮可被下候。誠御上京後、度々預御懇書ニ殊ニ品々御產物等被贈下、何も調法の御品にて、永々相用、大慶不少奉存候。此方々は猶今御禮御報も不仕、扱々失禮罷過候段、御高免奉希候。然者御息女様此度御



縁御究被成候條、先以目出度奉存候。依而西王母之畫被仰下、則相認進上仕候。御披見可被下候。乍筆末御家内皆々様方ニ宜敷御傳達奉願上候。毎々忤方ニ並ニ雪女方へ御加書並ニ御產物等被下、達聞候處辱、以別紙御禮可申上本意、雪も甚取紛申出計ニ打過候間、吳々自私宜敷申上候而、御執成相賴候。且富士一覽之義、毎々御待被下候條、扱々御厚志不淺、本望之至、忝奉存候。當年は無據惡用にてへ不參候へ共、尙近年之内遂參し、拜見可仕、大慶仕候。雪も同事申上候。尙貴公様にも、御家内御同道被成、御上京の御催奉待候。先以甚取紛失禮、御斷御報旁如是御座候。萬々期拜眉可申上候。頓首拜。

八月十日

圓山主水應(花押)

植松與右衛門様人々御中(應令に與へし書、植松與右衛門藏)

兩度之御懇書、忝致拜誦候。先以當夏ハ御上京に而、多日得寛話、大慶不斜奉存候。乍併大ニ取紛候而、何之風情茂無御座、殘念之御儀奉存候。却而從貴公様御饗應被下、千萬忝仕合、御尊而已申居候。先以御道中無御別條御歸著、御家内様方御堅固に被成、御揃候條、奉大悅候。然者貳幅對畫之義、及延引候處漸先比任出來、表具師へ相渡、此度大津屋へ相渡候。御披見可被下候。右畫圖御先方御思召ニ不應候者、無御勞御登し可被下候。仕立直し可進候。畫は勿論認改可申候間、此旨御先方に吳々御達奉願上候。書餘期拜眉萬々可申上候。頓首。

八月卅日

圓山主水應(花押)

植松與右衛門様

再白。忤へ御書面被下、毎々忝、其外皆々共忝、自私宜敷御禮申上吳候様相賴、乍末筆御家様方に宜敷御傳聲奉願上候。毎々雪へも御端書被下、忝がり候。是も宜しく御禮申上吳候様相賴候。

一。皆川先生之義致承知候。右御園圖相達候處、此頃右圖被携候而、被申候ニ者、右繪圖委候得共、間數、不知候。何卒凡之間、數御書入被遣候様ニ、自私相達吳候様々御座候間、則御繪圖此度返上申候。一寸およそ何げんと申事、御書入被遣候者、早速出來可仕奉察候。早々御登し可給候。右謝物之義ハ可然取計可申候。

一。毎々富士一覽之義被仰下忝、此秋もへ不參候。尙來陽にも相成候者、相催、先達而御案内可申上候。其節乍御面倒宜敷奉願上候。

一。右貳幅對畫之義者、御取次ニ而、畫料等御尋被下候段、御厚志忝奉存候。任御懇意凡申上候。若入御氣候而、御得心御座候者、絹地共金子貳兩一步被下候様ニ奉賴上候。尤御先方如何に思召候者、如何様ニ而も不苦候間、必々是非共申上候而者無御座候。

一。先達而京都御發足之節、相認進上仕候畫等、御拶挨被入御念候御儀共、忝致受納候。乍延引御禮如是御座候。以上(同上)

一。筆啓上仕候。先以其後者御疎遠ニ罷過候。尙薄暑候節、御全家益御靜福被成御座珍重之至、奉賀候。拙方無異罷在候。乍憚御安意可被下候。每度之御懇書、殊更富士海苔澤山に被贈下、遠方之處、何計忝、諸方へも相贈候而、珍重仕候。毎々被懸芳慮下候段、不淺大慶仕候。何分被追筆候而、御報も不仕、扱々失禮、御高免可被下候。右近も別書可差上之處、自私宜申上候様相賴候。きそも御同事申上度旨申候。然者舊年ハ被仰下候小襖之畫、大ニ及延引、無申譯罷過候。漸相認進上仕候。御覽可被下候。若不入御氣候者、無御勞可被仰下候。認改可差上候。先以御答迄ニ如是御座候。書餘期拜眉萬々可申上候。頓首。

卯月十八日

圓山主水(花押)



再白。此度祐右衛門様御上京ニ而、近所ニ御旅宿御座候て、日得貴意候而、御心易相成、大慶仕候。右之節も御懇書被下、此度類焼之御尋忝、御聞及之通、大變ニ御座候得共、下拙義者家内無難ニ相退候而、諸道具も大方ニ相通候間、乍憚御安意可被下候。何卒近々御登京之御催御座候様、奉待上候。

一。此度御賢息御家督之御様子、承知仕、目出度御儀奉存候。尙追々可申上候。以上。

一。先年悴御契約申上候焼鹽一箱進上仕候。早速可差上筈、彼是仕、及延引候得共、任高便候。以上。

小襖龍之書爲御挨拶多、金子貳百疋自祐右衛門様被贈下、先以拜受仕置候。以上、(同上)

應舉の寫生に努力せしこと、及人品、性格の一斑、乃至その終に富士を見ざりしこと植松家傳説等は、如上の逸話、尺牘等にて、明にこれを知ることを得べし。而して今又更にその畫に關する論評の諸書に見えたるものを舉ぐれば、略左の如し。

學石田友汀、迥然出藍、多摸古名蹟、然不敢泥規倣、自開生面、凡花鳥走獸蟲魚、皆寫其生、曲盡其狀、筆姿纖媚、設色之精緻、匠心之微妙、畢顯無遺、兼工山水人物、遂爲一代作者、名馳海内、諸士爭慕之、由是平安畫格一變、(畫乘要略)

應舉專就動植寫其形、故能逼真、至如寫山水、爲形似所縛、全沒真趣、不知山水之妙、在烟靄有無、明暗可摸、不可摸之間、又竊以謂、水墨之人物山水、皆不免爲狩野氏之餘臭、余爲應舉深惜之、(同上、北汀)

古人有言曰、求神韻於形似之外、往昔諸家拘此言、遺形似、徒倣傳來摹本、故畫虎如犬、至鶴雁鳧鴨之屬、其謬尤甚、應舉深歎摸搓之非、專就動植寫其形焉、近世形似之精、過往昔諸家、乃應舉之力也、(同上、梅泉)

京派翎毛花卉、專力寫生、用筆最是柔媚、賦色亦極鮮新、花之正開背面、欲放欲萎者、鳥之刷羽啄蟲、若飛若宿者、春秋曉昏、風雨陰晴、天機所寓、意態情性、一々逼真、無不窮盡、其法雖不古、亦有足觀者、應舉吳春爲最、至山水人物、固不入賞鑒也。

應舉晚秋野草圖、蘭花、葛花、桔梗、天竺、龍膽等、雜卉數十種、離披掩映、青綠粉朱、縱橫塗抹、彩粲奪目、畫成後、再用銀泥亂點、作露花凝結狀、奇想天墜、非其徒所得而企望也、(山中人饒舌)

今世京師の畫家幾百家なるを知らず。然れども、源應舉の糟粕を喰はざる者一人もなし。實に應舉は近世の名手なり。其舊套を脱して新意を出し、人物花卉に至るまで、件々工夫あり。實に千古卓絶と稱すべし。其門に出る者各俊傑の士なり、(逸人書史)

京師ノ畫工丸山主水應舉女鬼ヲ畫クニ名アリ。予ガ藏スル物スグレテ妙ナリ。何ヨリ思フ構ヘテ畫キ初メタリシヤ。見ル人毛髮竦然トシテ慄チ、實ニ神畫ト稱スベシ、(桂林漫錄)

應舉寫生の工夫其妙を得たること、本朝今古及ぶ者なし。しかれ共瀑布登鯉圖を見るに、鯉魚瀑布の中にあれば、登ることを得べからず。これ登鯉の本意にあらずと云者あり。按るに、此圖高田敬輔より出で、棧取魚彦など専ら畫く處なり。その登る所は本意にはあらず共、應舉が畫く所は、其工夫の妙なる、瀑布の中にして形像生るが如く、眞に登るが如くに見ゆ。應舉もとより登鯉の圖を知らぬにはあらざるべけれ共、新意を出して寫せしな



らん(中畧)又江戸本所押上天羅山眞盛寺に應舉が書ける地獄變相圖あり。筆力精神の妙、夢幻のうちに地獄を見るがごとく、筆者は冥府に至りて歸りしものかと疑はる。誠に地獄の寫生なるべし。又人物花卉鳥獸蟲魚に至りても、實によく生動の態をつくせり。是ぞ能手虛を作りても、又よく實とするものなり。近世名家書畫談)

かくの如く應舉の畫は世既に定論あり。その最も成功せるは花木、鳥獸、蟲魚の類にして、山水これに亞げり。吳北汀が應舉の山水を譏りて沒趣と評せしは酷に過ぎ、狩野の餘臭を免れずと言へるも亦當らず。竹田が賞鑒に入らずと評せしは、固より文人畫に偏したる眼識よりせしものなり。縱令その動植物の妙味には稍及ばざる所ありとも、應舉の山水は亦これ前人未發の技風にして、樹石の寫生優に一派の創格たり。花草翎毛鱗介の精巧は實に斯派の本色にして、應舉に由りて始めて開拓せられたる寫生の新手法、復評賞の言を費やすに及ばず。蓋し享保の頃より以降、沈南蘋等の來朝及明清繪畫の輸入に由り、支那花鳥の新派たる明の勾花點葉體及清の常州派支那畫部に精しの沒骨法に屬する諸作等我が國に流傳して、これが先蹤を爲せるあり、以て應舉の著眼を啓發しけむは爭ふべからずと雖も、みづから寫生を勉めてこゝに至りしものなることは、その寫生帖西村總左衛門藏、明和八年乃至安永元年筆を見ても、これを徵するに餘りあり。我が繪畫の逼真の技巧は、實に應舉に至りて、分明に進歩の一段階を登りぬと謂ふべし。狩野、土佐諸派の形式の久しく陳腐に屬し、に當り、この斬新の妙技を出す。その世眼を驚動して名聲宇内に籍甚し、天下の畫人靡然としてこれに嚮ひ、今に至るもこの派の最も盛なる所以、眞に偶然に非ざるなり。その一代の遺作を通覧するに、明和頃の筆は尙幽汀より受けし狩野派の習氣を存せりと雖も、安永、天明の作に至りては、一家の技風次第に圓熟するを見る。たゞ人物畫に至りては、未だ妙境に詣らず。美人の如きは尙佳なりと雖も、道釋、聖賢等に至りては、氣品較々卑しく、その姿態多くは肥膩に過ぎて、頗る應舉自身の像に似たり。蓋し應舉の最も巧なるは、實在寓目の物を寫すに在り。これに反する短所は、理想に依るにあらでは到り難き所に在るなり。されば動物と雖も龍虎の如きは最も劣り、神仙等に至りては全く應舉の到想の境界に在らざるなり。

第二百七十二 圓山應舉筆蓬萊仙奕圖 明和七年

第二百七十三 同筆千代圖 安永二年

第二百七十四 同筆墨竹圖屏風一雙 其一、其二、安永五年

第二百七十五 同筆鯉魚圖雙幅 其一、其二、安永八年

第二百七十六 同筆三笑圖 安永九年



第二百七十七 同筆松鷹圖天明元年

第二百七十八 同筆綠楓巨瀑圖天明七年

名聲の宇内に籍甚せし大家は、遺作を世に留むること多きを常とす。應舉の如きは殊にその一人なり。而も平生作る所大抵年暦を識せるが故に、製作の先後を明知して、畫風の次第に醇熟の境に入れる迹を尋ぬることを得べし。こゝにその佳作の數品を掲ぐ。上に記せる評賞に照し觀て、以てこの大家の面目を窺ふべし。

圓山應瑞

應舉の長子應瑞字は儀鳳、平安畫家名字錄儀鳳に作るは誤なりむ印文儀鳳。明和三年九月十三日生る。初め通稱を右近と云ひ、父の歿後主水と稱し、怡眞堂と號す。父に學びて家風を能くし、殊に砂子を蒔くことを巧にせり。鑒定畫乘要略曰く。守家法と。享和の平安畫家名字錄に出で、文化十年の平安畫工祝相撲には行司の第二位景文の次原に列せられ、同十年及文政五年の平安人物志にも出で、姉小路兩替町西に住せし由見えたり。寛政禁裏造營の時、御常御殿三ノ間薄彩色畫四季海邊及仙洞御所對屋杉戸竹之間西方面表藏虎、裏芦雁を畫けり。文政十二年三月十九日享年六十四にして歿す。法名寔譽彰光應瑞居士と云ふ。墓在信佛寺。綾小路の女こう。天保二年八月十五日歿、六十を娶り、三子、一女。長子應禎、次子應震、季子應春、後に出づ。應あり。

第二百七十九 圓山應瑞筆竹鷄圖屏風

別に自己の特色を發揮せずと雖も、能く謹みて父の風を守り、而も巧麗賞すべきもの、應瑞に於いてこれを認む。若し應舉の子ならずば、或はこゝに至らざりけむも測り難けれどその技巧は亦以て一名手と稱するに足れり。

木下應受

今井應禎

圓山應震

應舉の次子應受字は君賚、水石と號す。通稱直一。外祖父萱齋の養子と爲りて木下氏を冒す。亦家風の畫を能くせり。享和の平安畫家名字錄に出で、文化十年の平安人物志に、兩替町姉小路北に住せし由見ゆ、文化十二年九月六日三十九歳にて歿す。三男三女ありと云へども明ならず。畫乘要略に「早世、人情之」と言へり。その子應夏弘化四年九月六日歿、廿六歳、應夏の子吉造松本氏を冒し姉小路東洞院東入る所に住す現在ありと雖も著れず。應瑞の長子應禎字は君祥、雲峰と號す。通稱善二郎。或曰善石州濱田の城主松平周防守の臣京都留守居今井善四郎の養子と爲り、綾小路烏丸東入る所に住せり。法名釋似貞應瑞の次子應震家を嗣ぐ。字は仲恭、百里、方壺子、星聚館等の號あり。通稱初め辰二郎、後主水と稱す。人名辭書に主馬亮とあれど疑はし、同書は誤り。寛政二年三月一日生る。父及源琦に學びて、家風の畫を能くせり。畫乘要略には「長寫景」と言へり。天保九年の平安人物志に出づ。姉小路室町東、圓山主水天保九年八月三日鑒定便覽には天保十一年二月十七日歿す。四十九歳にして歿す。法名天譽響山應震居士。墓在信佛寺。黒田伊兵衛大宮出水上の女いと七歳、法名珍譽智玉妙瑞夫人を娶る。子なかりしにや、文化四年傳齋應舉、字を叔明と云ひ、應瑞の季子應春、通稱采女、亦家風を學ぶ。天保九年閏四月廿六日四十三歳にて歿す。法名巖譽洞山應春居士。墓在信佛寺。應震の後し者見ゆ、明ならず。を嗣げるを應立とす。字は子道、方壺、嘉永五年平安人物志米齋印畫の號あり。幼名勝治郎、後多都雄、家を嗣いで後亦主水と稱す。實は幽禪染工寺井久次郎

圓山應春

圓山應立



源瑞の門人並の男にして、文化十四年九月廿日生る。禁裏御所官人島田近江守徳直安政禁裏御營造の時、内侍所刀の猶子と爲り、入りて圓山家の嗣たり。嘉永五及慶應三の平安人物志に出づ。姉小路兩替町、圓山主水安政禁裏御造營の時、御學問所山吹御間、山吹、絹張、泥引、砂子、薄彩色御常御殿三御間、海邊、網曳、和歌意、薄砂子、中彩色皇后宮御

常御殿御小座敷下御間附立、泥引、鹽浦等を畫く。當時の平安畫家評判記には、至上上吉飛白九百八十兩として片岡仁左衛門に比し、「此先生は御名

家の跡なれば、世間にて皆知る處、去年ら少々不器用筋にて、些むづかしふ存じ升然し近頃大きに御上達、いつも御大役は御苦勞なれども、

是からは些御功者に成る様に御出精を願升、此業は男の能計りでもいきませぬ」と評せり。げに應立に至りて畫品頗る下りぬ。明治八年三月二日、五十九歳にして歿す。法名讚譽壽山應立居士。應立歿せし時、家貧なりしかば、應瑞の墓に合葬せり。雖も、碑面法名を刻せず。森義章景文門入室、明治十年二月六日歿、四十を娶り、三子、

二人は三女世早を舉ぐ。長子應誠安政五年四月五日生、現在家を嗣ぐ。又猶子森應章妻えいの弟、通稱瀧次郎、畫を應立にあり。以上畫乘要略、平安人物志、古畫備考、寛政御造營記、安政御造營記、

過去帳及國井應陽の談話に依れり。家風益々振はず。應瑞、應受、應震、應立の畫印亦現存す宮田小文藏又十哲出所不明、圓山應舉には源琦、孝敬、蘆雪、徹山、文鳴、素絢、白瑛、鶴嶺、南岳、徹山、守禮、楠亭孝

應舉、應瑞、應震、應立四代の門人甚多し。就中應舉門下の四天王圓山家傳、圓山應舉に出づ。源琦、蘆雪、素絢、楠亭又十哲記し、畫乘要略には應舉の門人として蘆雪、源琦、鶴嶺、南岳、徹山、守禮、楠亭孝

駒井琦字は子韞、通稱幸之助。尺牘署名姓源を稱し、これを以て行はる。畫乘要略に曰く、「學應舉、美人、花卉、鳴禽、走獸、種々能之、彩色麗艷可見、名重一時、惜哉中年歿。寛政禁裏御造營の時、命を蒙りてその障壁に畫けり。墓は三條大宮西入る淨土宗妙泉寺に在り。その碑に刻して曰く、「源琦之墓。君諱琦、學畫於源應舉、遂以名于世。寛政九年秋八月八日歿、年五十一。皆川愿識。」鑒定便覽、名人品、長録及人名辭書等は四十八歳と爲せり。同寺の過去帳には、法名を「然譽黃山源琦禪定門」黃字は經木帳に兼とあり、共に明瞭ならず。と記せり。源琦の傳記は由來詳ならざるに、その同門植松應令後につにに與へたる尺牘植松與右衛門藏に依りてこれを補ふ

ことを得、仍りて左にこれを掲ぐ。

口演

一輪啓上仕候。秋冷相催候處、御尊館御揃被遊、御壯健之旨、奉大賀之至奉存候。當地家内無難に御座候得ども、下拙事、寅年從之病氣未不相勝。當年之大

暑に中り、四月末ヨリ散々不快ニ而、平臥ニ而、畫事とんと不相勤、養生第一ニ罷在候得也、家内、小兒者澤山ニ而、甚々騒敷、養生難致御座候故、六月從大

阪道に楠葉ち中所に一家之寺院御座候に付、山寺ニ而甚々靜成寺院ニ候得者、養生ニ相下申候附、被仰付候御屏風之畫、大延引ニ相成、扱々氣毒千萬、

定而御目出度之御間ニ合兼可申と、甚々恐入奉存候。野生義も田舎に養生參り、漸七月末ニ至、少々全快仕候付、早速上京仕、御屏風相認、漸ク此度相下

申候。片シバ當夏相認置候得ども、不快中不出來ニ御座候故、認替相下申候。余り延引に相成候付、飛脚方相頼、五日切早便ニ申付、差下申候。右ちん銀ハ

半銀御出シ頼上候。半銀ハ京拂ニ申付候。何分病中之義、御高免偏ニく奉希上候。右屏風畫ハ、被仰下候通、手傳不相頼、自筆相認申候事ニ御座候。且

又御小襖之儀も、此度一所ニ相下申度候得ども、御屏風余延引仕、御間ニ合不申事もと奉存候附、屏風計相下申候。御小襖之義者、貳三月之中無相違差

上可申候。



一。書分本之儀被爲仰下、承知仕候所、被仰聞候圖者所持不仕候。いづれ追便に有合候分本取集メ、相下可申候。

一。圓山御氏之儀御尋被爲下、御厚志忝奉存候。扱當主水御義、書道甚々御繁多ニ御座候付、舍中一統甚々以大悅至極仕候。其上古主水死去後、毎月十七日に先生宿ね打寄、書會相催、一夜書之噂仕、甚々相樂申候事ニ御座候。右書會之定者、席書者無御座候得ども、舍中一統打集、家内に而認御座候書、大小ニ不拘ラもち集、相互に善惡申合、稽古專一に仕候故か、却而大先生御滅後、舍中一統大出精仕候。此節ニ至、甚々以繁昌仕候。御案心奉希上候。師家繁昌不仕而者、舍中相立不申も、一統相談、追々御取立而已愚案仕候事に御座候。何卒く少々之御用ニ而も、當主水へ被仰付被下度奉希上候。右之段吳も奉頼上候。尙追々師家之義可申上候。先者右得尊顏之度、草々頓首敬白。

八月十一日

駒井幸之助(花押)

植松 蘭 溪君

植松與右衛門公

益田久五郎公

尊下

口演

一。翰啓上仕候。追日冷氣相催候處、愈々御壯健被爲成、奉珍賀候。隨而小拙茂此節は少々全快仕候。乍憚御案心希上候。然者御屏風、御小襖之畫相下申候。定而相達シ可申も奉存候。且又其節分本差上申候處、其後御尊翰被爲下候節、小襖之圖被仰下候へ共、小襖之圖者無之候得ども、小襖に間に合候圖四枚計相下候。御落手可被下候。何卒く早速御摹寫被下、御返し頼上候。屏風之節相下申候美人之摹寫、入用之儀御座候間、此書狀參り候ハ、早々御登せ奉希上候。御入用ニ候ハ、再下シ可仕候。

寫本目錄記

一芙蓉四十雀 一枚

一早苗ニ鷺 一枚

一柳ニ燕 一枚

一春草 一枚

右之通に御座候以上。

一。御密々御頼申上候御屏風、御小襖畫料之義、御厚志ニ被仰下、畫料まし金被下候趣、千萬忝仕合奉存候。扱又密々御頼之一件、日外從以手紙得御意候通、下拙事も、一昨年從之病氣之上、當年者正二月引籠、漸三四二ヶ月畫用相勤候處、五月中比々引籠、當八月迄一日も畫用不相勤、長病之上ニ而、家内入用ニ大當惑仕候。右ニ付、甚申上兼候得ども、此節大不手廻リニ御座候へ者、何卒く筆料早々受納仕度奉頼上候。大ニ赤面仕候得ども、右之段吳も奉希上候。右之段、御尊大人様ね御汰沙不被下、尊君御心附之躰に被成候而頼上候。吳も奉希上候。まづ者右得尊顏之度、草々頓首。

九月十九日

駒井幸之助百拜

植松賢公尊下



別段得御意候。此節菊花追々見事に御座候はんと奉存候。

扱此方菊之義、當年の大不快にて、とんと不致世話候付、甚々不出來、扱々残念仕候。何卒來春從者出精仕可申候。尊公様ニ珍敷苗も候はゞ、來春御取替仕度候。此方にも昨年四五品よろしき花取入申候。此節不出來にて候得ども、少々咲掛申候。右之趣、尊大人様へ御噂奉希上候。何卒來年ハ菊咲之時節御上京奉待候。

一。圓山氏も追々御繁榮ニ御座被成候。乍憚御案心希上候。尙追々可得貴意候。早々以上。

駒井拜

口演

一。輪啓上仕候。寒冷相催候處、御尊館御揃御壯健御座被成、奉大賀之至ニ存候。誠に日外者御尊翰被爲下忝、早速御返答奉存候處、拙宅に大病人罷在、彼是心配仕候故か、小拙茂病氣不快、此間家内病人少々全快ニ付安心仕候。右之仕合、其上仰被下候寫分本、拙者方ニハ一枚も無御座候付、圓山舍中吟味仕候得共、被仰候圖無御座候。右吟味彼是御報延引仕候ために御座候。甚々氣毒ニ奉存候得ども、右之段御斷申上候。有合申候圖に候ハゞ、早速御用立可申候。且又先比唐美人之圖御用立申候、右之圖兼入用ニ御座候。早速御歸し頼上候。甚々相待申候事ニ御座候。此書中參り候ハゞ、右分本御登せ頼上候。

一。鶴龜之御屏風一雙之畫料、御謝金貳兩壹步、御小襖九老御會釋金貳百疋、右之通忝慥に受納仕候。乍憚尊大人様はよろしく御禮被仰上奉希上候。  
一。御尊家菊花定而見事ニ御出來と浦山鋪奉存候。當方は夏の比小拙大病にて、とんと世話不仕候ニ付、大不出來、甚々殘心ニ奉存候。來年ハ珍鋪菊計少々世話仕候積ニ御座候。何卒尊家に紫紅之類よろしき品御座候はゞ、御無心ながら御登せ奉希上候。此方從も二三品相下可申候。右之段頼上候。先者右得尊顏之度、草々頓首。

神無月廿四日

駒井幸之助

植松與右衛門様

これ等の尺牘に依りて、源琦が寛政六年より病に罹り、同八年一二月又病床に在り、三四月の交少しく癒えて筆を執りしが、四月末に至りて病勢再び重りしかば、六月より楠葉に轉地し、七月末稍治して歸京せしこと、當時生計意の如くならざりしこと、應舉歿後應瑞の爲にその畫門の繁盛を計り、毎月十七日品評會をその家に開きしこと、及源琦の頗る菊花を愛せしこと等を知るを得べし。

## 第二百八十 源琦筆潘妃蓮步圖

應舉門下の中、溫籍明麗の畫趣は源琦に及ぶ者あらず。蓋しその人と爲り順良なりしが爲ならむ。殊に支那美人に長せり。本圖の如きはその有數の佳作にして、流暢の筆致、清艶の姿態、頗る賞すべしとす。



源琦の門人に並河源章あり。圖山應舉文化十年の平安人物志に出づ。通稱を彦兵衛と云ひ、四條高倉西後新町夷川上に住す竹川友廣談に住せり。男來章あり。亦文化人物志に出づ。

長澤蘆雪は源琦と共に殆ど應舉門下の雙絶とも稱ずべし。蘆雪名は魚、字は氷計、書乘要略水計に作るは誤ならむ印文氷計又引裾。文印通稱主計。愚辰錄壯年のころ于洲漁者、又于緝と號し、後應舉の命名にて蘆雪と號す。裝演匠小西榮吉藏書記山城淀の藩士なり。實は同藩水夫か目附の子。竹川友廣來章門人にして、淀の芋洗村に生れ、本氏を片岡と云ふ。小西榮吉舊記長澤家足輕の養子たり。竹川友廣談性才巧に長じ、劍術、游泳、御馬、又水馬音樂等を善くし、又獨樂の戲を巧にせり。中年の頃とかや、藩侯の命に依り、その庭前にて獨樂戲を演ぜしに、過ちて高く放てる獨樂の落ち來るを受け損じて一眼を失へり。此時流血淋漓たるにせず、身は君侯に奉ぜりと

て、尙もその戲を續けむとせしを、近習の者これを止めきと云ふ。竹川友廣談應舉に就いて畫を學び、妙技儕輩を抜く。近世名家書畫談に曰く。

應舉の門人となりて、毎朝淀より京師四條の應舉が宅へ通ふことなり。ある時寒氣甚しく、通路の小川氷りて魚其中にあり。一身とぢられて浮游を得ず。いとくるしげなる形狀なり。蘆雪是を憐みて、救ひたすけんとおもへども、氷下にしていかんともすべきよしなく、そのまゝ京に登り、應舉が家に在て、その晚景歸路に及ぶ頃、かの魚を見しに、朝にかはりて、氷漸々に解け、魚の自在を得てよろこぶ形ありければ、翌日此事を應舉に語られしに、應舉が云、眞に面白い話かな。我が畫も又かくの如く、師に従ふて學ぶこと年あり。其内艱苦の作行つみて、漸々氷の解るを得るがごとく、今は畫の自由を得たりと思ふ處あり。各このこゝろ得あるべきぞ。蘆雪其意をさとて、それより摸寫縮寫の工をつみ、法式丹青設色の工夫鍛煉して、俗をさり、風致を得べきこゝろ怠らず。遂に名手とはなれり。此故を以て、水の内に魚の字の印を用ひ、名とせしとかや。

傳へ言ふ。蘆雪師の破門を受くること三たび。竹川友廣談近世名家書畫談に曰く。

ある時思ふことありて、師より請る處の畫手本をそのまゝ持參して、應舉に直しを乞ふに、是はあしきぞとて、少々直せし故、蘆雪あらたに清畫して、再び直しを乞はれしかば、是にて善しといはれしとぞ。此事によりて破門せしと也。

因みに言ふ。又一度は、應舉の畫きさしたるを、恣に畫き補ひたれば、應舉これを見て、竊にその技倆に感じけれど、一旦破門しぬ。この時源琦の調停にて許されしが、後また破門せらる。その事由は明ならずと云ふ。竹川友廣談

蘆雪は寛政十一年六月八日、享年四十五にして、人の爲に殺されぬ。回向院京都御前通中立賣に葬り、法名を南舟院澤譽長山蘆雪居士と云ふ。同院墓碑

及過去帳、名人忌辰錄その殺されし原因については傳説一ならず。蘆雪諸藝に秀で、立身甚異數なりしかば、儕輩嫉みてこれを殺せるなりとも云ひ、又

藝州侯大いに蘆雪の畫を賞し、淀侯に請ひ、繪師としてこれを徵すことゝ爲りしかば、藝州藩の繪師これを嫉み、大阪に於いて毒殺せりと云ひ、竹川友廣談或は曾て淀侯の命を受け、城殿の障壁を畫きしが、その受命の時、畫き了るまで人の見るを禁ぜられむことを請ひて許されしに、陰にこれを窺ひ見し者ありければ、蘆雪怒りてこれを殺せしことあり。かゝる事より人の怨恨を買ひ、終に非命の死を遂ぐるに至りしなりとも云ふ。確井小三郎談寛政禁裡御造營の時は、御涼所の障壁に畫けり。逸話の口碑に傳はれるもの、尙左の如きあり。



蘆雪曾て四條邊の一蕎麥店に飲食せしが、囊中空しかりしを以て、その障子に獅子を書き、價に代へて去らむとす。店主蘆雪を知らざるを以て大いに怒りしかば、明日その障子を張り換へむことを約してこれを謝しぬ。既にして人の見てこれを賞するあり。店主始めてその名手なることを知り、却りて大いに喜ぶ。後獅子蕎麥とてその名一時に高かりきとぞ。

蘆雪頗る酒を好む。柳馬場錦小路下る東側角に住せし時、一日家の側にて、下駄繕ひの賤工が、業間時々杯を傾くるを見、汝も亦酒を好むかとて、家に引き入れて共に飲めりと云ふ。

曾て應舉の命に依り、代はりて紀伊串本に至り、無量寺の障壁を書く。淹留旬餘に及ぶまで筆を執らず。既にして書成る。村民來りてこれを見るに、書中の一牛、村内一農家の畜ふ所のものに酷似せり。蓋し旬餘畫材を傍近の寫生に求めしなり。蘆雪の畫今尙無量寺に存す。

藝州侯曾て蘆雪に弓を書かしむ。久しくして書かず。侯頻りにこれを促しければ、恐れながら御前に於いて書かむとて、健腕一揮弓弦を作るに、直なること宛も繩墨の如し。一座皆驚かざるなし。これより後大いに侯の眷顧を蒙る。後その家に就いて見るに、弓の畫を習ひたる稿紙山の如くなりきとぞ。(以上竹川友廣談)

ある人蘆雪が畫に細密なるを見ず、描ことを得ざるやといふをきゝて、蘆雪方寸の内に百鳥を書きしに、眞に應舉に劣らずとて歎息せしとぞ。(近世名家書畫談)



小圖第四十八  
蘆雪筆五百羅漢圖

蘆雪平生豪宕なる大畫に長じ、時に或は蚤一疋を全紙に大寫し(大阪井上氏藏、蟻一疋を尺五の絹に揮灑する等大阪加島氏藏、奇矯を弄して人を驚かすこと珍しからず。一日畫會を催し、朋輩相集りて、蘆雪に細密の畫を出陳せんことを求む。蓋し蘆雪の平生に徴して細畫を能くせざるべきを期したるなり。蘆雪即ち期に至り、方寸の楮片に五百羅漢を圖して、精細纖密を極め、一座をして驚倒せしめたりと云ふ。(美術之日本、古畫縷々記)

因みに言ふ。前出名家書畫談の百鳥は、或は五百羅漢の誤傳か。五百羅漢圖(小圖第四十八)は今泉州岸和田大槻與三郎の所藏に存せり。

蘆雪曾與皆川淇園相謀、於祇園境內某寺院作畫、淇園題讚、人爭而買之、數日而獲若干金、輒相與上娼樓、招妓張宴、劇飲徹曉、所獲黃金皆盡囊而歸(畫乘要略)

因みに言ふ。蘆雪が淇園と親善なりしことは、山中人饒舌にも見ゆ。曰く、皆川翁之於蘆雪、中畧終身愛許、稱贊不措。

### 蘆雪の尺牘

植松與右衛門藏

あり。左にこれを掲ぐ。

一筆拜呈仕候。春暖日に相増候得共、愈御安康ニ可成御座と、珍重に奉存候。然バ此間御頼被遊候八枚人物押繪出來いたし、爲持差上候。御約速之通、金子壹兩此者の御渡し被可下候。外ニ唐紙料貳朱。

金壹兩と貳朱

三月七日

(上書)押畫八枚と外に横物二枚

長澤蘆雪



第二百八十一 長澤蘆雪筆孔雀圖

源琦の溫籍に反して、應舉門下中腕力の縦横健跋を以て最も勝れたるを蘆雪とす。亦これ蓋しその人の性格に由るものなり。嚴島神社の山姥圖扁額の如きは、その著きものなり。本圖亦以て技風筆致の一斑を觀るに足る。

長澤蘆洲

蘆雪の義子蘆洲、名は鱗、字は吞江、文政五年平安人物志華山院家の臣たり。竹川友廣談享和の畫家名字錄に出で、文化の平安畫工視相撲には、東前頭二段目の

長澤芦舟

第二位柴田義董の前に列せられ、文政十五年及天保九年の人物志にも見え、畫乘要略には「傳家學」とあり。柳馬場四條北に住す。人物志弘化四年十月廿九日、享

長澤芦舟

年八十歳鑒定便覽には廿四にして歿す。日向院墓碑及過去帳に依る、長澤累世遺印譜及名人忌辰錄は忌日を廿四日、享年を八十一歳と記せり。長澤蘆舟と

云ふは傳記明ならず。長澤累世遺印譜には長澤蘆舟の印を蘆洲の印と雜載せり。されど日向院に「善岳松壽蘆舟信士五十回忌」明治四十四年六月十七日山下貞建之

長澤蘆鳳

と刻せる碑あるに考ふれば、安政六年に歿せし人なり。安政禁裏御造營の時、皇后宮參内殿北御椽座敷西方杉戸東面須磨西面を畫けり。安政建之

長澤蘆鳳

尙後考を期す。蘆洲の男蘆鳳、名は道一、字は貫夫、父に學びて畫を能くせり。遺印譜及人物志安政禁裡御造營の時、常御殿次之御間、障子襖畫樣

宮常御殿次之御間海邊松、中彩色を畫けり。安政新内裏當時の平安畫家評判記は「上々吉飛々吉は七百三十兩として嵐冠十郎に比し、此先生は何にてもし障子襖畫樣

つかりと出來升、いつも御出精は御苦勞く」と好評せり。嘉永五年の平安人物志に出で、柳馬場四條南に住せし由見えたり。後祇園石段下

に住す。竹川友廣談明治四年八月一日遺印譜は七月廿九日と爲せり、今回向院墓碑及過去帳に依る。歿す。享年六十八。遺印譜法名澤岸蘆鳳、身長高からずと雖も肥滿せり。酒を好みて操行

山口素絢

修まらざりきと云ふ。竹川友廣談蘆雪、蘆洲、蘆舟及蘆鳳の印共に現存す。某藏長澤累世遺印譜小西榮吉編これを載せて小傳芦舟をを錄せり。

山口素絢

源琦の支那美人に對して、邦俗の美人を畫くに長ぜしを山口素絢とす。素絢は京都の人、字は伯後、山齋と號す。通稱武次郎。畫乘要略、文化十年平安人物志祇園

山口素絢

小路袋町に住せり。文化十年人物志文化の平安畫工視相撲には、西前頭の第二位佐久間草偃の次、山跡鶴嶺の前に列せらる。嚴島繪鳥鑑に文化九壬申季夏素絢の畫きし

山口素絢

俵藤太圖の扁額あり。畫乘要略に曰く、「師應舉、善邦俗婦女及雜畫、有畫譜行于世。」文政元年十月廿四日享年六十歳にして歿す。傳へ言ふ、發

山口素絢

狂してみづから井に投じて死せるなりと。小西榮吉談その畫印一現存す。宮田小吉藏

第二百八十二 山口素絢筆孔雀圖

素絢邦俗の美人を以て殊に名ありと雖も、花鳥亦妍麗を極む。本圖以てその技風の概を觀るべし。

素絢の門人

素絢の子に素岳辭書あれど著れず。門人畫乘要略に從ふ矢野夜潮あり。名は正敏、字は仲觀、寫景に長ぜり。畫乘要略或は曰く、松村月溪に學び、花鳥を能くす



森徹山

こ人名文化十年の平安人物志に通稱長兵衛、姉小路大宮東、文政五年の人物志には通稱物集女、四條堺町東に住せし由見えたり。

森徹山諱は守眞、字は子玄、森徹山藏寬齋徹山肖像題記明治六年夏三十三回忌精齋紀廣繁浪華の人。森狙仙の兄周峰の子にして狙仙の養子たり。狙仙曾て應舉の畫を見てその技

に感じ、徹山をして就いて學ばしむ。應舉晩年の弟子なり。森雄山談畫乗要略に曰く、學應舉稍變、長人物、兼工花木禽獸、用墨秀潤、名噪浪華。文化四

年の浪華畫人組合三幅對に「大ッ丁、同狙仙男徹山應舉門人」とあり。浪速人傑錄に「狙仙先生之子を徹山と稱す。是又近代畫名高く」とあり。肥後侯曾て

徹山の技を賞して祿を賜ふ。肖像題記家は大阪に在れど、多くは京都佛光寺堀川に居りき。天保十二年五月六日歿す。歳六十七。佛光寺大宮西入

る歸命院に葬る。墓は又大阪北區天滿西寺町西福寺にも在り。法名を清鑒院奏岳徹山居士と云ふ。佛工田中氏の女名はえん、その妹を娶り、二子

二女藏之妻田中氏を嗣ぐ、りう一鳳の妻、進之あり。門人一鳳をその一女に配して大阪の家を嗣がしめ、京都の家をば門人寬齋に嗣がしむ。徹山平生狸

などの類を畜ひてその寫生に力め、特に動物に長じ、又好みて獅子、虎等を塑せり。森雄山虎人と爲り謹直にして、深く兒を愛し、みづからその

第二百八十三 森徹山筆松鶴圖

徹山は狙仙の後を嗣げりと雖も、畫風は全く圓山派にして狙仙に似ず。本圖明にこれを徵すべし。まして應舉門下十哲の一人に數へられ、徹山の後亦皆同派に屬するを以てこゝに編す。

徹山の門人  
森一鳳

徹山の門人には一鳳、寬齋の外、東溪、江州樵谷の淡路の人等あり。一鳳は通稱文平。辭書安政禁裡御造營の時、御涼所取合御間五帖、松嶋居上張付山に小松及腰

障子張付上同を畫けり。明治四年十一月廿一日、七十四歳にして歿す。大阪西福寺に葬り、法名を松景院綵譽一鳳居士と云ふ。酒を好みて爲に

渡邊南岳

命を殞せりとぞ。一鳳の門人に木村二鳳、堺の森關山等あり。寬齋明治廿七年六月二日歿、八十一歳、靈山に葬るは明治の一大家なり。傳記は森大狂著近

渡邊南岳通稱猪三郎、人名又小左衛門。圓山家名は巖、字は維石、京都の人なり。畫乗要略畫を應舉に學ぶ。同或は源琦圓山應舉古畫備考千春話又は吳春古畫備考の門

人なりとも云ふ。然れども圓山家過去帳に記載せれば、應舉の門人と云ふを正しとすべし。文化の平安畫工視相撲には、東前頭の第二位禮の次、規の前

得名者、兩人嘗與江都一畫工同於某侯席上揮筆、侯素愛一畫工、三人齊下筆、某作米家山水、南岳徹山俱寫人物花禽魚蟲數幀、須臾而成、筆端秀

逸、墨汁淋漓、滿坐嘆賞、而後米點山水漸成矣、侯顰眉有不悅之色、此事傳聞之話、未知虛實、姑記備一粲。梅泉古畫備考に曰く、江戸へ下り、三年逗留、

其内甚行ハレ、歸京ノ節、金三百兩持上ル云々、其後數年アリテ没ス。南嶺、椿年ハ皆江戸ニ有シ時ノ門人也。天保二、八十、七田中氏話晚年明を失し、川端玉文

南岳の門人  
大西椿年

化十年正月四日歿す。法名釋南岳信士。圓山家過去帳享年四十七。忌辰錄、人南岳の義子衡岳名は千舟は豐彦の門人なり。

南岳の門人にては大西椿年、中島來章の二人最も著れたり。椿年は江戸の人、圭齋の子、字は大壽、楚南と號す、又運霞堂の別號あり、通稱を行







未だお若い、御出精なれば花方になられませふ」と評せり。

孝敬の門人  
駒井孝禮

孝敬の門人に駒井孝禮源瑞の子かあり。字は季和、桃堂と號す。通稱文吉、烏丸綾小路南に住す。嘉永五年人物志安政禁裡御造營の時、御學問所御三間中

段加茂祭、砂千彩色を畫けり。萬延元年五月十八日歿す。墓は耳塚通正面上る所の淨土宗稱名寺に在り。法名桃譽、駒井孝禮居士。牌位戀づくしには、瘡

かきの戀、どうもうけにくひではないか」と評せり。されど平安畫家評判記には「上上吉下二字飛白八百兩」として中村雀右衛門に比し、「此先生は

手澁い事が能出來升、何にてもお力が見えて、中々しつかりと出來升、元來御上手筋なれども、世間に左程に申升ぬは残念く、いつも御出

精なる故、追々立者になられませふ」と評せり。

八田古秀

八田古秀名は希賢、字は子瑩。忌辰錄古秀、古藤字子瑩に作る、誤ならむ通稱宮内、京都の人、富小路姉小路南に住す。文化十年人物志、享和二年塙トアリ法橋に叙せらる。古畫備考文化の平安畫工

視相撲には、西前頭二段目の初位に列せられたり。畫乘要略及古畫備考は村上東洲の門人と爲せれど、圓山家過去帳にその法名を記せれ

ば、應舉の門人忌辰錄人、名辭書にして、後應瑞に就けり。圓山應舉と爲すを正しとすべし。文政五年九月五日歿す。法名篤行院至道孝我古秀居士。圓山家過去帳

古秀の門人  
福知白瑛

古秀の門人には閨秀玉韞及福知白瑛。畫乘要略知を、智に作れりあり。文政五年の人物志には「初音白瑛二條界町西、福地白瑛」同十三年の人物志には「錢郁春、字士文、號白瑛

玉韞

福知長藏、天保九年の同書には桂中樓と號し、鯉鱗畫譜、有馬紀行の著ある由見えたり。畫乘要略に曰く、「平安人、師八田古秀、作山水人物花鳥、筆法勁秀、不

玉韞

色又頗巧」。或は曰く、初め應舉に學べり。圓山應舉玉韞の小傳は畫乘要略に出づ。曰く、「名豐子、備後人、師八田古秀、作山水人物花鳥、筆法勁秀、不

以斌媚爲工也、名著三備間。」

山跡鶴嶺

山跡鑒定、便覽等、山崎作るは非ならむ鶴嶺名は義淵、字は君魚、浪華の人、京都に住す。應舉に學び、花禽草蟲を善くす。畫乘要略文化の平安畫工視相撲には西前頭の第

三位素絢の次、誦言の前に列せられたり。文化十年の平安人物志には烏丸四條北に住せし由見え、文政五年の人物志には佛光寺柳馬場東に住せし由

見えたり。同十三年の人物志にはその名見えざれば、當時既に歿せしならむ。

奥文鳴

奥文鳴名は貞章、字は万禪、通稱順藏、陸沈齋の別號あり。京都の人。畫乘要略及日本繪畫史或は曰く、赤松氏、名は貞章、字は伯瀨、栖霞と號す。古畫備考、字錄を引く能畫なり

しが惜哉早く歿せり。備考畫乘要略に曰く、受業於應舉、謹守其法、精密細工有師風、嘗寫源氏譚圖、賦色美麗、布置有來歷。」

龜岡規禮

龜岡規禮字は子恭。畫乘要略通稱喜十郎、大宮元誓願寺南に住せり。文化十年人物志西陣の人なり。國井應陽談、素絢の傳、陽談平安畫工視相撲には東前頭の第三位南岳の次、に列

せられ、文政五年及十三年の人物志にも出でたり。井に投じて死せりと云ふ。國井應陽談、素絢の傳、説と相似たり、混同か

土岐濟美

土岐濟美姓は源、名は瑛昌、字は伯華、京都の人。應舉に學ぶ。畫乘要略龜溪と號す。葦屋町上立賣北に住せり。文化十年人物志平安畫工視相撲には西前頭二

段目第四位上田耕夫の次、白猷の前に列せられ、文政五年の平安人物志には上長者町釜座西、同十三年には中長者町新町東に住せし由見ゆ。

西村楠亭

西村楠亭名は豫章、字は士風、京都の人なり。畫乘要略文化十年の平安人物志に出で、新町佛、光寺角文化の平安畫工視相撲には東前頭の初位小結島田元直の次、南岳の前に



列せられ、文政五年、綾小路同十三年室町西路同十三年住所同上、楠亭書譜の人物志にも出でたり。畫乗要略に曰く、學應舉、運筆放逸、善邦俗人物、有畫譜行於世。應舉の歿後

應瑞の門人たり。圓山應舉嚴島繪馬鑑に楠亭が文化八年十一月畫ける玄徳檀溪圖の扁額あり。天保五年六月廿日歿す。歳六十人名辭書及日本繪畫史、鑒定便覽は八十歳とす

白井直賢字は子齊鑒定便覽は應舉に學びて雜畫を善くし、又畫鼠に工なり。應舉に學びて雜畫を善くし、又畫鼠に工なり。應舉通稱仲八郎、京都の人。人名辭書、畫乗要略に曰く、直賢之畫鼠、祖仙之

畫猿、各能究其形似、精巧可觀也。祖仙名著一時、直賢寥々無聞、蓋亦有幸不幸也已。余恐其名湮沒、故爲標出。泉梅

島田元直字は子方、子玄と號す。京都の人。應舉を師とす。畫乗要略、鸞洞文化十年又後素軒の號あり。從四位下主計頭に敍任せらる。人名辭書、寬政禁裡御造

營の時、御寢間二ノ間畫唐人梅花詩之心及仙洞御所夜御殿水、懸雲取砂子、泥、引極彩色を畫けり。文化の平安畫工視相撲には東小結に列して島田主計頭紀元直と記し、

文化十年の人物志には蛤御門前に住せし由見えたり。

山本守禮字は子敬、通稱數馬墓誌及畫乘要略久珂墓誌又猶亭忌辰と號す。忌辰錄及人名辭書に名は豫章字は子鳳とあるならむ本氏龜岡、後山本と改む。墓誌京都の人なり。忌辰錄幼

より畫圖を好み、墓誌應舉に學びて畫乘要略終にその妙を究め、墓誌殊に人物に長ず。辭書寬政二庚戌春二月廿六日歿す。享年四十。墓誌、忌辰錄及辭書は、天保五年六月廿日歿、享年八十と爲せり

その墓は城北妙道寺に在り。龜岡規禮の建つる所にして墓誌を刻せり。蓋し規禮と同族か。

佐々木應祥通稱與十郎、備前の人なり。傳齋翁追薦展觀畫錄世往々誤りて、圓山應瑞の男古畫備考と爲す。

岡村鳳水は伊勢人名辭書曰南勢の人、通稱左膳、名は徽芳。傳齋翁追薦展觀畫錄曾て文化中その師應舉の傳國井應藏を作れり。天保中歿す。人名辭書と傳ふれども、徽芳が天

保十二年九月記せし文應舉傳中あり。文學にも通ぜりしと見ゆ。

上部菑齋名は光濟、字は士海、雅樂助と稱す。松風畫屋、紫芝翁の別號あり。伊勢外宮の祠官にして、正四位下に敍せらる。應舉に學びて一格を

成せり。文化年中の人。人名辭書

植松應令諱は季英、字は伯綽、孚丘又蘭溪と號す。幼名伊勢松、後通稱を與門七と云ひ、家督同家第七代、享和三年正月を嗣いで後與右衛門代々と稱す。駿河

原驛の素封家なり。安永三年正月二日生る。幼より畫を好む。天明六年父與右衛門その作れる墨畫二幀を應舉に寄す。應舉その畫面に、此二

枚之繪一覽候處、甚ダ宣敷手筋ニテ手練被成候ハ、隨分發達可相成也奉存候、主水、與右衛門様と記してこれを返寄す。現仍りて翌年三月

上京して應舉の門に入り、爾後年々一兩度上京して教へを受け、妙心寺に寓して斯經和尚に參し、或は皆川淇園等と交り、又謠曲及小鼓を

學びてこれを善くせり。既にして以爲へらく拙畫を作りて世に遺さむよりは、寧ろ妙手の作を弄びてこれを樂むに如かずと。四十歳以後

終に筆を丹青に絶ち、祖先遺愛の盆栽を培養するを事とせり。天保二年正月五日歿す。享年五十八。同驛德源寺に葬り、法名を閨苑孚丘居士

と云ふ。前出應舉、素綯の尺牘等參看すべし、同家又應瑞が父の死を報じ、贈賻を謝したる書狀をも傳へ載せり

春舉は畫乗要略に「阿波人、師應舉、采色明麗」とある外、傳記明ならず。



別所友賢

別所友賢は應舉晩年の弟子なり、書を能くするを以て、常に師に命ぜられて代りてその落款を書し、印をも押しけり。こゝを以て問ふ己の書にもこれを用ゐて、詐りて應舉の書と爲せりと云ふ。諸人傳補遺。その子東溪、孫友溪相次いで應舉の贋作を事とせり。傳へ言ふ。應舉歿後七年の追薦展觀の時、師の傑作として第一位と賞せられし西園雅集圖は、東溪の贋作にして、時に東溪みづからこれを語り、門下の眼識なきことを嘲りしとぞ。「圓山應舉」古畫備考は吳春の弟子とし、人名辭書は豐彦の弟子とす。文化十年の平安人物志に「別所東溪富小路三條北、別所金五郎」とあり。

應震の門人  
島田雅喬

應震の門人には上出の來章の外、東長月後に圖司に作る、南峰、島田雅喬及國井應文「圓山應舉」あり。島田雅喬字は子秀、桃嶺と號す。越前大椽に任ぜらる。釜座二條北に住せり。天保九嘉永五及慶應三の平安人物志に出づ。安政禁裡造營の時、御涼所裏御間襖、床張付及鴨居上張付、四季草花群蟲墨繪泥引皇后宮常御殿申口之間十七帖櫻、薄彩色を畫けり。當時の平安畫家評判記に「上上土「吉字の上」畫飛白、五百兩」とし、中村仲助に比し、「此先生はかつたりと能出來升、お茶もある至極お人柄じや」と申升と評せり。國井陽文は應震の妹やすが子なり。父を良伯醫師と云ふ。京都の人。天保四年生る。辭書安政

國井應文

圖司南峰

禁裡御造營の時、御小座敷落長押間山水、墨繪を畫けり。平安畫家評判記に「上飛白三百兩」として淺尾市松に比し、隨分御修業を御出精なされませ、追々上達で御座り升と言へり。應文の姉ますは應立の門人岡村雪蓬に嫁す。應文の養子應陽現在せり。圖司南峰は京都の人、辭書文政五年及十三年の平安人物志に出で、西洞院姉小路南に住せし由見えたり。

應立の門人

應立の門人には前出森應章の外、尙野村訥齋、木村幹山、岡村雪蓬、星野蟬水、森直愛、山本桃谷「圓山應舉」等あり。



第二百七十二 蓬萊仙奕圖 圓山應舉（明和七年）筆

絹本着色

竪五尺六寸九分、横三尺一寸七分

京都 林 新助君藏

（第五百四十八頁參看）





（一）  
（二）  
（三）  
（四）  
（五）  
（六）  
（七）  
（八）  
（九）  
（十）  
（十一）  
（十二）  
（十三）  
（十四）  
（十五）  
（十六）  
（十七）  
（十八）  
（十九）  
（二十）  
（二十一）  
（二十二）  
（二十三）  
（二十四）  
（二十五）  
（二十六）  
（二十七）  
（二十八）  
（二十九）  
（三十）  
（三十一）  
（三十二）  
（三十三）  
（三十四）  
（三十五）  
（三十六）  
（三十七）  
（三十八）  
（三十九）  
（四十）  
（四十一）  
（四十二）  
（四十三）  
（四十四）  
（四十五）  
（四十六）  
（四十七）  
（四十八）  
（四十九）  
（五十）  
（五十一）  
（五十二）  
（五十三）  
（五十四）  
（五十五）  
（五十六）  
（五十七）  
（五十八）  
（五十九）  
（六十）  
（六十一）  
（六十二）  
（六十三）  
（六十四）  
（六十五）  
（六十六）  
（六十七）  
（六十八）  
（六十九）  
（七十）  
（七十一）  
（七十二）  
（七十三）  
（七十四）  
（七十五）  
（七十六）  
（七十七）  
（七十八）  
（七十九）  
（八十）  
（八十一）  
（八十二）  
（八十三）  
（八十四）  
（八十五）  
（八十六）  
（八十七）  
（八十八）  
（八十九）  
（九十）  
（九十一）  
（九十二）  
（九十三）  
（九十四）  
（九十五）  
（九十六）  
（九十七）  
（九十八）  
（九十九）  
（一百）

第二百二十二 養樂山樂圖 圓山瓢壺

繪本卷四

京都 林 謙 恒 作 藏











第二百七十三 千代圖 圓山應舉(安永二年筆)

紙本淡彩

竪三尺一寸七分 横一尺二寸八分

東京 侯爵松方正義君藏

(第五百四十八頁參看)





(雍正年間十八頁參書)

東京 羽田神社五藏書藏

總三只一廿小長冊一只二十八卷

冊本附錄

卷二百三十三

午升圖

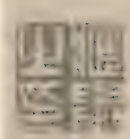
圓山觀景

(四十一卷)  
二  
章





癸巳仲秋平安應舉戲圖









第二百七十四 墨竹圖屏風一雙 圓山應舉（安永五年）筆

紙本水墨

各竪五尺三寸橫一丈一尺六寸六分

京都 圓光寺藏

（第五百四十八頁參看）





(雍正年間十八頁繪畫)

京都 圓光寺藏

分寫正只三十冊一丈一尺六寸六分

據本水學

卷二百三十四

墨竹圖報風一雙

圓山懋舉(四十四歲)筆



















第二百七十五 鯉魚圖雙幅 圓山應舉（安永八年四十七歲）筆

絹本着色

各豎四尺二寸五分橫一尺八寸三分

伊勢國松坂 小津與右衛門君藏

（第五百四十八頁參看）





（附註）此書十八卷

增補圖書 小書房在兩門內

香港四馬路二十五號（即八十八號）

備本亦在

卷二百五十五

臘魚圖雙譜

四山臘魚





應舉寫









安永己亥蘇春富  
鹿栄







第二百七十六 三笑圖 圓山應舉（安永九年）筆

紙本着色

竪四尺二寸七分、横一尺六寸八分

近江國長濱 中村寅吉君藏

（第五百四十八頁參看）





(續正百四十八頁卷終)

張氏圖註 中林實吉書藏

總四只二七寸長銀一尺六寸八分

銀本善也

續二百十六

三笑圖

圓山瓢舉(四十八寸)筆



庚子仲夏寫

應舉









第二百七十七 松鷹圖 圓山應舉（天明元歲）筆

絹本淡彩

竪三尺三寸五分 横一尺三寸四分

東京 加藤正義君藏

（第五百四十九頁參看）



（東京）

東京 敬愛堂書店

第三八三號 全一冊 二四卷

神本齋

第二百三十一

總圖

圓山

總圖





天明紀元辛丑孟秋寫

應舉







第二百七十八 綠楓巨瀑圖 圓山應舉(天明七歲)筆

紙本淡彩

豎六尺、橫三尺五分

京都 西本願寺藏

(第五百四十九頁參看)





(續正百四十八頁卷)

京辭 西本願寺藏

廻六只謝三只正衣

源本齋津

卷二百十八

絲厨豆綴圖

圓山應舉(正百四十八頁卷)



荒初維分銀漢水萬懸山壁破崔嵬雷振雨聲長住  
星斗遊雲光亂飛浪濤萬潭翻巨石寒欺六月楓重衣  
人間千載有樂父獨傍茲流洗耳歸 晉川魯題

天明丁未仲冬寫  
應舉









第二百七十九 竹鷄圖屏風 圓山應瑞筆

紙本金地着色

竪五尺四寸一分、横五尺六寸二分

京都 西川幸兵衛君藏

（第五百四十九頁參頁）



（續正附四十八頁）

京 郡 新 田 寺 興 隆 寺

經正八四七一卷附正八六十二卷

藏本全冊錄出

卷二百六十六 竹園圖報鳳 四山漁獵











第二百八十 潘妃蓮步圖 源琦筆

紙本淡彩

鑒三尺六寸六分橫一尺五寸

駿河國原 植松與右衛門君藏

(第五百五十二頁參看)





(卷一百一十二 雜著)

御所圖景 附刻與本津門寺圖

卷三 弘治十六年十一月正

繪本

卷一百八十 龍城遊記圖 萬曆

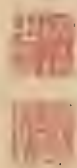




贈

原驛蘭溪植松君

源琦寫









第二百八十一 孔雀圖 長澤蘆雪筆

絹本着色

竪五尺五寸五分横一尺八寸一分

大阪 坂上新治郎君藏

(第五百五十五頁參看)





(續前百五十五頁)

大綱 皇土沿革圖

皇正列正世正統圖一六八七一

日本書

卷二百八十一

并附圖 皇統圖











第二百八十二 孔雀圖 山口素絢筆

絹本着色

竪五尺二寸六分横二尺一寸四分

東京 男爵岩崎小彌太君藏

(第五百五十五頁參看)





(續前冊第十頁續)

東京 農林部 小園 大井

續正八二十六卷 二八二七四卷

附本卷

卷二百八十二 丘壘圖 山口素齋











第二百八十三 松鶴圖 森徹山筆

絹本淡彩

竪三尺六寸八分横一尺七寸

東京 川崎金三郎君藏

(第五百五十六頁參看)





三才圖會卷之八

東京 川崎堂三郎書

三才圖會卷之八

附本圖錄

卷二百八十三 附圖 森端山











## 第七章 四條派

四條派は吳春を祖として景文、豐彦等の名手を出せりと雖も、畫風由來圓山派に酷似し、獨り吳春が燕村、應舉二家の風を併せ傳へて一家の別調を具するに過ぎず、末流殆ど全く圓山派に同化し、視て以て圓山派の旁出と爲すべきものなり。然れども、師資の傳統おのづから別に一系を爲せるが故に、在來の稱呼に従ひて本章に別叙す。

吳春

吳春は京都の人。本姓は松村、號は月溪。この號は初初め名は豐昌、字は裕甫、通稱を文藏と云ふ。既にして姓を孫、名を石、字を可轉又進之、又氏名を存白、元明字を允白と改む。神交及稻東芝馬孫及存は松村二字の切なり。中ごろ攝津吳服の里田池に居りて髪を削り、吳を以て氏とし、名を春、字

を伯望と改め、年春終に吳春を以て聞ゆ。猴子、拙阿彌陀佛等の別號あり。その居を蕉雨亭、百昌堂と云ふ。父名は匡程、母は井上氏。兄弟六人。吳

春その長たり。古畫備考田中氏語寶曆二年三月十五日生る。幼にして畫を大西醉月望月玉鑾の門に學ぶ。古畫備考に曰く「大家トナリテハ無」時に燕村の名天

下に鳴る。仍りてその門に入る。以上吳春の七回忌京極大雲院遺墨展覧文化十四年三月十九日の時録したる流芳遺事金福寺藏に載燕村歿後應舉の畫風を喜び、就いて

業を受けむことを請ふ。應舉これを辭して莫逆の友となる。これより吳春の畫風一變せり。畫乘或は曰く、應舉吳春に勧め、文人畫にては、禁

裏御用の畫など作る時、その選に入り難しとて、その畫風を改めしむ。翌日よりして作る所忽ち一變せりと。古畫備考、要するに吳春が當時盛

名宇内を壓したる應舉の風化を受けしは事實なり。四條派こゝにその格を成せりと謂ふべし。屢々命を蒙りて宮中の屏障を畫く。吳月溪傳

安政新内裏障子襖畫様に、皇后宮常御殿一御間御小襖上四枚海邊遠景、下四枚濱邊殘雪は、故松村月溪の筆なる由見えたり。大佛妙法院宮の寵眷を蒙り、畫法を

教へ奉る。古畫備考大通寺文化八年七月十七日、享年六十にして歿す。城南大通寺に葬る。景文の墓と共に、明治廿二年九月廿九日、蘇川曾文、國分文友等これを一乘寺

たがこれに埋む名家歴訪錄、蘇川曾文燕村に學びて俳句を能くし、又少時曾て村瀬栲亭に従學せり。吳月溪傳植田氏を娶り、子なし。季弟景文後を嗣ぐ。吳春の

の畫きしもの絹本高池田は吳春の約十年間居住せし地なるを以て、吳春に關する傳説の口碑に存するものあり。これに依るに、吳春は尾張に生

れ、京都金座後藤氏の手代たりしが、天明の初めとかや、後藤家闕所と爲りしかば、燕村の俳諧の門人少からざる。山川庄左衛門(瀧酒家、俳號星府、井關

服實、俳縁を以て、徙りて池田に居る。池田は當時蹴鞠及俳諧頗る流行し、俳諧の會に三椀講あり。吳春亦その一員たり。蹴鞠座配錄及三椀講

の會宴の献立等を記せる吳春筆迹の薄冊尙存せり。繪畫の遺作のこの地に存するもの亦少からず。後居を京都にトし、四條富小路に住す。

その頃の製作を、世に富小路出来と云ふ。稻東芝馬太耶多く吳春の畫を藏す、この傳説も同氏の書簡に依れり吳春の逸話の諸書に見えたるもの略左の如し。

嘗於柴田義董家、觀月溪水墨酒瓶圖、自題酒德長歌、殊爲精絕。義董曰、此畫先生醉餘揮以與余、内君怒曰、人常乞畫、絹紙填室、而醉不顧、家道窘迫、今日何費

無益之筆、翁不答而臥、畫乘要略、梅泉

月溪ハ俗士ノ金帛ヲ以テ厚ク畫ヲ謝スルヲバ厭之。謝ハ薄クトモ、我善ミスル者ニハ畫ヲ與フ。古畫備考、大阪賈人爲助話



旁善俳諧歌、謝氏有三葉堂、夜半亭二印、後願與翁及高井几董、好俳諧歌、學于謝氏、故翁又號三葉堂、几董亦冒夜半之號、云、吳月溪傳、

若キ時、島原妓樓ノ某屋ニテ、妓ノ客ニ遣ス文ノ代書ヲ以テ餉口セリ。其代筆ノ文ヲ以テ、盛ニ行ハレシ時見セ候テコマラセシコト有シト也、古書備考、田中氏話

氏(吳春)は天賦の技藝家なるを以て、壯年夙に其業就り、又自ら信ずと雖ども、其書未だ時人の眼に入らずして名聲揚らず。爲めに米櫃屢々空しく、家計難日に急なり。氏惟らく是れ吾業未だ就らずして、人眼を惹く能はざるなりと。又研磨する數年。然れども書尙售れず。名聲又依然として揚らず。困危舊の如し。茲に於て氏又惟らく吾筆到底當世に容れられず。生涯墨奴と成りて困危の内に終らんよりは、如かず早く此の濁世を去りて斯の困危を脱せんにはと、嫌世の情禁じ難く、無分別にも終に辭世の決心を爲せり。然れども死苦固より容易ならず、如何にせば快よく往生せんと、種々苦心して、一の名案を考出せり。聞く河豚は其味美なりと雖ども、調理法を得ざれば之れを食する者十中八九は必ず其中毒に斃る。幸に余年來其肉を味はんとして未だ期なし。今大に其美を食し、好む處の斗酒を盡して以て斃るゝを得ば、望み足れり。此吾意を得たりと。自ら市に往き多くの河豚と數升の酒を購ひ來り、河豚は其儘調理を施さずして煮且つ炙り、牛飲馬食して悉く能く其の肉酒を盡し、終に洵然として華胥の國に入る。既にして夢曉鶉の爲めに破られ、睡覺むれば、身體依然として腹中又何の異狀なし。氏嗟然たるもの數時、暫くにして自ら欣然として曰く、是れ吾命數未だ盡きざるなり。將に大に得るの時あるべしと。更に勇を鼓して拮据黽勉、終に彼の大名を爲せりと、繪書叢誌、

或年象頭山ニ寄進トテ、應舉ニ賴ミテ、大虎ノ書ヲカ、セケルニ、大通寺不申參テ一見ノ次ニ、語當時ノ書家ニ及ビシニ、應舉云、月溪ト申若年ノ者アリ、コハキ者ハ此一人ニテ侍ル、只今京師ニ居ラズ、洛外トカ、他國トカニアリ、是バカリニテ侍ルト申キ。果シテ後ニ高名トナレリ。月溪ハ書ノミナラズ、書モ亦能ス。茶事ナド好ム者共、書跡ヲ珍賞ス。性恬淡ニシテ不貪。故ニ其書行ハル、トイヘドモ家貧シ。元來多藝ナレドモ、皆ヨク久ク習ハズシテ之ヲ能ス。又三絃等ニ至ル迄悉ク堪ヘタリ。俳諧ヲモ能ス。大佛ノ宮殊ニ寵シ玉ヒテ、勿論書法ヲ月溪ニ學ビ玉ヒテ、善書玉フ。或時亂舞アリシ時、月溪ニ仰ラレシハ、ソコニハ多能ナレドモ、今日ノ態ハ未ダ得ラルマジト有シニ、若年ノ頃、笛ヲ少シ吹候ヒ侍ル由申セシニ、更バ吹候ヘト、御手自笛ヲ給リシニ、押戴キ、口ニアテ、暫ク隙取ケルホドニ、宮ヲ始メ、其座ノ輩、イラザル月溪ノ笛ノコトヲ申、困リタリ連、アラハニ是ヲ申笑ケルニ、頓テ吹出タルニ、音色ノスグレタリシヨリ、マス、吹スサミケルニ、滿座悉ク感ジ入ケル。宮仰ケルハ、アマリニ能吹ケル賞ニ、五筆書ヲ以テ酬ハント宣テ、御頭、左右ノ御手、御口、御足筆ヲ其席ニテ遊バシケルニ、イカナルフシギノ御ワザニヤ、五筆イヅレモ同ジサマニテ、何レヲイヅレト分カネシカバ、月溪願ヒテ、其傍ニ御直書ニテ、口筆、何筆ト御書加ヘ有シトナリ、古書備考、大通寺話、

大佛妙法院の宮さんは繪畫がお好で、吳春が召れて教授を申上てゐたが、時々書工を集めては揮毫のお慰がある。或時の會に、蘆雪は餅が好であるから、御臺所から餅網を提て來て、それにべつたり墨をつけて紙に捺し、これに鼠がどられた處を描た。すると景文はまた同じ印痕に萬年青と鉢を描て、豊彦であつたか山雀をかいだ。吳春は粹な人で、直に筆を援て、久松が藏の窓からのぞいてゐる處を描た、名家歴訪録、鈴木松年談、

月溪書ニ工ナルノミナラズ、總テ器物ノ好ミナド最妙ヲ得タリ。因テ仙洞ノ御荳若盆ナド好ミヲ被仰付、毎度好ミノ御用承リシ也、古書備考、

吳春の畫論とも謂ふべきもの載せて畫乘要略に在り。曰く、岡本莊村語余(白井華陽)曰、弊師吳翁常云、翰墨之技、師古而不泥、古粗取古來名家之所



長、折衷之、意匠經營、千變萬化、孜孜致其心力、知巧、別自出機軸、謂之良工也。以てその造詣の由る所あるを察すべし。同書又吳春の畫を評して曰く、「其所作初似燕村、後肖應舉、至晚年、筆法蒼老、墨汁淋漓、遂爲一家風、至其山水最奇、嘗製百采之圖、究其形似、而用沒骨法、以濃淡墨寫之、加以淡彩、精妙無比、又長草木花實、墨華燦爛、天機之妙、現筆端、誠爲傑作、與探幽、守景等爲之上下也。竹田亦曾て吳春を評して「京派翎毛花卉、應舉吳春爲最」と云ひ、更に曰く、「嘗觀吳春秋江雙鳧圖、用焦墨筆、作枯蘆一叢、靛花和墨、從手渲染、旁作芙蓉一枝、胡粉輕點、媚態橫生、如嫠婦俯首將哭狀、雙鳧從花外聯起、荒寒蒼涼、宛然江上秋晚、急風細雨將來時也、正是平生得意筆。その菅茶山に愛許稱賛せられしこと、亦同書に見えたり。吳北汀吳春を評して曰く、「月溪畫山水、新奇清潤、有逸氣、然多寫畿內山水、蓋畿內山淺峯低、故秀麗平淡也。竟不帶危峰、惟巖峭拔之勢、是不探四方名區之失也。畫乘此略。れ蓋し吳春の趣味に外ならず。吳春の畫を作るや、頗る人と異なりて、洋畫家の爲す所に似たるものあり。古畫備考に曰く、「月溪ノ畫筆ハ命毛ノ至テ長キ細筆也。弱ク柔ナレドモ、其畫蹟ヲ見ルニ强健ナリ。畫クニ大抵タテカケテ畫ク。下ニ置テハ畫カズ。予ガ絹障ヲ畫ク時、傍ニテ觀之、件ノ細筆ニテ豎ニ引ニ、側ノ紙障子ノビリ／＼ト鳴レリ。筆勢ノ然ラシムル所ナリ。イツトテモ斯ノ如シ。後年病ニ臥テ漸ク本復ス。此後ハ用筆ノ時、紙障子不鳴。文政十一年四月、大阪書畫賣入爲助話。以てその手腕の練熟を考ふべし。歿後その畫の世に行はれしさまは、亦同書に見ゆ。曰く、「月溪初年ニ所畫ノ文人畫ノ山水ヲ、今ノ人甚好ミ貴ベリ。至テ希也。中月溪畫、其歿後京師ニテ甚貴ク、金一枚ニモ至リヌ。然ルニ門人東溪ト云フ者、能僞畫ヲナシケルヲ、景文豐彦ノ類鑒定ヲナス輩、皆正眞ト極シヨリ、眞僞混雜セシカバ、世人モ無覺束思ヒテ、高價ニモ求メズ。是ヨリ能所ニテ千疋位イタシ、今以テ其カタチニテ候。同上。

第二百八十四 吳春筆寒林落日圖

第二百八十五 同筆柳陰漁舟圖屏風一雙二圖及一部分

第二百八十六 同筆孤鷺群禽圖屏風一雙二圖及一部分

第二百八十七 同筆風雨飛鷺圖

第二百八十八 同筆磯馴松圖

第二百八十九 同筆竹筍圖

第二百九十 同筆江口君圖全圖及一部分



吳春が應舉の風化を受けしは、四條派の由りて起れる所以なりと雖も、吾人は却りてこれを惜む者なり。その遺作を観るに、吳春の大家たる價值と天才の發揮とは、寧ろ蕪村風を紹述して應舉化せざる所のものに存じ、その謂はゆる四條派を成せし後の作は、縱令應舉門下諸家の及ぶ能はざる技倆ありて、特色の認むべきなきに非ずとは言へ、大體に於いて應舉の模倣に過ぎずと評するも酷ならざるなり。こゝに掲ぐる諸佳作中、前半生の筆に係る、寒林落日、柳陰漁舟、孤鷺群禽及風雨飛鷺の四品は、蕪村に出で、蒼雅の趣味一層を加へ、而も蕪村の長せざりし翎毛を善くし、縱横の力量、老熟の筆墨、殆ど古今を睥睨する概あり。磯馴松、竹笋及江口君の三圖は、畫風一變後の作にして、高雅の品格到底前者に及ばず。惜むらくは景文、豐彦等末流の諸家、能く師翁前半生の妙處を領畧する者なく、靡然として圓山派に同化し、四條の旗幟永く分明を缺けり。然れども竹笋圖の如きは、輕巧の技、清新の氣、恐らくは應舉と雖も多くこれに過ぎじ。景文能くこの味を傳へぬ。江口君の圖に至りては、吳春人物畫中有數の大作なり。磯馴松圖は櫻花鯉魚圖共に竹中眞左紀藏と共に、備中倉敷の素封家水澤伊左衛門が御所侍前田帶刀に託し、御用の殘絹(幅殊に濶し)を用ゐ、勅命にて畫かしめられしものにて、これを倉敷に致す時は、護送極めて鄭重なりきと云ひ、左の書簡と共に、今同家の親戚竹中眞左紀の藏に歸せり。

以手紙得御意候。冷氣相催候處、追々御全快之旨、奉賀候。先達而月溪畫之儀、御願被成度旨ニ付、右大將様は達御聞、御序有之、上臈局は内々御願申上置候。然ル處、絹地出來ニ付、去三日ニ御持參之處、早々御局口は致參内、御目見ニ而委相願、何卒極彩色孔雀之畫相望申趣達、御聞置、致退出候。昨七日依御召致參内、御目見之上被仰出候者、此間相願候月溪畫之儀、達叡聞候處、當春從禁中御衝立御畫孔雀被仰付候。右ニ付二度孔雀被仰付候御儀ニハ難相成、依之畫之儀者、

主上之御差圖被仰出候。則絹地備天覽候處、衝立残り絹を以、横物御好被爲遊候御儀ニ御座候。衝立之畫御差圖者、中彩色櫻ニ鯉二つ三つ見合、横物畫日之出、磯馴松、薄彩色被仰出候。右ニ付難有御請申上、致退出候。右之儀ニ御座候へば、致方無之、此段御承知之上、先方へ御文通可有之奉存候。尤無比類儀に御座候。近日禁中は御屏風三枚被仰付候御趣、其上御常御殿御襖被仰付候御様子、左候へば明年中にも出來の處無覺、東此頃、而御仕合奉存候。猶委細は面會之上可申述候。右爲御心得、以書中得御意候。頓首。

五月八日

實花葉和泉守

前田帶刀様

松村景文

松村景文又吳景文天保人物志及金福寺墓碑云ふ。字は子藻人物志士藻に作る華溪と號す。碑文及畫乘要略通稱は要人。文化及天保人物志四條富小路西、堺町四條北、文政五年及十年人物志及四條

東洞院西天保九年人物志等に住せり。妙法院宮の近侍たり。辭書碑文東寺桃林院に在り、賜紫に書玉文建に曰く、爲人溫柔、事母孝、月溪畫名于天下、子雖爲弟、尤極精妙、聲譽

日隆、上自王侯、下至士庶、皆得子之畫以爲珍。文化の平安畫工視相撲には行司の初位に出でたり。天保十四年四月廿六日、忌辰錄には表向は弘化元年三月廿一日とあり

年六十五にして歿す。大通寺の吳春墓側に葬る。碑文、金福寺に改葬に同じ景文常に儒醫小石玄瑞等の讀書人と交はり、明清の畫論等を藏してこれを

讀み、座右の文房具の如きは、皆支那品を珍賞せり。名家歴訪錄、内海吉堂談錄畫乘要略に曰く、以花卉著、寫生精研、淡采艷美、墨痕豐潤、結構多姿、能稱人望、獨擅

其勝、翎毛亦好手、至山水人物、準的學兄、名重一時。又曰く、或謂、景文、卓堂宗家學、自以爲足、無復出機軸、余梅泉曰不然、二人各會父兄意、精神交至、



絶無斧鑿痕、豈可與尋常守家法之輩同日而語哉、蓋守景宗探幽、其筆意如出一手、而無敢議之者、古人不<sub>レ</sub>言乎、不變者亦有識也。

第二百九十一 松村景文筆秋花圖

第二百九十二 同筆垂櫻雙鳩圖

第二百九十三 同筆瀑下孤鴉圖

景文の最も寫生の花卉に長じ、翎毛これに亞々は、前人既に定評あり。たゞ惜むらくは大作少きを。こゝに掲ぐる諸品は皆遺作中の尤なるものなり。殊に秋花圖の如きは、清麗の畫趣、輕巧の彩筆、眞に獨擅の長技を觀るべし。

松村玉文

景文の子玉文亦要人と種す。書辭畫を父に學べりと雖も巧ならず。東寺の岡本氏の養子たり。竹川友廣談、株を買へるならむ娘の戀と題し、腕が叶ぬく風口に聞寺の下男のお釜を參り、其退しるに大金を被取たは奇也、世評曰、親父丹州氷上の産にてはなければ、も、生前甚盛にして畫事に無透、諸方のの賴越し、潤筆物先受致、不畫渡して東寺の邊に得地面、及死後に人々の雜談聞、親の報が子に報い、母者苦勞くく刺れり。

吳春の門人  
岡本豐彦

吳春の門人はその弟景文の外、岡本豐彦、柴田義董、長山孔寅、吳春の碑文紀東暉等あり。岡本豐彦の傳記は、六波羅密寺の墓碑に刻せる文に詳なり。左にこれを掲ぐ。

莊村岡本先生墓

翁諱豐彦、字子彦、號莊村、居曰澄神齋、鯉崎堂、人物志、嶠を橋又喬に作る、亦所自號、岡本氏、備中人、幼岐嶷不凡、性好丹青、初學法橋綾山、既宗來舶諸家、時聞吳二氏、以畫鳴于平安、翁游平安、入吳門、遂學焉、沉潜多年、練磨日熟、工夫幾換、畫眼一新、卒爲一家、不以門閥、屢奉內旨、進御屏障、便而云、翁嘗曰、畫不在于形似、而存于神韻、不假于丹青、而于傳眞、本朝畫家、古昔稱妙手者、大率倣唐宋諸家、而不能出其範圍、自占一步者、僅々兩三輩耳、又曰、祖述唐宋、憲章元明、務宗諸子之心匠、而不拘泥其形跡、取其善者從之、其惡者則捨之、不喜新奇、而新奇自至、不厭舊章、而舊章董面、初可謂畫手而已、翁之言既如此、其存乎中者可知矣、存乎中者可知矣、發乎外者不可見乎、余初不知翁、晚歲交接頗熟、聞其語而知其人、知其人而見其畫、翁豈特寫生魁也邪、翁以安永癸巳七月八日生、以弘化乙巳七月十一日卒、享年七十三、葬洛東六波羅密寺、室佐々井氏先卒、繼室太田氏亦先卒、三室木村氏、子男一人、女五人、皆夭、以門人小栗亮彦爲嗣、囑醫元冲、銘其幽堂、銘曰、規模宏大、可不謂正、格調變化、可不謂奇、意匠精微、可不謂妙、天真自在、可不謂絕。

文久紀元辛酉七月

澄神社友建、羽倉信書

文化の平安畫工視相撲には西前頭の第四位規禮の次、文鳳の前に列せられ、文化、十一年及文政、十三年及天保、九年の平安人物志には、通稱を司馬と云ひ、四條東洞院東に住せし由見ゆ、古畫備考に曰く、當時岸駒高名ナレドモ、老人ニテ京都ノ一人也、盛ニ畫ク、天保二年八月比畫事ニハ甚能ツトメタル者也、吳春ノ



畫ハ悉ク摸置、長持ニ二ツモ有ベシ。外ヨリ畫ヲ頼ミ來レバ襖ナレバ、其席ノ南北、向背、床有所等ヲ聞、畫モ夫ニ應ジテ畫ク。且下繪ヲ必見セテ、好ニ應ジテ畫ク也。竹川友廣曰く。豐彦は堺町四條下る東側の自宅に住す。この頃の圓山、四條の畫人は、大抵家を借りて、路次の奥などに住みつれど、この人のみは宏壯の門戸を構へ居りき。備中の藩士にて頗る威儀を備へ、眉に黛し、短袖の衣を着て常に袴を穿ち、叨りに紹介なき人に接せざるなど、稍岸駒に似たる風あり。潤筆の率も當時最も高かりき。こぞ畫乘要略に曰く。山水人物花草禽獸、無所不能、名噪四方。又曰く。『莊村畫山水、深得烟靄出沒之態、晚爲一種風裁、頃觀祖公圖、意思簡遠、水墨秀逸、神氣自足、誠爲佳妙、宜哉擅美於畫苑。』梅泉その當時に稱せられしこと見るべし。

第二百九十四 岡本豐彦筆蕭何追韓信圖

第二百九十五 同筆網魚圖

豐彦の畫の評賞は畫乘要略既にこれを盡せり。景文と共に吳春門下の雙絶たる技風は、こゝに掲ぐる二圖以てこれを觀るに足れり。共に大阪清海復太郎の所藏に係る。同氏の祖某その門人なるを以て、その遺作を傳ふ。就中蕭何追韓信圖は、稍吳春に似たる趣あり。即ち圓山派と異なる四條派の特色とす。

岡本亮彦

豐彦の養嗣亮彦、本氏は小栗、字は子朗、曉翠又曉翠園と號し、通稱を司馬と云ふ。嘉永五年及慶應三年人物志、堺町四條北妙法院の近侍たり。辭安政禁裡御造營の時、小御所

菊御間、菊薄彩色常御殿東御縁座敷北方杉戸南面曲水、北面藏鞠を畫けり。當時の平安畫家評判記には、上上吉、八百兩とし、山下金作に比し、是は當季の澄神

岡本俊彦

社先生にて、美しき事、又は隨分濫い事も能出來升、今に一方の座頭と成れませふと評せられ、戀づくしには、入簪の戀と題し、人體美なり、家の血脈乍有、此人いかん、密に聞き金の御蔭と云と刺れり。岡本俊彦も亦豐彦の養子なり。實は吳春の門人小栗伯圭の子なり。字は士明、菰

村又友松齋、守中館の號あり。蓮花光院の近侍と爲り、舍人と稱す、畫を兩父に學べり、人名辭書平安畫家評判記に「上々四百三十兩」とし、三桝源之助に比し、是は歷々の御子息にて、隨分何事も綺麗に能く出來升が、些喰足らぬ様に世間に申し升、然し追々御出精なれば、何分親玉のお筋

岡本茂彦

故立者となれます」と云へり。俊彦の子茂彦、通稱左馬、鑑定便覽亦豐彦に學びて巧麗の畫を作り、殊に席畫に長せり。上同御所の御使番を勤む。竹川友中廣談

岡本常彦

年にして歿す。辭書豐彦の弟助之丞の子に岡本常彦あり。文化十三年生る。辭書字は確乎、菱邨と號し、通稱を典馬と云ひ、東洞院四條北に住せり。

嘉永五年及慶應三年人物志、人名辭書には竹叢と號すことあり平安畫家評判記には「上上下の上字の下一畫飛白」五百兩とし、中山文七に比し、此先生はいつも御綺麗に出來升、細こう御骨折らる

ゝ故、近比は能なりましたが、今少し貫目がないと世間で申し升、ごうぞ是から些大きな目方のある様に願ひ升、餘りやつして粹がること、見にくう御座り升、然し當季お人少き折柄にて、御出精なれば、隨分立者になられませふと評せり。

柴田義董

柴田義董字は威中、琴渚と號す。畫乘要略通稱喜太郎、古畫備考に「備後人カ、或曰伊豫人」とありの人にして京都に住せり。文化十年人物志、富小路四條北文政二年四月五日歿す。享年四



十。愚民録、人名辭書は吳春門下の巨擘と稱せらる。鑒定或は曰く。義董實は吳春の子なり。曲淵景備中倉敷に素封家水澤伊左衛門と云ふ者あり。三十歳と爲せり。

頗る文雅を好み、吳春、景文も往々その家に遊ぶ。義董久しくこゝに寓し、殆どその半生を倉敷に過ごせり。歿する前數年春畫に耽り、病を得

きと云ふ。水澤家の親族、竹中眞左紀談畫乘要略に曰く、夙有重名、山水人物、穎秀清潤、布置極工、花禽陽尙形似、暗倣明人意、運筆洒落可觀。又曰く、余梅昔與琴渚

交、屢往來問畫法、得益不少、故多見其絹本及屏風畫、雖似有過輕淡之失、筆姿嫵媚、出其天性、歲僅四十歿、未得爲大家、時人深惜焉。古畫備考に

曰く、月溪高弟也。記憶拔群、更ニ粉本ヲ不用。古畫寫ナドハ少モ不貯。文化の平安畫工視相撲には、二段目前頭第三位蘆洲の次、東拙の前に列せられたり。

義董の宗達、光琳を賞し、又高田敬輔、吳俊明、部關月等を評せし言は、載せて畫乘要略に在り。その一二前に出づ

## 第二百九十六 柴田義董筆美人圖

義董の畫の評賞は上記畫乘要略言ふ所略盡せり。本圖の如きはその一佳作にして、麗艷人を惱ます妙ありと謂ふべし。こは水澤家に寓せしころ、主人の愛妾を寫せしなりと云ふ。竹中眞左紀談

義董の子義峰字は仲甫、琴江と號し、通稱を歲太郎と云ふ。蛸藥師室町西に住せり。文政十三畫を豐彦に學ぶ。畫乘要略義董の門人に前川五嶺あり。

京都の人なり。同慶應三年の人物志に前川泡齊字見號士玉、堀町松原下、前川五嶺とあり。その子文嶺、亦同書に見ゆ。

長山孔寅字は子亮、出羽秋田の人なり。吳春に學びて、稍その風を變ず。大阪に住せり。畫乘要略文化四年の浪華畫人組合三幅對にその名出でたり。

紀東暉山脇氏、名は廣成、字は子工、通稱丹五郎。文化十年人物志、四條高倉東後字を子憲と云ひ、自覺と號し。文政五年人物志曰、舊名紀廣成、嵯峨天龍寺傍既にして居を東暉菴文政十三年人物志、四條東洞院西

稱し、又字を菩提と改め、既白と號す。天保九年人物志、住所同上京都の人なり。少にして畫を好み、吳春に従學す。吳春の歿後、門人名相甲乙する者あり。東暉

これと能を爭ふことを耻ぢ、即ち學ぶ所を捨て、經典を耽讀し、吳道子の風に倣ひて専ら佛、菩薩、夜叉及曼荼羅等を畫き、務めて新意を出

し、別に一家を成す。碑文貫名菴撰并書、四村兼文著山城金洲墓銘集大成に出づ、東山要法寺に在り、に依る、古畫備考增補曰、阿彌陀三尊白描ノ刻本ヲ見ル、頗大、幅ニシテ古人ノ風格アリ、伊勢國某氏が菩提ノ爲メニスル由ヲ記セリ畫乘要略に曰く、畫佛像、筆情纖勁、墨趣秀潤、

氣味古逸。碑文に曰く、其教導弟子、不必規仿家法、各順其性、得盡其能、故妙年多嶄然者、性嗜酒、恒倚醉揮酒、或酣呼詈坐、渙恣如狂、生來不著妻

妾。畫乘要略に曰く、東暉深信佛法、自築觀音大士堂、或終日誦經、或通夕結跏、數月絕肉食、梵行清潔、人稱東暉和尚、年五十餘未娶、亦一畸人也。

梅天保十年八月廿三日歿す。享年六十三。鳥邊山に葬る。碑文に依る門人百々、廣年、澤渡精齋、中村春亭あり。百々、廣年字は永夫、菱華と號す。京都の人。

御幸町夷川北に住せり。山水、雜畫を善くす。天保九年人物志、及畫乘要略安政四年歿す。戀づくしに落ぶれの戀と題して、昔はよかつたが、今はいかゞいたしたぞとあり。廣年の妻照子。文政五年及十年人物志亦畫を作れり。澤渡精齋は東暉の姪なり。東暉子なきを以てその後を嗣ぐ。碑文本姓は紀、名は廣繁、字は公

繁、京都の人。四條烏丸東に住せり。山水を能くす。嘉永五年人物志、及畫乘要略安政禁裡御造營の時、清涼殿中仕切南方杉戸南面牧馬、北面水鳥を畫けり。その子廣孝、字は

子敬、素軒と號す。河内大塚に任ぜらる。慶應三年人物志中村春亭名は祥、字は子善、京都の人。花鳥を能くす。室町松原南に住せり。嘉永五年及慶應三年人物志、畫乘要略



この餘吳春の門人は尙垣本雪臣、和歌を善くせり、鑒定便覽、小田南豐、長州萩の人、家と爲る繪、別所東溪、前に出づ、尾張宮の人、驛の人、小栗伯圭、尾州知多郡半田の人、その子豐成、尾州人、通稱兵作、森觀山、大阪の人、長崎に住す、等あり。 人名、辭書

景文の門人  
横山清暉

景文の門人は横山清暉、原田九美、森義章、國分文友、西山芳園等最も著れたり。横山清暉初名暉三、字は成文、五岳と號し、通稱を主馬と云ふ。 政文

十三年人物志、又霞城と號し、天保九年人物志、新町四條、六角室町東、北、西側路、大竹川友廣談、奇文と稱せり。嘉永五年、京都の人。書乘要略、人名、辭書には、江村春甫に學ぶと爲せり。 安政禁裡御造營の時、御學問所御獻之間上段、嵐山圖、を畫けり。平安畫家評判記には、極上上吉、九百八十兩とし、嵐璃寛に比し、此先生は優しき事を成れては中分なし、手強い事を折々成

され升るが、是は些御許し、矢張御持前の美しき事は宜敷御座り升、ごうぞく、是からは御ひねり無しに成さらんご、人氣が悪ふ成升、然し御功者な御方にて、四條流の總親玉とは世間で申升と言へり。書乘要略に曰く、花鳥精工、山水人物兼之、亦後進之秀也。平生酒を嗜み、座右

の茶箱中には常に酒瓶ありきと云ふ。 竹川友廣談 慶應元年九月二日歿す。東山安養院 宗時 に門人村瀬雙石、加納黃文の建てたる碑あり。刻して黃清輝先生之墓と記せり。こは筆塚にして、遺骸を葬れるは東寺町本妙寺 宗法華 なり。又三條寺町の天性寺にも刻字前に同じき遺髪之碑あり。 本山

臨乘 その長子春暉父に學びて畫を能くせしが、操行修まらず。 次子、竹川友廣談

原田九美

原田九美姓は紀、諱は德、字は子隣、通稱桑之助、蛸薬師烏丸西に住せり。 文政十三、年人物志 書乘要略に曰く、有夙成之名。

森義章

森義章字は子成、李卿と號す。安政禁裡御造營の時、若宮御殿三之御間 四季草花、薄彩色、を畫けり。當時の平安畫家評判記に、「上上吉、七百兩」として中

村嘉六に比し、此生先はいつも美しき御出來、中々御上手で御座り升、残念は世間で左様に申しませぬ、此お方四條流の御顔役にて、親玉顔と見え升と評せり。 嘉永五、年五、及慶應三、年三 の人物志に出づ。室町四條北、又兩替町三條北に住せり。その子應章 前章、圓山家あり。

國分文友

國分文友初め字は中二、號は雲裡、通稱を富太郎と云ひ、松原愛宕寺中に住せり。 慶應三年、人物志 左にその碑文 金福、寺 を掲ぐ。

國分文友翁、名定胤、號雙松、文政六年正月十九日生、稟性機敏、葛原親王裔千葉介常胤後也、夙學畫於吳景文、發名、維新前召仕山階宮、頗勤國事、後老高野河原、專弄風月、事丹青、明治三十三年十一月廿六日歿、年七十八、以遺託、埋齒髮於吳春、景文兩師墓側、是以翁生前年々獨不缺兩師清奠、其追慕意也、

明治四十年一月建之

辱知伊豫松山田内逸雄撰、男國分胤光書

安政禁裡御造營の時、皇后宮常御殿南方杉戸 南面、連廻、北、面、を畫けり。

西山芳園

西山芳園は大坂の人なり。慶應三年十一月八日歿す。享年六十四。 辭書、忌辰、録は、六十二とす

## 第二百九十七 西山芳園筆柳鷺圖

芳園の遺作は主として大阪に重せられ、又多く大阪に存す。最も花鳥に長じ、彩筆清麗、技巧殆ど豊彦と拮抗す。人物、山水亦佳なり。こゝに掲ぐる柳鷺圖、以てその得意の畫風を賞するに堪へたり。



芳園の子に完瑛あり。名は謙、字は子受。父に學びてその畫風を紹介り。明治十年頃歿す。歳六十四。清海復太郎談、同氏の所藏に完瑛の人物二圖あり

景文の門人は尙松川龍椿京都の人、寫生を力む、鑒定、恒覽、八木奇峰京都の人、嘉永五年及慶應三年人物志に出づ、名は菅南溪、富田光影、磯野華堂、竹村文眠、江森金一、上ヶ松嘉

陵尾張笠寺の人等あり。辭安政禁裡御造營の時、八木奇峰は皇后宮參内殿西南十帖御間、海邊四常御殿次之御間、十二帖、雨中竹、富田光影は同殿北廂西

方杉戸東面、萩、西面、鷺、中彩色、磯野華堂は御小座敷中仕切杉戸南面、松に鷹、北、面、牡、丹、白、鷺、中彩色、及皇后宮常御殿申口之間十三帖紅葉、薄、を畫けり。評判記に八木奇峰は「上々

吉下二字、飛白、七百兩嵐三右衛門、此生先はいつも御綺麗に出來升、御出精にて追々立者となられませふ」と評し、富田光影は「上上下の上字の飛白」五百八十

兩尾上、美雀、此先生はいつも美しくしく優しく御出來は妙々、當季お人もなき折柄、御出精なれば随分美形になられませふ」と評せられたり。

豐彦の門人は上出南岳の子衡岳及亮彦、茂彦、義峰の外、田中日華、鹽川文麟、柴田是真、熊谷直彦等最も著る。田中日華字は伯暉、號は月渚、通稱

辨二、堺町四條北に住せり。文政五年、十三年及天保九年人物志、竹川友廣曰、堺町、錦小路南に住す、大酒家、同門中最も早く名を知らる。弘化二年歿す。鑑定、恒覽、日華の後は曾て來章の門人なりし菱

田日東評判記に「上々」々々、飛白、三百兩、中村梅藏」とし、「此お人は以前は能出來ました、今にでも花方になられ升かと思ひの外、近比は左程に存じませぬ、世間で些腰が抜たさ申し升、去年からは御修業御出精なれば、随分上達花方にもなられませふ」と評せり、これを立てしか、ご振はざりき。竹川友廣談、鹽川文

麟字は士温畫要略には「字子文」とあり、雲章と號し、通稱を圖書と云ふ。蛸藥師新町西、嘉永五年人物志、竹川友廣曰、路次、又木屋町四條三丁南慶應三年人物志に住せり。安政禁裡御造營の時、

御小座敷下御間耕作圖、墨、繪、泥、引、及皇后宮常御殿御化粧間新樹、中、彩色、を畫けり。竹川友廣曰、氣の善く付く人にて、若き時は酒も飲まざりしが、晩年大酒家と爲り、ね、當時の評判記に「眞上上吉、九百兩」とし、嵐璃珪に比し、是は當季粹な先生、花やかなるお出來申分なし、元來御器用筋にて、世間の評判も宜敷、何を成されて

も氣の利た處は、外に續き手なし、去年ら當世の粹な處も随分宜敷が、素人計りを喜こばさず、追々お年も參り升故、些しつかりとした座

頭と見える處を願ひ升、何分澄神社のお顔役、美しくいものが皆引く粹な先生と申升と評せり。當時四條派の試筆會など、互に日を期して

相會し、酒間揮毫頗る盛なりき。竹川友廣談、明治十年五月十一日歿す。東山一心院浄土、宗に葬り、法名を法章院本佛文麟居士と云ふ。清人錢樸墓石の刻字を書せり、是真

直彦は明治の畫家とす。この餘、豐彦に學びし者、尙古市金峨通稱、哲造、堀江雪江、服部元戴、鈴木文寅、岩陽文陽、吉田春山、河村宗順、山田龍淵、安政禁

の時、御小座敷南廂、西方杉戸東面、武陵、桃、源、西面、王、實、園、恭、及、若、宮、御、殿、二、之、御、間、竹、に、畫、中、彩色、を、畫、く、評判記に「上々」々々、字上代英彦、雲州松佐藤梅隣、參州吉福澤駒嶺、信州羽倉可亭、

の一畫の外、飛白、五百兩」とし、中村大吉に比し、「此先生はいつも御骨折にて、美しく出來升は妙々、御出精御苦勞」とあり

伏見稻荷の祠官、從五位下、藏人、初め月峰に學び、後豐彦の門、田中馬溪清風、後、明、等、あり、書







第二百八十四 寒林落日圖 吳春筆

絹本淡彩

豎三尺六寸八分、橫八寸九分

攝津國池田 稻束芝馬太郎君藏

(第五百六十三頁參看)



(雍正百六十三頁卷第)

續華圖新田 靜東芝湖太瀨作燕

三三六七八八番八十八卷

繪本繪錄

卷二百八十四 寒林落日圖 吳春華





寒林落日  
吳春重







第二百八十五 柳陰漁舟圖屏風一雙 吳春筆

絹本着色

竪五尺四寸七分、横一丈二尺四分

京都 渡邊伊之助君藏

(第五百六十三頁參看)





一冊正頁六十三頁

京華 劉繼卣 多圖作

正頁四十七張 附一畫二頁四張

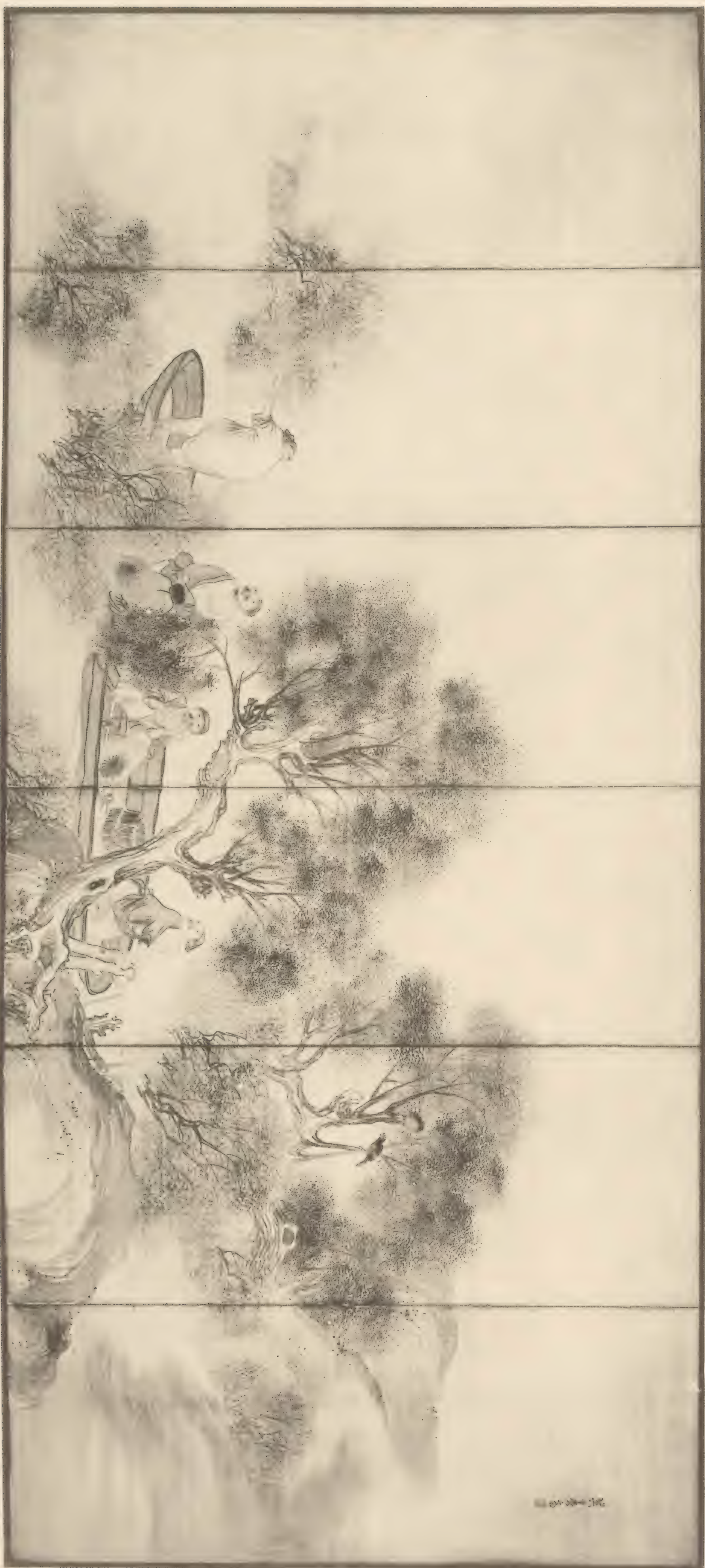
附本畫冊

卷一百八十五

縣劉繼卣圖報風一變

吳春華

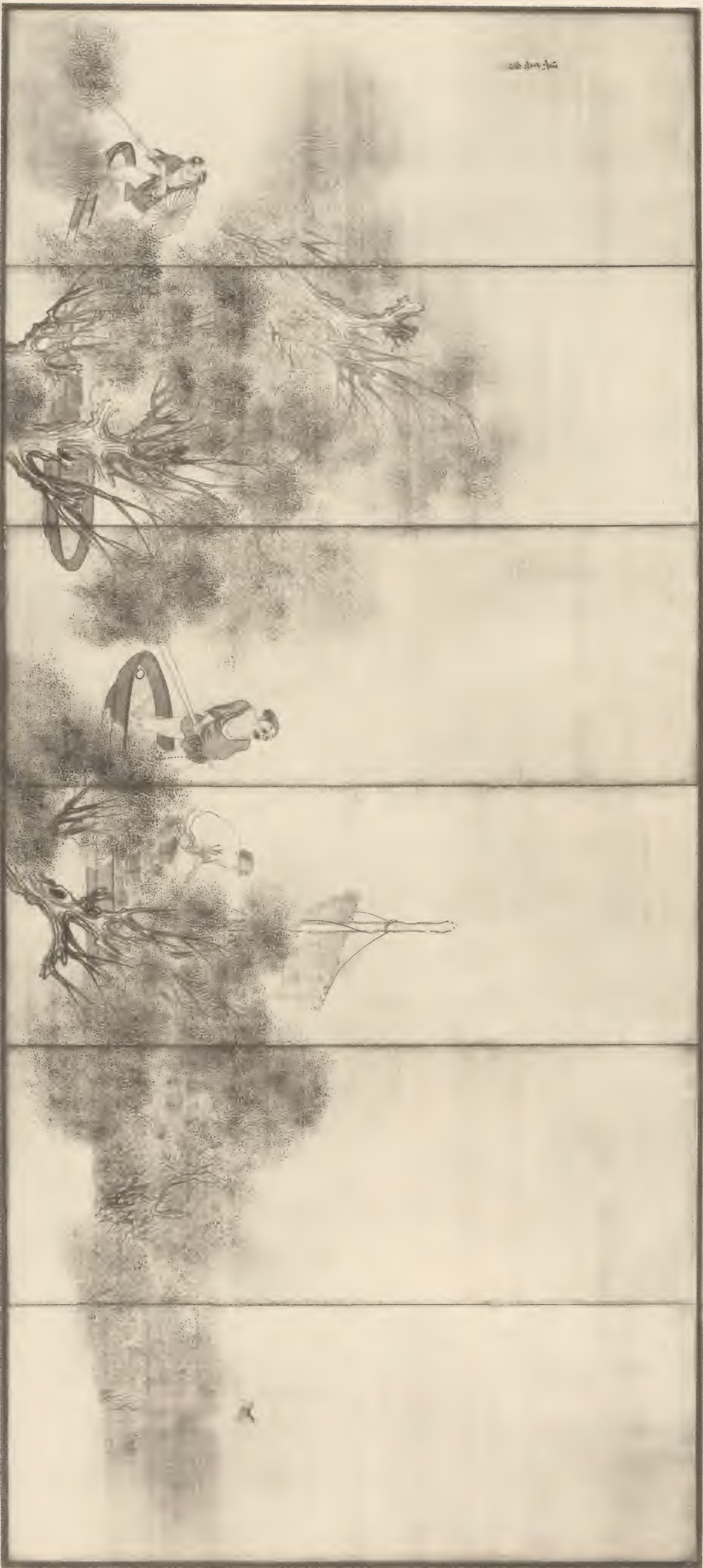








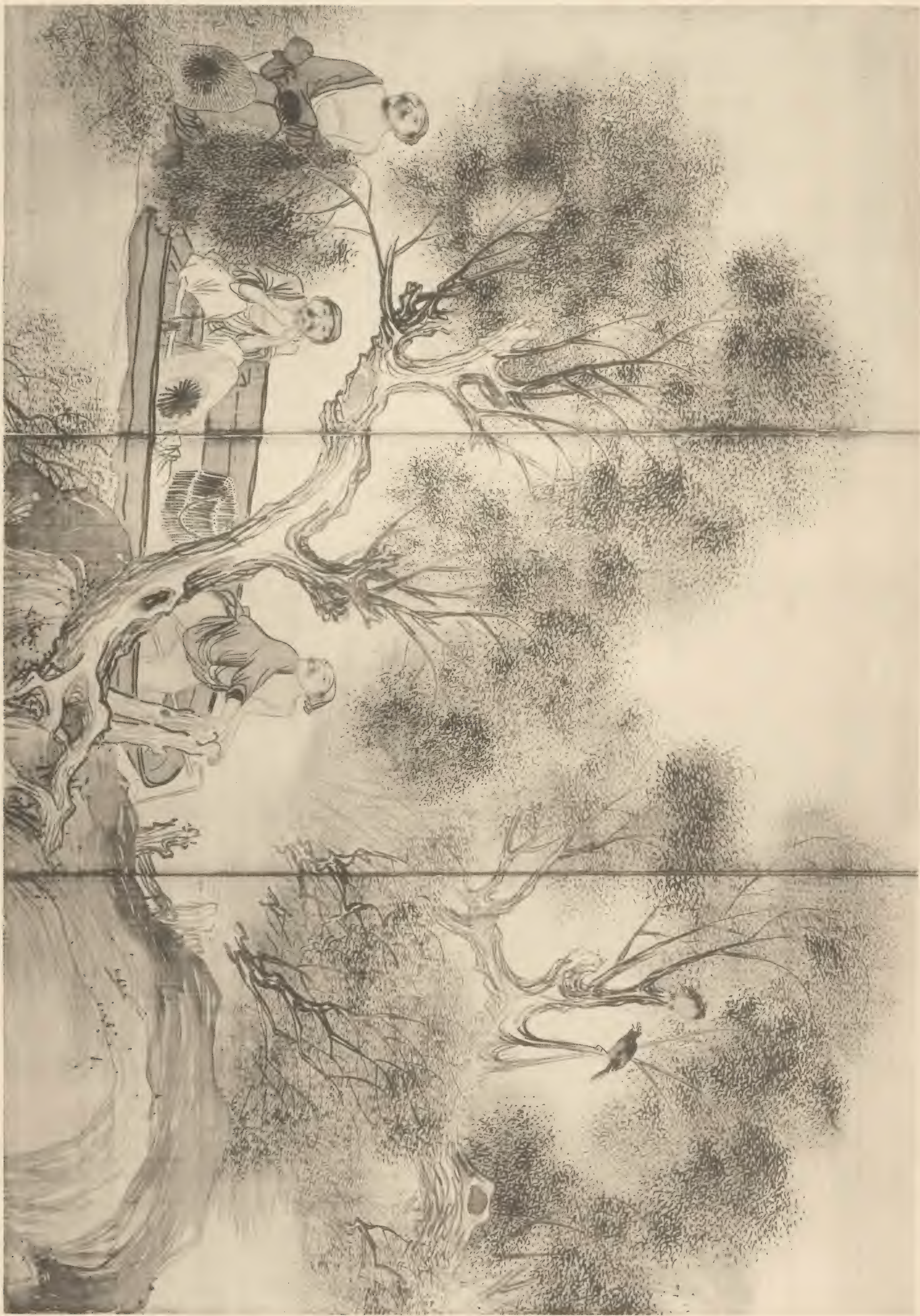


















第二百八十六 孤鷺群禽圖屏風一雙 吳春筆

絹本淡彩

各堅五尺四寸四分、横一丈二尺六分

近江國大津 上野新右衛門君藏

(第五百六十三頁參看)





新正四六十三頁

張五圖大將土裡濶亦濶四昔燕

谷望正只四七四衣謝一丈二只六衣

備本齋錄

卷二百八十六

新正四六十三頁

吳春章



























第二百八十七 風雨飛鷺圖 吳春筆

絹本淡彩

竪四尺五分橫一尺八寸二分

京都 岡村嘉太郎君藏

(第五百六十三頁參看)





（源正百六十三年夏集書）

京師圖林藏太源書藏

竊四只正衣箱一只八廿二位

附本箱錄

第二百八十八

風雨飛濺圖

吳春筆











第二百八十八 磯馴松圖 吳春筆

絹本淡彩

竪一尺七寸、横三尺六寸四分

神戸 竹中眞佐紀君藏

(第五百六十三頁參看)





（附註）此書六十年後出版

廣東省中書局藏書

總一八十八冊三頁六十四卷

附本附錄

卷二百八十八 勤學外圖 吳容雅











第二百八十九 竹笋圖 吳春筆

紙本淡彩

堅四尺三寸七分橫一尺九寸

(第五百六十三頁參看)

京都 巨勢小石君藏





一、總正百三十三頁

原圖耳部小區樣圖

總四八三十七頁圖一另式全

繪本圖錄

卷一百八十八式  
音範圖  
吳春年



黄中  
秋のつがひを  
ぬきあはせしむ  
落の陰を  
らす









第二百九十 江口君圖 吳春筆

絹本着色

竪四尺四寸七分 横二尺七寸七分

紀伊國 濱口吉右衛門君藏

(第五百六十三頁參看)



(卷一百六十三 夏 卷一百六十三)

錄附圖 諸口吉亦滿門普羅

總四只四七小卷謝二只小七小卷

備本錄出

卷一百六十三 諸口普羅 吳春華



















第二百九十一 秋花圖 松村景文筆

絹本着色

竪三尺四寸八分、横一尺一寸八分

近江國長濱中村寅吉君藏

(第五百六十五頁參看)





(續正百六十正頁餘卷)

張萬圖其附中林前書陳

變三只四七八卷謝一只一十八卷

錄本卷也

卷二百六十一

林非圖

林林景文雅





朝花夕拾







第二百九十二 垂櫻雙鳩圖 松村景文筆

絹本着色

竪三尺五寸四分、横一尺三寸八分

近江國大津村田和兵衛君藏

（第五百六十五頁參看）



三國志卷之十

張耳國大將 林國 孫策 孫權

孫策 孫權 孫權 孫權

孫策 孫權

孫策 孫權 孫權 孫權











第二百九十三 瀑下孤鴉圖 松村景文筆

紙本水墨

竪五尺八寸、横二尺八寸九分

攝津國池田 稻束芝馬太郎君藏

（第五百六十五頁參看）



二〇二五

圖書

圖書

圖書

二〇二五

圖書

圖書











第二百九十四 蕭何追韓信圖 岡本豐彥筆

絹本着色

竪一尺六寸三分、横二尺八寸七分

大阪 清海復三郎君藏

(第五百六十六頁參看)



(附註頁六十六頁參照)

大國南緯圖二版詳圖

第一只六十三卷附二只八寸半版

附本卷分

卷二百六十四

蘇伊士緯計圖

圖本豐查單











第二百九十五 網魚圖 岡本豊彦筆

絹本淡彩

竪四尺二寸一分横一尺八寸五分

大阪 清海復三郎君藏

(第五百六十六頁參看)





(續正百六十六頁參看)

大廻 衛術集三續書藏

續四八二七一續附一八八七正卷

備本附錄

續二百六十五 續魚圖 岡本豐道筆











第二百九十六 美人圖 柴田義董筆

絹本着色

竪三尺七寸五分横一尺四寸二分

神戸 竹中眞佐紀君藏

(第百五十六十七頁參看)





(明治正六十小重慶書)

轉目 曾中興計編作編

第三只中重慶附一八四七二卷

備本錄也

卷二百六十六 美人圖 柴田壽蓮筆



猶有餘角以飲  
徑月燈於以時情  
歸去也為詩自  
解此情云云  
和可題



我  
畫  
寫







第二百九十七 柳鷺圖 西山芳園筆

絹本淡彩

竪四尺三寸八分横一尺八寸九分

大阪 清海復三郎君藏

(第五百六十八頁參看)



二部 卷五 十八 卷五

大觀 卷五 三 卷五

第四 三十八 卷五 一 八 八 八 八

卷五 卷五

卷二 百 武 十 十

卷五 卷五

西山 卷五 卷五











第八章 岸派

岸駒

圓山、四條の二派全盛を極めしに當り、獨り應舉、吳春の糟粕を嘗めずして、別に一家の機軸を出し、一時京洛の畫壇を風靡せし者を岸駒とす。岸岱、連山等これを紹ぎ、以て近時の大家竹堂に及びぬ。謂はゆる岸派これなり。岸駒本姓は佐伯。寶曆六年二月十四日加賀金澤に生る。

系圖（岸九岳及米山藏原本）及碑文寺町本（禪寺墓）には、寛延二年三月十五日生れ、天保九年八月十三歳にて歿すと爲せるのみならず、政隣記（中川忠順君抄書に依る）には文化六年五十四歳なりしこと見えたり、仍りて（石崎謙録、中川忠順君抄書に依る）には寶曆六年二月十四日生れ、天保九年八月十三歳にて歿すと爲せるのみならず、政隣記（中川忠順君抄書に依る）には文化六年五十四歳なりしこと見えたり、仍りての寶曆六年生れ、幼名を乙次郎と云ふ。  
岸駒傳加賀藩事、實文錄に曰く。

加賀人、後貫于京師、其先世居越中巖瀬驛、及父豐右衛門、挈家徙金澤、業裁縫、生二男、長曰彌左衛門、次即駒也。駒敏悟嗜繪事、年十二、出爲染戶奴、三年巧描、徽號花樣、稍長、自稱鍵助、賣畫爲活、既而丁父憂、服闋、入京師、時年廿五、邦俗甲子日賽摩訶伽羅天、摩訶伽藍天、漢言大黑、駒以寶曆六年某月甲子生、故畫大黑像、賣之、大售、尋游近江彦根、乞畫者麤至、名聲漸著、歸京、畫佛光寺袈裟、一日有栖川親王遊寺觀之、激賞、問名、召爲近侍、遂任主殿大屬、更稱雅樂助、居柳馬場、迎田奉養、天明中皇宮災、及再營奉勅畫屏障、又屢奉江戶幕府命、作圖畫、聲價逾重、文化元年轉越前介、五年正月加賀藩城火、明年四月土木竣功、金龍公厚幣召駒、八月駒從男偕及門生村上健亮、齋藤霞亭、松本文平、望月左近等、抵金澤、留五月、畫障壁、謁見賜金絹歸京、猶留偕等設色、明年九月全成、賜物有差、天保七年叙從五位下、進越前守、九年十二月卒、八十三、駒初撫沈詮所書、工緻研麗、後折衷諸家、別出機軸、名聲振天下、嘗省母於鄉、視彌左襲父業而生計、連躡、資白銀二貫目、爲藩士玉井貞運之臣、人稱其友愛。

この傳記の資料たりきと覺しき政隣記文化六年八月廿六日の條に曰く。

一、（中畧）右越前介、元來御國金澤產也。父ハ大衆免片原町俗沙走セト云ニ居住仕、仕立屋豐右衛門とて、袴等仕立、縫物業。母ハ越中東岩瀬之者ニ候處、右豐右工門エ嫁す。男子貳人有之。兄ハ彌左工門、弟ハ乙次郎、後改鍵助、雅樂助、當時越前介也。云。乙次郎十二歳之頃、母衣町口屋與左工門と云紺屋エ丁稚奉公ニ入、染物紋、上繪、裾形等手傳、二三年罷在。但母方之内縁も有之、旁與左工門方ニ相勤居候よし也。右乙次郎幼少より畫ニ志深く、不習して能畫候由。就中父豐右工門袋町永井屋太郎兵衛、當時本町肝煎ニて、此度越前介主付御用相勤候處、先年之故を以、指向對談之節ハ、心易語合候由。且兄彌左衛門當時致（存字脱カ）命、委曲末ニ記ス方ニ暫借家。其後下近江町三番町ニ家相求引移。其頃ハ乙次郎成長、改名鍵助と號し、賣畫を家業として渡世。其後父死。安永九年鍵助上京、子ノ日ニ候由を以、大黒天之繪を書、賣弘候處、大ニ流行。其後江州彦根ニ罷越候處、大ニ畫行はれ、夫より歸京仕、佛光寺之襖等畫候處、或時有栖川様佛光寺エ御出、右繪御覽請、甚御感稱ニて、名前等御尋、其砌衛立ニ繪被仰付候處、甚應御意ニ、依之ニ京都住人ニ相成、名も岸雅樂介と改稱し、其後禁中之衛士官明所有之ニ付、株買求、於禁中ハ當時も衛士六位與云々之由也。

一、於京都、初ニハ柳馬場蛸藥師下ル所ニ借家し、母も引越居候處、次第ニ畫大ニ行はれ、掛物一幅畫、謝禮金千疋、屏風一雙畫、謝禮金二十兩、右ハ龜畫ニ而之禮物、彩色等ニ至リテハ段々上達云々。天明年中禁裏炎上、御再營之後、御襖畫相調、其後關東御用畫も被仰付、文化元年京東洞院九太町東側ニ家相求居住、名越前介と改之。年齡今年五十四才と云々。子息太郎と號し、是又畫相應ニ宜。去年是も衛士官株買求、筑前介と改稱す。

一、越前介兄彌左衛門儀ハ、父死後材木町ニ借宅。其後新町ニ家求、袴等仕立物を以渡世之處、兎角勝手難澁ニ付、十六年前、舍弟越前介御當地エ下り候



節、銀子貳貫目令合力、此銀子を以、玉井主税人夫方杖足輕罷成、右足輕株跡式讓受候爲代、壹貫三百目出し、殘而七百目ハ越前介ニ令返濟候由。彌左工門今年六十二也。右十六年已前下り候節は、尤鍵助と申せし頃也。

一。彌左衛門せがれニ彌次郎とて、新町父家ニて仕立物家業ニ致し居候處、今春尾張町ニ家相求引移、袴屋と號し、父彌左工門儀も、せがれ彌次郎宅同居之事。

碑文に曰く。

其父文右衛門本越中富山藩士、致仕徒加賀、而生翁、々自少善書、中年遊四方、後入京、以書仕於有栖川王府、稱雅樂助、後爲天朝生火官人任主殿大屬、又轉越前介、屢承當宮中書事、天保七年十二月以其積勤年高褒、補藏人所衆、敍從五位下、進越前守。

野史には、父曰道久、本仕富山城主、而致仕徒居加賀と曰へり。本禪寺岸駒を葬る所心城院の過去帳に、岸駒の父文左衛門、法名量遠院殿道久日壽大居士、安永七年八月十日とあり。岸氏系圖を見るに、岸駒十五歳の時寶曆十三年みづから狩野花信と號すとあり。これに依りて考ふれば、初め狩野風を畫きしものか。又同系圖に依るに、安永四年廿七歳名を矩、字を昌明と云ひ、蘭齋と號せり。通稱を鍵助系圖鍵助と改めたるは同八年の時、有栖川宮の近習と爲り、雅樂助の名を賜はり、名を駒、字を賁然と改めしは、天明四年廿六歳八月の事なりと云ふ。華陽と號せしもこの頃の事ならむ。同六年廿八歳可觀堂と號す。寛政禁裡御造營の時、命を奉じて御小座敷下ノ間泥畫庚樓月、砂子に畫けり。寛政五年、清の吳郡の商余叔文、唐啓暉、長崎の譯官榊某に就いて富岳の圖を求む。岸駒爲にこれを畫き、潤筆に代ふるに虎頭を以てせしむ。年を踰えて乃ち一虎頭を致す。みづからその事を記して子孫に傳ふ。野史仍りて虎頭館碑文及系圖と號せり。この事、古畫備考には、「近比長崎ヨリ虎頭ヲ京ノ名高キ外療方ヘ來テ、人ヲ以テ岸駒方ヘ、長崎ヨリ贈來シテ、其御許ヘ贈ル由申オク、岸大悅、厚ク謝シ、據其日カケテ、四百何十人ノ門弟中ヘ、廻文ヲ以テ其事ヲ觸、賀鑑

ナ確テ之ヲ聞セシム、束修ヲ大ニ得タル由とあり、巨勢小石曰く、この虎の頭、皮膚等は、その後常に床之間に飾り、門人の寫生の料とも爲しき。同十年五十歳鳩巢樓と號す。系圖その官歴は岸九岳藏文書に詳なり。左にこれを掲ぐ。

享和二年八月廿一日 補右生火官人 元有栖川殿家人

但年來諸事之勞、補源正恭之替

同年十月五日 叙從六位下、任主殿大屬

文化六年二月十日 任越前介

同八年二月十六日 敍從六位下

文政二年十二月十八日 叙正六位下  
天保七年十二月廿八日 補藏人所衆

職外四十八箇年、畫調進之勞既辭及、八旬有余、極老之間、格別以御憐愍、一代限推補

同年同月廿六日 叙從五位下

同八年正月廿一日 轉守

平安人物志を閱するに、文化十年には間之町竹屋町北に住し、同功館の號見え、文政五年には室町四條南に住し、同十三年には天開窟在北岩倉の號見え、天保九年には柳馬場錦小路北に住せし由見えたり。その加州侯に召されて金澤に至りし時の事は、政隣記に詳なるを以て、左にこれを抄記す。

文化六年八月十三日

京都畫師岸越前介



右越前介、今般御當地ニ被爲召候ニ付、今月中旬京都發足、罷下候筈、日限十六日廿日之内ニ云々。供廻十九人、内四人若黨ニ而、箱押、表具師、紙細工之者、且せがれ筑前介も召連候得共、門人同様之趣を以召連候旨、門人者村上健亮、齋藤霞亭、松本文平、望月左近ニ申者召連候事。右之趣京都詣人士師左膳、溝口藏人方申來候條、致承知、御貸屋等不指支様可申渡置旨、今日御用番奥村助右衛門殿被仰渡候事。

文化六年八月廿六日

前記十三日ニ有之通、京都畫師岸越前介、禁裏衛士官同筑前介同様等參着。御貸家袋町金屋專次郎方。且召連候人數者、前記之通ニ候得共、今日ハ侍役人上田左兵衛并侍分四人、鍵持、駕籠舁等十八人、外ニ宿次人足、先拂兩人召連來。去廿日京都發足、七日路ニ而昨廿五日小松止宿、今日七ツ時頃、右專次郎宅ニ參著。附京都ニ而ハ一僕召連發足云風説も有之、中略、前出

一。今月廿一日、岸越前介儀、御會釋方、萩野左衛門尉被爲召候節之御格合ニ而、少しか也ニ取計べく旨、御用番助右衛門殿被仰渡候ニ付、其旨夫々申渡置候事。

一。越前介登城之節、供人徒士二人、陸尺六人、侍四人、鍵、挾箱、長柄傘、草履取、笠籠、御門内ニは侍二人、草履取一人、傘持一人、挾箱持一人、外ニ畫御用被仰付候節ハ、長持一棹爲持候旨申越、御城代ニ御達申置候事。但御門内より御玄關前迄侍二人等、本文之通召連候事。

一。せがれ筑前介儀、今般爲扶助、召連候間、登城之節者、草履取壹人爲召連、同道仕候。外ニ弟子共も召連候段、申越候ニ付、筑前介事、御用番へ及御届、其外御城代へも御門入之儀御達申候事。但筑前介迄罷出候節ハ、侍も一人召連候筈、弟子も其身迄候節ハ、草り取一人宛召連候事。

文化六年八月廿七日

昨日記ニ、岸越前介、同筑前介も衛士官と記置候得共、其儀相違。六位ニテ、禁中勤向も、新嘗會十月新穀を天照太神宮へ被備候事云々之節、御別殿ニ御幸之砌、御輿之先、焔火持參、其外右ニ准候勤向有之由云々。

文化六年九月廿八日

前記八月廿六七日記ニ有之候岸越前介等、今月廿六日、初而二之御丸ニ被召、虎之御間等襖張付ニ被仰付候繪被仰付。其節途中町附足輕貳人指添。御玄關より、御玄關番足輕溜所迄誘引、御貳坊主給事ニ而被下之。

但御目見等ニ罷出候節ハ、御式臺より當番御歩誘引之筈ニ候得共、御繪書御用故、本文之通也。翌廿七日よりハ、御貳も相止、旅宿御貸家より辨當指遣候事。

一。右越前介義、何卒御序を以、御目見被仰付被下候様相願候ニ付、前月御用番岩田氏町奉行也より願紙面出置候處、右御目見ハ不被仰付旨、御用番又兵衛殿被仰聞、其段申渡有之候事。

文化六年十月廿八日

前記九月廿八日ニ有之岸越前介儀、實名昌房、名は駒、字貴然、館號ハ同功館、號ハ可觀堂。但最前ハ畫名ニ專蘭齋と書せり。



息筑前介、實名ハ國章、虎頭館、卓堂。

文化六年十二月十四日

同日、岸越前介義、歸京之御暇被下之候ニ付、今日中貸屋ニ御使御大小將齋藤勘十郎を以、左之通被下之。

白銀百五十枚

生絹五疋

串海鼠一籠

一。明十五日御目見被仰付候條、五時過、二之御丸ニ罷出候様申渡。拙者津田左近右衛門義も可致登城旨、御用番奥村左京殿より御紙面到來ニ付、其段申渡。翌十五日、越前介義登城、裏御式臺續御廊下ニ屏風圍出來、其處ニ爲溜、檜垣之御間三ノ間ニ而、御太刀銀馬代獻上之、御禮疊青銅獻上之振也、御目見被仰付、目錄披露、御奏者番岸越前介と唱之。

右相濟、於御次、左之通被下之。人見吉左工門御意之趣演述、御目錄渡之。自分誘引取合、御禮申述。

白銀貳十枚

生絹二端

且又本文之外ニ歸洛用金三十兩被下之。

相公様より左之通被下之。人見吉左衛門一集ニ演述。

白銀十五枚

染物三端 附外金三十兩、爲路用被下之

十五日

於檜垣之御間、岸越前介御目見被仰付。四半時頃相濟。

十六日

岸越前介義、今朝發足歸京。依之、於御貸屋料理被下之。挨拶人御臺所懸リ與力、給事坊主。

一。前記ニ有之候通、岸越前介今朝發足ニ付、左之通彼是爲挨拶挨拶相送候由、主附肝煎より及斷ニ付記之。

金小判五兩

鶴來屋 専次郎

金子貳百疋

茶代 同人

同斷

同人妻

銀貳朱宛

同人せがれ、娘三人

干菓子一箱

同人小兒

金子貳百疋

取持紺屋 與市

同 百疋

同能登屋 新三郎

鳥目壹貫文宛

専次郎下人 三人

金子三百疋

料理人

同 百疋

下宿淺野屋 半三郎

鳥目五百文宛

同人 下人

金子百疋

下宿中屋 次郎三郎

鳥目三百文

同人 下人

金子百疋

下宿米屋儀右衛門 後家



鳥目三百文 同人 下人エ 指添御足輕 六人エ 銀八匁 道案内番徒 四人エ 金子三百疋 金小判壹兩宛 主附肝煎 太郎兵衛、新七エ

岸駒の加賀侯に召されて金澤に至るや、徒從頗る多かりしかば、口碑にも大名の行列の如くなりきと云ひ、又その登城の時、威儀を張りし事、長棒の駕籠を玄關に横附と爲せるを、番士拒みしかば、駒怒りて直ちに歸京せんとせしに、家老これを慰諭し、翌日再たなご傳ふれど、政隣記に徴すれば敢て信ずるに足らず。又何れの頃にやありけん明ならねど、岸駒曾て駿河の吉原及原に至りき。左の尺牘（植松與右衛門藏）に依りてこれを知る。

其后者不計御惣遠ニ罷過申候。先以御全家御揃御安康、奉賀候。然バ下官事、極々内々ニ而原、吉原之間ニ要用ニ有之、昨日當着候。兼而故大人御仰被下候事、思バ御なつかしく存候。尤推參ハ可仕候得共、雨天にて、今夕は扇屋伊兵衛ニ而滯留候。此段一寸御しらせ申度、委曲ハ拜顔、早々頓首。

五月六日朝 植松與右衛門様 越前介

二白。御家内御一統宜ク奉願候。吳々下向之儀内々之事ニ而、何分床敷存候也。以上。

こは書中云ふ所の吉原の旅館扇屋より原の植松氏に寄せしものにて、謂はゆる要用の富岳の寫景に在りしことは、言ふまでもなし。文化の平安畫工視相撲には西方の大關に列せらる。岸駒七十歳の頃、（文政末）洛北岩倉證光尼寺の廢滅せるを修興し、法華堂を建て、その傍なる山腹の崖に窟を造り、名づけて天開窟と云ふ。叡山に面して眺望頗る佳なり。又境内に一小堂を營み、扁して巖々白雲中と題す。こゝに石棺を埋めて永眠の床とせむとす。（從後遺旨に）堂の中央に一基の石燈籠（今岩倉實相院に在り）を置き、自畫の寒山拾得を刻せり。（今は荒廢して古池僅に存す）天保九年十二月十四日歿す。享年八十三。（系圖、碑文及諸書九十歳とするは、生年を寛延二年とするより出京極寺町今出川下ル光了山本禪寺に葬り、系圖、法名を同功院殿天開日觀大居士と云ふ。系圖、齋藤氏を娶り、三子、二女。岱、二郎（早世）、節女同上、三郎（同上）、貞女（初）あり。長子岱家を嗣ぐ。岸駒の自筆の壽像、今岸額吾これを藏す、岱碑文を上に題せり、描及養子良の作りし木像、（底面黃漆書曰「大翁存生中、令其作頭顱、而經歲十有餘年之後、天保九年戊戌十二月五日、翁罹疾而終逝矣。因今繼翁之遺意、令田中内藏、守口造形、姿、真、又施彩粉、以附屬之位、碑堂に置かれき、明治二十年頃、竹堂これ家を移し、あり。碑文は大學助源寵の撰する所なり。岸駒の逸話頗る多し。左に略これを集録す。後本禪寺に安置せり、赤袍の束帶姿にて、高さ約二尺七寸許。）

岸駒四歳ノ時ナリ。母ニ負ハレ、市街ニ出デ、偶マ人ノ養ヘル鸚鵡ヲ見ル。歸リテ紙筆ヲ求メ、之レヲ畫キシニ、其形能ク整ヒ、恰モ畫家ノ作レリシニ似タリ。看ル人奇トシ、其ノ天才ニ驚キヌ。是レ實ニ岸駒ガ畫ヲ描キタル最初ナリ。既ニシテ大家トナリ、此ノ話シ世ニ傳ハリシカバ、岸駒ノ幼時、寫生シタル所ノ鸚鵡ナリトテ、之レヲ京都ニ持來リ、誓願寺ノ人ノ群集セル所ニ於テ見世物ニシ、此鳥モ亦其後清水ノ産寧阪ナル禽獸屋ニ飼ハレシガ、終ニ死シタレバ、之レヲ其側ノ竹林中ニ葬リ、世ニ鸚鵡塚ト云ヒタリ。竹堂翁ノ養母、此塚今陶器師幹山ノ家ノ裏ニ在リト聞キ、嘗テ清水寺ニ詣ヅルノ途次探リシモ、既ニ其跡ヲ留メザリシト。岸駒八歳ノ時、既ニ畫ヲ善クスルコト近傍ニ聞エシカバ、諸方ヨリ招カレテ、此所彼所ニ遊ビ、幾日モ歸ラザリシコトアリ。母常ニ之ヲ憂ヒ、成ルベク



遠方ニハ出シ遣ラザリキ。然ルニ一日母ノ在ラザルヲ窺ヒ、家ヲ出デ、又近郷ニ遊ビヌ。母歸リテ之ヲ知り、近隣ノ人ニ錢五拾文ヲ借り、兒ノ後ヲ追ヒ其ノ不心得ヲ責メテ、此錢ヲ與ヘ、歸路物ヲ買フノ用ニ充テシメタリト。當時母ノ貧シカリシコト知ルベシ。

又六歳ノ頃ナリケン。他ノ兒童ガ西瓜食ヘルヲ見テ家ニ歸リ、母ニ向ヒテ兒ニモ與ヘヨト云フ。母錢六文ヲ與ヘテ買ハシム。誤リテ錢ヲ溝ニ失ヌ。母再ビ與フル能ハズ。兒ノ泣クニ任セリト。母ハ赤貧洗フガ如ク、纔カニ手仕事ヲ以テ二人ノ口ヲ糊シタリ。サレド母ノ生家ハ、越中岩瀬ノ豪家タリキ。

岸駒幼ヨリ諸藝ヲ嗜ム。就中淨瑠璃ト繪ノ事トハ長ジヌ。十八歳ノトキ、志ヲ立テ、京都ニ遊ビ、下河原ノ菊水湯ニ投宿セリ。蓋シ其主人同國ノ人ナリシ故ナリ。世ニ傳ヘ云フ。此時同行二人アリ。同ジク志ヲ立テ、國ヲ辭シタルモノ。而シテ此ノ一人ハ、後俳優加賀屋歌右衛門梅玉トナリ、一人ハ大醫福井某トナレリト。

岸駒京都ニ在ル十數日。或ハ同郷人ヲ訪ヒ、或ハ市中ヲ徘徊シ、立身ノ地ヲ得ントシ、而シテ未ダ心ニ適スルモノヲ得ズ。心身旣ニ疲レ、茫然トシテ旅宿ニ歸ラントシ、四條通ヲ過ギ、西座(當時北側ニ東西ノ二劇場アリ)ノ前ニ至リ、偶マ同座ニ淨瑠璃ノ興行アルヲ知り、自己ノ囊中一枚ノ阿堵物ナキヲ忘レ、直ニ場ニ入ラントス。所謂木戸番ナルモノ、岸駒ノ胸ヲ突キテ入ラシメズ。岸駒強テ入ラントス。互ニ爭ヒテ已マズ。時ニ場中第一ノ淨瑠璃語ヲ以テ呼バル、麓太夫之レヲ見テ、其ノ淨瑠璃ヲ聽カントスルノ熱心ナルニ感ジ、入リテ聽カシム。旣ニシテ麓太夫出デ、語ル。聲大ニシテ能ク徹シ、四條磧ノ中央ニ在ルモ能ク聞クコトヲ得ルト云フホドナレバ、場中寂トシテ聲ナク、聽衆ハ或ハ泣キ或ハ怒リ、語ルニ從ヒテ悲喜ノ情ニ堪ヘザルサマナリ。岸駒其藝ノ絶妙ナルニ驚歎シ、且ツ曩ニ無錢ニテ場ニ入ルヲ得セシメタルノ恩ニ感ジ、太夫ニ從フコト數日、太夫モ亦タ甚ダ之レヲ愛セシカバ、身ヲ斯道ニ投ジ、麓太夫ノ弟子タラント欲シ、而シテ私カニ思ヘラク、是レ賤業ナリ、余ガ立身ノ地ニアラズト。終ニ辭シテ國ニ歸リ、後一年再ビ京都ニ來リ、斷然意ヲ決シテ後素ノ事ニ身ヲ寄セヌ。麓太夫死スルニ臨ミ、遺言スラク、余ガ祕書ハ悉ク岸駒ニ贈レト。又淨瑠璃ノ朋友數人アリ。岸駒會アル毎ニ名ヲ匿シテ其中ニ加ハリ語ル。一日某席ニテ壇ニ上ル。聽衆其拙ナル聽クニ堪ヘズトテ、皆罵リテ出デ去ル。席主怒リテ云フ。何ガ故ニ此ノ如キ未練ナル人ヲシテ語ラシメタルゾト。之レガ紹介者、終ニ實ヲ以テ告グ。岸駒失敗シ、謝スルニ辭ナク、虎ノ繪數葉ヲ畫キ、逃ゲ去レリ。

岸駒畫家トナリテ後、密カニ麓太夫ヲ招キ、其技ヲ學ブ。而シテ鄉國ノ訛言去ル能ハズ。人皆聽テ笑フ。是ヲ以テ奴婢ヲ一室ニ集メ、語リ聽カセテ、若シ誰ニテモ訛言一ツヲ指摘スルモノアラバ、金三文ヲ與ヘント約シ、云ヘラク。錢ヲ取ラル、ホドノメニアハザレバ、此ノ癖ハ矯メ難シト。年七十二至ルモ、興ニ乗ズレバ、家人及ビ門弟子ヲ集メテ、語リ聽カセリ。

二十八歳ノ時、初テ畫家ノ門ヲ京都御幸町三條上ル町ニ開ク。蓋シ國ニ在リテハ、是ヨリ前旣ニ畫ヲ以テ業トナシタルナリ。

嘗テ與謝蕪村ノ養子トナル。意ニ適セズシテ去ル。養家ニ在ル纔カニ正月三ケ日ノミ。京都美術協會雜誌、大澤孤芳(芳太郎)が竹堂の未亡人(駒の六十一歳の時の初孫に聞きて記せるもの

岸駒若年の時、東海道を旅行して道中頗る窮せしが、三島驛に宿せし時、祭典の前なりしかば、爲に燈籠の畫を作りしに、大いに賞せられて、續々揮毫の求めありきとぞ。(巨勢小石談)

岸畫コト希也。厚謝アレバ書ス。世人之ヲ惡ムモノ有テ、様々虚談ヲフレテ之ヲソシル。先年修學院行幸ノ前ニ、京畫師各分レテ諸席ヲ畫ク。岸ハ古溪



三笑ヲ書クニ、一人不笑ヲ書ク。役人トガメケレバ、返答ニツマリ、洛外サガニカ退洛アリ。勤ナラズ云々。(古書備考)

岸厚謝ナラデハ不書ヲ憎ミテ、廿四兩ノ屏風一雙ヲ頼ケルニ。速ニ書テ越シケレバ、彌ニクミテ、一日申合テ、岸ヲ也阿彌へ招、酒酣ノ時、炎暑難堪シ、浴衣ニナルベシトテ、皆々へ新衣ヲ出シ、着カヘシ後、彌アツシトテ、各裸ニナリシ所、此日屏風ノキヌデヲ各下帶ニシテ居。一人心付タル體ニテ、夫ハト尋シ時、ヒロダテ繪様ヲ見セシ時、又アレニモト指テ云。同ジク其書ヲ顯ハスニ、ミナ岸ガ頃日書ク所ナレバ、岸大ニ塞ギテ、俄ニ座ヲ立歸リ、其憤ヤマズ。所司代ノ士へ内々談ケルニ、夫ハ只書ガキシヤト問レケレバ、謝儀ヲ受タルト答ヘシニ、夫レデハ如何様ニナストモ、是非ニ及バズト、取上ゲザリシトナリ。坦云。是等皆岸ヲシル爲ニ、作りバナシニ儲シナリ。(同上)

因みに言ふ。この事、口碑さまざまなり。或は曰く。岸駒の親しき醫師あり。一日駒を訪ひ、餘儀なき懇意先よりの頼みなり、一兩にて尺三の絹に虎を畫きたまへと云ふ。駒千疋ならではとて謝絶せしかば、止むことを得ずとて、二兩二分を贈り、これを畫かしめぬ。後數日醫再び駒を訪ひ、先生は金さへ出せば畫きたまふかと云ふに、さなりと答へしかば、さらば重ねて揮毫を請ふこととし、過日畫きたまひしをばかくせりとて、衣を褰げて、禪と爲したる虎の畫を示しぬ。駒怒りて、再び來るも門を入らしむべからずと、家人に命せしとなり。(望月玉泉談)

岸駒が潤筆を食りしと云ふは著明の事實なるが如しと雖も、その尺牘(植松與右衛門藏)に左の如きものあり。

覺

一金子貳兩壹步也

右者小襖貳枚、雨ニ鷺、關羽之壹幅、三笑之壹枚、四口之御挨拶と御座候而、御惠投不淺、落掌之致候。以上。

四月十六日

岸雅樂助

木村長兵衛様

當時の諸大家の潤筆と、その率の略同じかりしを見るべきなり。

岸駒ノ書名高シト云ヘドモ、皆田舎ヨリ諸國ヘカケテ用ヒ侍ルコトニテ、當時京師ニテハ景文、豐彦ヲ専ラ賞シ候也。岸駒ノ書ミダリニ書カズ。故ニ高謝ヲ得レバ不得止事書クト云弘ム。實ハ左ニ非ズ。年老餘命ナキトテ、晝夜書クコト也。因テ甚富リ。岸駒性巧智アリテ能ク人ノ機ヲ取ルコト上手也。夫ニテ書名モ高クナレリ。好デ義太夫節ヲカタリ、又博奕ニ堪タリ。袁玄道ニテモ金ヲ多ク得タル由。都下人ノ諺ニ、今時山師ノ魁タルハ、田村鯁、越前、諸大夫、大内ノ何役カ勤ル人ナリ、其次ハ一條殿内難波彈正、其次ハ岸越前介云々。各様々ノコヲ工夫致、手段ヲナストノ評判也。文政九、五、十四日、大津喜三郎語。(古書備考)

東寺にて食堂を建て、その天井の畫龍をば當時盛名の岸駒に囑し、先その畫料をも議りけるに、駒これを快諾し、世にも稀なる大作なるのみならず、常に衆目に觸るゝものにて、我が名を弘むるにも宜しければ、潤筆もさまでは申し受けじと云ふ。畫成れる後、東寺より二十兩を贈りけるに、駒はこれに嫌焉たらざりしか、又は賣名の手段にとてか、その翌日、食堂建立資金百兩、岸越前介寄進と大書したる高札を堂傍に建て、畫料はこれにて相殺する由を通告せしかば、圓寺の僧徒その奇策に吃驚せり。この事世に喧傳し、終に加茂季鷹の作とて、



百兩は岸か寄進か知らねども、東寺書料の高い天井の狂歌を詠せらるゝに至りぬ、前田香雪談、古書備考に、西本願寺ニテ書ヲ書、謝儀ヲ厚ク取テ、直ニ寄進ニ付タルヨリ、大ニ名ヲ發セシヨシ」とあるは、この事の異傳ならむ。

同功館新築落成披露の時なるべし。長さ一尺、幅五寸許の紙に、同功館の大印を捺し、下に詩箋の如き界線を書して記して曰く、昔人稱書者、成教法、助人倫、窮神變、測幽微、與六籍同功、余深以爲然、故常每落筆、必向明窓淨几、焚香盟手、滌硯、神閑意定、然後寫忠孝節義、及補風教之物、豈徒以輕心乎、今築館、名曰同功、是跡以諄々乎兒孫之意也、文化四年丁卯秋日、岸駒識、岸九岳談

同功館の成りし頃より、同功の文字を出せる金銀欄を織らしめ、これを己の書の裝潢に用ゐき、同上、今尙往々これを見る、又印金あり。

岸駒曾て清水寺の門前と天寧寺とに虎を畫ける石燈籠を建てき、同上

岸駒は深く己の學問せざりしことを歎き、その子岸岱には頗る學問を修めしめ、その十三参りの時は、歸るまでに百首の詩を作り來れと命じたりき、同上

岸駒曾て富士の畫を囑せられ、同圖三幀を作り、囑主をして好む所の一幀を撰ばしめ、二幀をば墨を抹したることあり、同上

岸駒が畫成る時、門生、家人等を集めて、忌憚なく批評せしめ、意に適したる言を出せる者には、毎に金百疋を與へき、川端玉章談

當時の畫家は、大抵貧ならざるはなかりしが、獨り月俸と岸駒とは富裕にて、岸駒はいろは貸屋とて、多くの貸屋を有したり、同上

岸駒曾て連山及中村仲岳の二人を従へ、長喜庵の畫會に至り、歸途仲岳をして眼鏡を持たしむ。仲岳これを連山に托し、途に連山の分れてその家に歸る時、これを取ることを忘れ、岸駒に従ひて岩倉の別業に歸りしかば、岸駒仲岳に命じ、夜半行いてこれを取り來らしむ。仲岳止むことを得ず、二里許の路を往復して取りて歸りしに、岸駒は尙燭を點じてこれを待ち居りしと云ふ、岸九岳談

東山長喜庵の春秋の畫會は岸駒これを始めき。會は三月と九月との廿三日にして、何故にや、岸駒はこの日は雨降らぬ日なりと言ひ居りしとぞ、巨勢小石談

本禪寺に岸駒の遺物とて一の刀あり。刀身二尺四寸五分、栗色の鞘に納む。竹堂の骨董店より購ひ得て、同寺に寄せたるなり。その欄に岸駒の自筆にて、靈護寛政庚申仲冬十七支、禦厄難子孫寶焉、雅樂助岸駒識と記せり。

一消防夫あり。岸駒に請ひ、文身の爲、その背に虎の揮毫を求む。駒これを誡め、消防夫は善業に非ず、宜くこれを止むべしとて、金五兩を與へ、八百屋店を出さしむ。他の消防火これを聞き、同じく求めけれど、再び應ぜざりき、巨勢小石談

嘗遊東山、過安樂寺、其四壁皆潔淨、翁醺墨於紙、代筆、以作山水、住僧佛然不喜、明日開爲同功而大喜、來厚謝、畫乘要略

岸駒七十二歳の時、島原の一妓を身受して、岩倉閑居の座右に侍せしめ、年よりて若き者居らでは、陽氣ならで畫も出來ずと言ひ、妻は多く岸岱の家に居りき。妓名を幸と云ひ、西之宮の産なり。後岸駒幸の爲に田地など買ひ求めてこれを與へき、岸竹堂の女勝談

當時の畫人はその風頗る卑俗にして、應舉の如きも常に前垂を着け居りき。殊に四條派の畫人は、低き網笠を被り、長き衣服を着て、ぞろりとしたる



風姿一種の俗を爲せり。岸駒これを慨し、平生儼乎たる態度を持し、書を作るにも常に袴を著け居りき。(望月玉泉談)

これ等の逸話に依るも、岸駒の器根旺盛、精力絶倫にして、傲岸の氣宇人を凌ぎ、剩さへ才略に富みて、能く榮達富裕を致し、雄健の畫力を以て一代に獨歩せしありさまを察するに堪へたり。されば野史にも、爲人傑、驚磊落、智慮絶人、又善治生致富、と言ひ、碑文にも、天馬行空、脚不蹈地、豪俊所爲、庸駑誰企、昂々氣岸、落々心田、臂驅神鬼、筆走山川、瑣彼衆工、蔑與競爽、名達天庭、屢獲榮獎、今也逝矣、藏骨於此、佳城百代、英靈千祀、と銘せり。同文又曰く、明和、天明之間、都下畫苑、名手競起、各自成一家、蹤不相襲、爾後氣運漸降、人無骨力、百家相倣、千指同趣、鄭衛郊賸、纔能自救、而其傑然獨出、高揚大旗於中原者、唯天開翁一人而已。これ實に過褒に非ず。曾てみづから曰へらく、我道之學古哲、猶如漁者假筌、得魚而不忘筌、所謂朱愚白癡人、不知變通也、變通在我、專拘繩墨、爲古人所束縛、我則不爲也、我心役我手、我手應我心、心手俱熟、則靈自現。畫乘要略その識見亦見るべきなり。畫風は蓋し花鳥を沈南蘋に得、山水、人物は多く自家の創格に出づ。力量の縱横に至りては、應舉と雖も三舍を避けざることを得ず。これと對峙する者獨り文晁あるのみ。たゞ惜むらくは、その作多く霸氣あり。左に遺作の尤品を掲ぐ。

第二百九十八 岸駒筆醉李白圖

第二百九十九 同筆樹下三嬌圖

第三百 同筆竹鶴圖屏風一雙中の一帖

第三百一 同筆自畫壽像

岸駒の畫、縱横健跋、その天成の力量に至りては、京派諸家中これに及ぶ者なからむ。たゞその筆刻畫多く、その作頗る霸氣ありて、溫籍の致は應舉に輸し、蒼雅の趣は吳春に譲らざることを得ず。蓋しその驕岸なる性格の照影に外ならざるなり。然れども中齡の諸作はその癖少しく、筆情、畫趣並に流暢なるもの多し。こゝに掲ぐる醉李白圖、樹下三嬌圖の如きは即ちこれなり。竹鶴圖及自畫壽像に至りては、一家の典型既に顯著なるを見る。竹鶴圖は以てその翎毛寫實の自在を賞すべく、壽像はその人物畫中の傑作にして、寧ろ彼の著名なる岩倉實相院の日蓮像にも勝れりと謂ふべし。

岸駒の長子岸岱、幼名は太郎、諱を初め國章と云ひ、卓堂と號す。享和の名字、天明五年六月一日生る。文化五年十二月十九日從六位下、筑前介に敘任せらる。同六年父に従ひて金澤に至り、八月廿六日父歸京の後尙留まりて、加州侯の畫事を勤む。政隣記に左の記載あり。

文化七年二月廿八日

右父越前介於京都氣滯ニ付、爲對面、日數廿日計、御暇相願、今月廿六日御當地發出。

京都畫師岸筑前介



文化七年九月六日

京都書師岸筑前介

白銀百枚

白銀貳拾枚

染物五端

生絹三疋

外ニ御内々を以

右筑前介御用相濟、御暇、近々發足歸京之筈ニ付、今六日旅宿ニ御使、御大小將北川榮太郎を以被下之。

文化七年九月十三日

岸越前介せがれ筑前介儀、前記六日記之通ニ付、今朝四ツ時過發出歸京。越前介發出之節同事。今朝於御貸屋御料理被下之。摺換人御臺所付與力相詰、給事坊主。

但爲路用金小判二十兩被下之。且左之通彼是爲挨拶、筑前介より相送候由、主附肝煎より及斷ニ付、記之。

金小判五兩 御貸屋亭主菅波屋 幸助

同斷 料理人磯屋 伊兵衛

同貳兩 右幸助せがれ 三郎助

同斷 右伊兵衛手代 平兵衛

同貳百疋 右幸助 妻ニ

白銀壹封 同斷 小兵衛

同三百疋 右幸助手代 鐵次郎

金五百疋 御貸屋主附肝煎 太郎兵衛

同百疋 右同人家來 壹人ニ

文化十年の平安人物志には岸國章と記して東洞院竹屋町北に住せし由見ゆ。同十四年八月十九日從六位上に敘し、文政八年十月廿八日正六位下に敘せらる。文政十三年の人物志には同功館と號し、天保九年及嘉永五年の人物志には東洞丸太町南に住せし由見えたり。安政禁裡御造營の時、命を蒙りて御學問所御中段、蘭亭圖、彩色、極常御殿二御間、花鳥、極皇后宮花御殿北十帖御間、唐詩七月章、意、彩色同新建虎間、虎、墨、繪同常御殿御寢間、花鳥、彩色、極故、何を成されても、はたこは一際貫日が見えまする、大舞臺何とも申分なし、御老年に似合ぬ御出來は感心く、と評せり。嘉永元年十二月十九日名を昌岱字を君鎮と改む。同六年五月廿七日、年來御畫御用出精、且家例モ有之、一代限り推補とて、藏人所衆に補せられ、同年六月十一日從五位下、越前守に敘任せらる。父に嗣いで、兼ねて有栖川宮御用人たり。元治二年二月十九日歿す。享年八十。本禪寺に葬り、法名を同徳院殿紫岸日峯大居士と云ふ。以上多く岸氏系圖及岸九岳藏文書に依る曾て猛虎圖を畫き、門人神戸麗山をしてこれを石に刻して富岳の頂に建てしむ。岸岱は富裕の家に人となりしかば性頗る鷹揚にして豪遇の質あり、身長高からざりしかども、肥滿して上品なる風姿なりき。その東洞院の家は頗る



宏壯にして、庭上鶴を畜ひ、黒羽二重の衣、仙臺平の袴にて一生を過しぬと云へば、その華奢の程も察せらる。たゞ晩年火災に遇ひて後は、生計稍裕ならざりきと云ふ。岸駒頗る岱の教養を嚴にして、殊に學問を勉めしめしかば、岸家歴代の中、文筆最も勝れたり。岸九岸駒自筆の壽像の上に、碑文を岸岱の記せるものを觀ても、その書蹟の佳なるを認むべく、その家に遺せる畫訓岸九以てその文章を見るべし。曰く、「夫畫者、不知其實、則不得盡其意、不得其意、則不成其形、近世並頭畫工、據摹本作畫、故不能脫三寫誤、是慚愧甚哉、願後來勉強之諸子、觀此意趣、而向縑紙落筆、則得其妙必矣、」岸岱岸岱の尺牘あり。玉川の條に出づ。參看すべし。畫乘要略の「卓堂先生曰」の評語亦皆その才を見るに足れり。同書に曰く。「翁教之痛責其不能、然而益勉不已、遂熟其法、最善人物山水、至如飛禽走獸、出其右者殆希。岸岱の逸話は名家歴訪録に左の一則望月玉あり。

岸岱翁の云はれましたには、眞個に鳥雞でも描ふと思へば、其鳥雞が一貫目の重みのあるべきものは一貫目、七百目のものは七百目といふ風に、鳥の目方まで畫面に見へる様でないといかむ、連山の畫はうまいが、兎角淺薄でどもならぬと。そこで或時連山が畫帖に鹿を描きましたのを見て、此鹿は秀吉公の歌と同じで、奥山に紅葉踏分鳴く螢、しかとも見へず燈火の影だと笑はれました。

岸岱が遺作中の尤品は、蓋し京都皇居の障壁畫なるべし。左にこれを掲ぐ。

### 第三百二 岸岱筆駒迎圖小障子

岸岱は父の風を守りて變せず、力量、技巧共に父に及ばずと雖も、尙頗る見るべし。こゝに掲ぐるは、前にも記せる安政禁裡御造營の時の筆にして、岸岱の遺作中最も佳なるものの一なり。

岸慶

岸岱三子、二女慶、禮、梅女、所同代組、與力小野繁右衛門に嫁して、歿す。法あり。長子慶諱は昌慶、字は子善、人物志士護堂又台岳と號す。文化八年五月十九日生る。主

殿寮生火官人と爲り、從六位、長門介文政十三に敘任せられ、兼ねて有栖川宮近習たり。操行修まらず。嘉永元年十月十八日、三十八歳にて歿す。

岸禮

本禪寺に葬り、法名を覆自院殿泰念日言大居士と云ふ。次子禮諱は持禮、字は士弟、雲峰、化鵬、白雲館の號あり。文化十三年十二月十七日生る。

隨身の株を買ひ、婢と通じ、不埒の事あり、分家せしめらるる事云ふ。近衛府官人と爲り、岸大路と稱す。姓。既にして從六位、左近府生、正六位左近將曹天保九年及嘉永五年の人物志に岸大路左近將曹とあり、室町

四條を経て、從五位、右近將監慶應三年人物志に伏見下野守に敘任せらる。後伏見に居る。安政の平安畫家評判記に上上五百兩として淺尾爲十郎

に比し、是は歷々の御子息にて、何もかも出來升、全く御骨折らるゝ故、しつかりと見堪へが有るは奇妙く、此御方はいつも御出精なさるゝ、當季御人も少き折柄にて、追々御上達、立者に成られませむと評せられ、戀づくしには「心貞婦人の戀」と題して、「人目から見より、その

身一ばい苦勞也」と記されたり。明治十六年五月廿四日東京に歿し、淺草端場町法源寺淨土に葬られ、法名を雲峰院殿化鵬持禮大居士と云

ふ。系甚しき近眼にして、その畫は善からざりき。岸九三子、二女幾江、嘉永七年越中國福光平氏石崎宗太郎に嫁す。持禮、天保十二年七月五日生る、幼名健英、諱は禮、字繼

岸誠

に敘任せらる、その子持明は畫を作らず、忠次郎（早）世滿、嘉永以上多く系圖に依る。あり。岸岱の季子誠、幼名於兎之助、諱は昌成、字は士敬、三峯と號す。文政十一年九月廿七日生る。主殿寮生火官



人、從六位嘉永五年及慶應三年人物志に見ゆ、東洞院丸太町南、丹波介志に見ゆ、東洞院丸太町南に敘任せられ、兼ねて有栖川宮近習たり。父に學びて畫を能くせり。安政禁裡御造營の時、命を蒙りて御學問所御三間下段駒幸、砂を畫き、平安畫家評判記に「上上（下の上字の七百兩）として中村玉七に比し、此お方は親玉の御子息にて、只今は御修業第一の處で御座り升、中々お若いに似合ぬ、かつたりと出來、おこなしきお人で御座り升、此上乍ら御出精なされたら、何分親玉の子息にて、今に大立者になられませふ」と評せられたり。慶應三年八月九日、四十歳にて歿す。本禪寺に葬り、法名を同勇院殿體領日間大居士と云ふ。誠の子、江、明治十八年十一月二日廿二歳にて歿し、養子顯吾（東京府士族山口藩昌三男）嗣ぐ、現に東京に在り、畫を業とせず、系圖

岸成

岸成は岸駒の門人にして養子なり。貞女に配す。實は高見氏。寛政八年八月十一日生る。幼名三郎。諱は昌成、字は子化、螟蛉と號す。文化十三年四月廿九日、二十歳にて歿す。本禪寺に葬り、法名を清風院搖樹信士と云ふ。系一女子春成、後あり。岸駒の門人岸徳これに配す。實は青木氏。

岸連山

文化元年二月四日京都に生る。幼名徳次郎、通稱文進、諱は昌徳、字は士道。連山と號す。居を萬象樓と云へり。少より岸駒に學ぶ。駒弟子を教ふることを極めて嚴なり。連山十餘年善くこれに事へて惰らず。由りて義子たり。文政六年有栖川宮近習と爲る。同十三年の人物志には「萬北山通稱を徳次とあり。天保九年及嘉永五年の人物志には、柳馬場押小路北に住せし由見えたり。安政六年十一月十四日、五十六歳にて歿す。

本禪寺に葬り、法名を萬象院連山日徳居士と云ふ。系圖、畫三女、三子。已春、女、早世、元女、竹堂に配す、清女、早世、九岳、八十吉、早世、長光、幼名、安之助、林氏を嗣ぐ、養子、竹堂は明治、文政九丙戌年四月二十二日生、安政四丁巳年八月朔日、有栖川宮近習、明治四年正月御一新、二付、暇ヲ賜フ、同年七月歸南ス、同廿九年六月帝室技藝員被仰付、同三十年七月二十七日死、七十二歳、京都本禪寺ニ葬リ、眞月院竹堂日祿居士ト諡ス、三女、二子あり、陸女（早世）、勝女、島津ニ嫁ス、千代吉、早世、彰（名昌彰、字逸然、號錦水、通稱應治、文久三癸亥年九月十八日生、明治三十年一月卅日死、法名連成院、錦水日彰信士、留尾（島田ニ嫁ス）、これなり、養子、隆昌、號米山、通稱精太郎、養子、島津友次郎、長男、明治十六年月日生あり、岸英は系圖に「名昌英、字子華、號九岳、春翠、迎あり。性頗る謹格、岸九岳曰、堅春軒、幼名熊太郎、右京、征弘化二乙巳年五月六日生、文久二壬戌年十二月十五日有栖川宮近習、明治四年正月御一新、二付、暇ヲ賜フ、同年七月歸南ス」とあり、現在なれども、酒を好み、又割烹を善くせり。畫は常に寫生を旨とし、門人にも勉めて寫生を爲さしむ。巨勢小最も花鳥を善くせり。安政禁裡御造營の時、命を蒙りて御學問所雁御間、蘆雁、中、常御殿申口廿四帖間、谷川熊、及皇后官御黒戸新建十帖御間、草木群獸、を畫けり。平安畫家評判記に「極上上吉、九百八十兩」とし、尾上多見藏に比し、此先生は總花方の親玉、何を成されても美しく花やかなる事感心く、いつも御盛にて御出精は御苦勞、大立者とはキツと見えます、當世の人氣を能くつて成さり升故か、皆人が引まする、ごこでも大當りく」と評せり。

第三百三 岸連山筆蘆雁圖障子

岸派の畫風は連山に至りて稍改まり、近時竹堂再たびこれを變せり。連山の變化は蓋し圓山、四條の風化を受けたるなり。花鳥の寫生は最もその長せし所とす。本圖は前に記せる安政禁裡御造營の時に畫ける御學問所雁之御間の障子にして、遺作中の尤品なり。

岸良

岸良も亦岸駒の門人にして又養子なり。岸成の歿後、貞女に配す。實は濱谷氏。寛政十年二月三日生る。幼名五郎。系圖、文政五年人物志、室町四條南初め佛畫師土井月樵の門人巨勢小なりき、諱は昌良、字は士良、通稱雅樂介、文政十三年人物志乗鶴と號し、居を畫雲樓と云ふ。有栖川宮近習たり。嘉永五年平安人物志には岩倉に住せし由見ゆ。同年三月十九日、五十五歳にて歿す。本禪寺に葬り、法名を畫雲院良虎日猛居士と云ふ。系圖、畫乘要略に曰く、長花本草蟲



岸恭

設色妍淨。性工巧に長じ、曾て師翁の像首を塑し、又樂を好み、鼓、大鼓を能くす。岸九家をば常にその妻に托して諸國を歷遊せり。女勝談の四子、三

女親定松尾氏ヲ嗣グ、幼名鵬太郎實相院宮坊官、芝之坊法眼、二郎早世、伯豐北河原氏ヲ嗣ク、幼名康三郎、實相院坊官、あり。岸恭稍著る。諱は昌恭、字を士儉、鶴堂と號す。幼名五

郎、後通稱を雅樂助、又内記と云へり。文政十二年三月二日生る。弘化二年有栖川宮近習と爲る。系安政禁裡御造營の時、皇后宮常御殿南廂南角

杉戸南面牡丹獅子、北面山邊時雨、を畫き、平安畫家評判記に「上上下上の七百兩」として中村翫雀に比し、此お方は歷々の御子息にて、只今御修業第一の處で

御座い升、以前は左程にも御座りませなんだが、近頃はお心を入れて御出精なされ升故か、追々上達で御座り升、然し中には些むづかしき

ものも御座り升れど、元來御器用筋にて、何にても可なりになされまする故、當季世間の評判も宜く成りました、此上乍ら御出精なされ

ば、何分親玉の御子息故、大立者と成られませう、近頃は太に能く成られました、御美事々々、去年ら散財は御やめが宜しふ存ます」と評せら

れたり。明治四年正月、有栖川宮近習は御一新について暇を賜はり、同七年九月過去帳は十月十九日、四十六歳にて歿す。本禪寺に葬り、法名を鶴堂院

壽遠日恭居士と云ふ。一子、二女あり。福二郎早世、夏女、雪女の夫西洞院松原下ル西側岸德太郎、刺繍を業とす現在

岸駒の門人

岸駒の門人にはその養子と爲りし者の外、尙許されて岸氏を冒せるものあり。岸讓、肥前の人、通稱俊平、號天岳、その門人に岸陽通、岸順堂、東國の人、號

龍山同上、元醫師巨勢小石談、居成風館と云ふ、押小路柳馬場東に住せり、嘉永五年人物志、安政禁裏造營の時、皇后宮東對屋從東四上段に列女傳啓母塗山を畫けり、平安畫家評判記に「上上土

岸悌八行畫樓、岸九岳談これなり。然れどもこれ等皆著れず。その名世に聞えたるは河村文鳳、横山華山、望月玉川、村上松堂、白井華陽等あり。

河村文鳳

河村文鳳名は龜、字は俊聲、畫乘要略及鑒定便覽文化十年人物志には、馬聲、號首陽館、京都の人なり。文化の平安畫工視相撲には東前頭の第五位、豐彦に列せ

河村瑞鳳

らる。畫乘要略に曰く、師岸翁、亦出入諸家、自爲一格、長人物、筆力雄偉、又善邦俗人物、不假思慮、援筆立成、如其山水、秀潤奇逸、識力稱其力量氣

局之壯矣。古畫備考に曰く、其畫新奇を極む。於是一旦大ニ行レ、師岸駒と頡頏ス。少シ靜マリシ頃ニ物故セリ。千春話文鳳畫譜の著あり。世に行

はる。文鳳の養子琦鳳、本氏は竹内、享和二年の名諱は駿、文化十年字は五逸。家聲を墜さず。要竹裏館と號し、釜座夷川北に住し、備前目に任ぜらる。琦

鳳畫譜、琦鳳漫畫、文政十三年、天保九年人物志の著あり。文鳳の門人に風僊あり。筆法その師に似たり。要

横山華山

横山華山は惟馨、江村春甫の養子、實はなり。名は一章、字は舜明、要舜明、要平安人物志に從ふ。幼名徳二郎、通稱主馬、京都の人なり。要文化、文政十三年及の人物

志に出で、文化には、笹屋町、文政には、室町一條南に住せり平安畫工視相撲には西前頭二段目の末位、白芝山に列せられたり。初め土方稻嶺、村上東洲を師とし、後岸駒の門人

たり。諸國を歷遊す。畫乘要略に曰く、師岸翁、又從吳月溪、稍更其格、山水人物花鳥皆能之、嘗觀其邦俗美人圖、冶而清、艷而逸、迥拔時流。天保八

年三月十七日、享年五十四にして歿す。忌辰口碑に傳ふる所に依るに、華山初め極めて貧にして、北野天神社内、に砂繪を業とせしが、應舉一

日、これを見てその天才の妙に感じ、伴ひて家に歸り、畫を學ばしむ。繪畫叢誌、月と云へれど、強ち信じ難し。華山の養子華溪、中尾文右衛門次男、華山の歿亦

畫を能くす。名は信平、通稱主馬之介、別號嵐山、室町一條南に住せり。嘉永五年人物志に出づ。安政禁裡御造營の時、御學問所御獻之間下段、高維

横山華溪



色彩を畫けり。平安畫家評判記に「至上上吉九百八十兩」〔文麟の次、應立の前〕として實川延三郎に比し、「此先生は御歷々の御跡にて能出來升、御若年より御業にてお骨折られた故、今は當氣の花方顔、世間の評判もよし、いつもさつぱりと嫌味なしに美しく出來升る、立者とはキツと見え升、追々は御出世で、一方の座頭と今に成られませう」と評せり。後烏丸御池南に住し、元治元年六月六日四十九歳にて歿す。養子華田早世せり。華溪の門人に小澤華嶽〔名定信、通稱桑次郎、紀州家、奥力の子〕、小林雪山〔應司あり〕。

望月玉川

望月玉川は玉蟾の孫、玉仙の子なり。〔玉蟾玉仙の二家は後章明清畫實は玉仙の妹松田五郎兵衛に嫁して生む所、玉泉諱は重輝、畫乘要畧及人物志名を顯し、今派に攝してこれを敘すべし〕父玉仙の歿するや、玉川僅に四歳なりき。稍長じて畫を村上東洲〔玉蟾の門人、大に三玉小傳に從ふ〕字は子瑛、玉川はその號なり。〔前記岸駒に從ひて金澤に行きし望月左近あり、左近は玉川の通稱か〕父玉仙の歿するや、玉川僅に四歳なりき。稍長じて畫を村上東洲〔玉蟾の門人、大に三玉小傳に從ふ〕字は子瑛、玉川はその號なり。

學ぶ。十四歳の時、岸駒に請ひて千日の間、その弟子たることを許され、岸家に在りて修學す。十九歳にして長崎に遊び、姑く蘭館に留まり、更に東遊して文晁を叩き、久からずして京に歸り、又吳春の風を慕ひ、終に一家を成せり。〔以上三玉小傳に依る〕畫乘要畧に曰く、「學岸翁、參以吳月溪、差更其格、筆情輕淡、氣味極清、名于時。蓋し岸派と四條派との折衷なり。文政、〔十五年〕烏丸竹屋〔北南〕、天保、〔九年〕室町嘉永、〔五年〕新町丸太〔北〕の人物志に出で、戀づくしには、道具撰の戀と題して、かこひて得心さすのじや云々と記せり。嘉永五年三月六日〔三玉小傳、人名辭書等六月とす、今玉泉の談に依る〕享年五十九にして歿す。寺町大雲院に葬り、法名を朗譽清湛、玉川居士と云ふ。〔三玉小傳、玉川の妻は明治十一年六月廿六日歿、八十一歳〕その子玉泉家を嗣いで現在、明治の京都畫壇に名あり。明治三十四年四月廿四日、玉泉祖先三代の遺墨展覽會を開きて、多く遺作を集覽し、又三玉小傳〔印譜を兼ぬ〕を印して同好に頒てり。これを見るに、玉川の畫印に「西洞」又「資清」と刻せるものあり。その別號ならむ。玉蟾以來故〔玉蟾の條に述ぶ〕ありて雲州侯より四口の俸を受け居りしが、玉仙の歿せし時、玉川幼なりし爲に斷絶しつれど、維新前までは、侯の京都留守屋敷に候して年を賀し、毎に上席に着きぬ。〔玉泉談〕名家歴訪錄に、玉泉の談にて左の逸話を載せたり。

玉川が或日に、平生懇意に致しまする小野善九郎といふ、これは絲物の問屋で、幕府時代に三井やの大丸などと並んで、爲替方を勤めてゐた小野組の隠居になる人で、固より豪家のごとで、ムいますから、所藏の書畫も澤山あり、諸道具なども餘程整つたものでなければ用ゐません。好事の方で、平生茶の湯が大好で、ムいまして、先代の玉川も同じく嗜んで居りましたから、始終往來をして居りました。そこで或日に遊びに參りました處が、其茶室の一間餘もある床に、常信の描た細幅〔ほらみ〕で、紅葉した蔦が上から一すじ眞直にさがつて、その中程に白頭翁〔しらがしら〕が一羽とまつてゐるといふ、之は善九郎さんが秘藏の一幅を掛けてありましたが、其畫が何ともいへぬよい出來で、ムいますから、玉川が眼も離さず、大層に感心致して居りますと、善九郎さんが云ふには、玉川さん、私は別に茶がけの横幅〔よこみ〕をこしらへたいと思ふのやが、どうか横幅に茄子を三ツ描て下さらんか、御禮は何程でもするし、またお望みのものがあれば、何でも上るから、どうか十分骨を折つて、無類といふ茄子を描て下さいとのことで、玉川も承知致しまして、いかにも夫では描きませうと、二三日してから描て持て參りますと、善九郎さんが見て、ウム、いかにも之は茄子ぢや、茄子には違ひないが、然しこんな茄子なら、小便とかへてもありそうなものぢや、私しの頼むのは小判幾枚で三箇を買ふといふ茄子やから、此茄子ではいかんといひますので、夫ではとまた描て持て參ると、此茄子でもいかん、描てもくこれではいかん、と、請取られんです。其頃未だ私は幼年で、ムいしましたが、亡父が大層困つてゐるのを



覺へて居ます。とう／＼同じ茄子の書を、凡そ百四五十枚も描ました中で、自分も之ならばと思ふのが一枚出来ましたので、夫を持て善九郎さん處へ見せに行きますと、善九郎さんも熟々見て、ウム、これはいかにも無類の茄子ぢや、此茄子は外の畑では出来ぬ、これは望月さん處に頼まねばない茄子ぢやと、大層喜んで、厚く謝義を致されましたが、玉川が歿しました後、私しも月の書について、此隠居に辛く苦しめられたことがふいます。

玉川の江戸に遊ぶ途次、岸岱の添書を携へて、植松與右衛門を駿河原驛に訪ひしことあり。左にその添書植松與右衛門藏を掲ぐ。

春和之砌御座候處、舉家御揃、愈御清榮奉賀候。隨而弊家小大無事罷在候。乍慮外御休意可被下候。然バ此度弊門社中望月玉川と申者、富嶽一見并出府之心懸ニ而、出途致候ニ付、貴家御尊申候處、屈竟之富峯一覽之場所御尋問申度願候ニ付、添書仕候。御面會被下、宜御教示可被下候。尤鈴木茂三郎子杯在京中、時々出會致候者ニ御座候。尙本人々御聞可被下候。先ハ右得貴意、如此御座候。早々頓首。

三月廿八日

岸筑前介

植松與右衛門様

二白。家父々も宜可得貴意旨申聞候。是も隨分氣丈ニ罷在候。乍慮外御休意可被下候。以上。

村上松堂

村上松堂姓は源、名は元徳、字は士厚。文政、天保人物志に依る、要略には名は篤、文化人物志古書備考所載には名元章、字徳合、號廣大、辭には名茂、篤字子厚と記せり錦小路西洞院東文政、天保人物志に住せり。文化の平安畫工相撲に

は西前頭二段目の第八位西村中和の前に列せられたり。天保十二年九月廿四日、六十六歳にて歿す。思辰録畫乗要略に曰く、平安人、師岸翁、差變其格、嘗

作百工之臥軸、揮灑應手成、各盡其狀、布置務求新奇、翩々足雋庸輩。この人通稱詳ならざれども、恐らくは政隣記に見えたる村上健亮即ちこれなるべし。同記に依るに、文化六年八月師岸駒に従ひて金澤に至り、師の歸京後、尙岸岱と共に留まりて加州侯の繪事を勤め、翌年五月事了りて歸る。同記文化七年五月九日の條に左の記載あり。前出岸駒の條にも出づ

覺

一白銀二拾枚

村上健亮

包のし

御目錄

(中略)

右今般御造營方御繪御用相勤候ニ付、被下之候條、勝手次第可有歸京候。以上。

午五月八日

御造營方

村上松嶺

松堂の子元茂、字は廣大、松嶺と號し、通稱を源之亟と云ふ。亦錦小路西洞院東に住せり。天保、九年嘉永、五年の人物志に出づ。安政禁裡御造營の時、

皇后宮東對屋從東五上段列女傳湯妃有華、滿彩色及若宮御殿次ノ御間繪松、墨を畫けり。評判記に「上上下の上、字の下の下、飛白の五百兩」として中山文五郎に比し、「是はチャリ

の先生なれども、近比お骨折らるゝ故殊の外能なりました、近頃はいつも御出精御苦勞く」と評せられたり。



白井華陽

白井華陽諱は實、字は白華、通稱貞介。文政五年人物志、景廣、文字を士潤に作る、東洞院四條北後名を廣、文政十三年人物志、士潤改む、黃鶯道人、要略、序樗泉畫樓同、白の別號あり。天保二

年白井序畫乘要略五卷を著し、土佐光信、僧如拙等以下の畫人の小傳を録し、問々論評を加へたり。その仁科幹の序せし文に曰く、「白井華陽越

後新瀉人、齡童時、業已善畫、從北汀吳氏而學、弱冠遊荏土、執贄鵬老、逍遙藝苑、或與奇衲異僧相往來、頗通禪理、後往京師、問業岸父子、而技愈進、蓋

其所師友皆一時雄杰之士也、爲人磊落、不拘細節、嗜酒激烈、如將騎鯨、輒黿、擇抉天地之垠、蓋稟北溟風濤之氣而生矣、然而其於所師、敬之如嚴君、

其於所弟、愛之如慈母、常誘之以孝弟之訓、雖或折襲笞之、而其惠存焉、有以文學名世者、則必訪之、帖眉下氣、恭々然如不足、其相與舉白也、則談笑

興、雲、榻角生風、眞快活人也。」その人と爲り想ひ見つべし。門人石田秀峯、近江人竹村良明、平安人小浦松園、能登人井上玉溪、平安人上田華堂、近江人、要等あり、署に出づ

上記の外岸駒の門人に尙左の諸家あり。

附錄岸駒門諸家

齋藤霞亭 文化六年八月師岸駒に従ひて金澤に至り、師の歸京後も、岸偕及村上健亮と共に留りて加州侯の繪事を勤め、翌年五月、村上健亮と共に、

金を賜はりて歸る。政隣記に左の記載あり。

覺

(中署)

一同(白銀)十五枚

齋藤霞亭

右今般云々(以下前出松堂の條に抄出せり)。

本津成助 越前(粟田部)豪農也、岸翁立石於東山清水寺虎、鏤成助補竹石(畫乘要略)この燈臺の刻記に文政九年丙戌春云々」とありて、各々名を識せり。

成助は通稱にして亦その號なり。居を成助館と云ふ。岸駒往々その家に遊べりと云ひ、岸駒の遺作多くここに存す。蓬萊、履工、彈琴、虎、芭蕉人物、孔雀、

美人、裁衣(前出)等の諸圖、皆大作にして佳ならざるなし(曾孫群平氏藏)。

松本文平 名璣、備後人、學岸翁、作山水人物及龍虎、又工詩(同書)曾て師に従ひて金澤に行きしこと、前に見ゆ。

清水天民 名鑑、近江人、初學君圭、後師岸翁、與文鳳、齊名、後遊江都、惜哉中年而歿(同書)

吉田偃武 初學君圭、後師岸翁、與天民、齊名、恨未見其遺蹟(同書)

池專定 號瓢庵、平安人、師岸翁、寫墨梅(同書)

森鳳淵 名充、加賀人、學岸翁、以畫受俸於加賀侯(同書)

廣瀬順固 近江人、師岸翁、長牛馬、其子栢園亦能畫(同書)

赤松鶴年 字玄裳、平安人、師岸翁、作山水人物(同書)

宮澤武曰 信濃善光寺人、以諸歌名於時、又學於岸翁、畫蘭。梅泉曰、貳曰年五十餘、遊於平安、食客於岸翁家、常與翁將棊、品各低、然旗鼓相當、一日余訪翁、熱

甚、武曰衣綿袍、流汗滿面、余呀問、武曰曰、今日吾將棊大敗、而至于此、蓋武曰贏則取翁畫一幀、輸則暑衣綿袍、寒衣單衣、常以爲例(同書)



村東旭 加賀人、學岸翁、得其法、其子梅岳傳家學、同書

岸岱の門人に神戸麗山、柴田泰山、岸規等あり。麗山諱は信之、後隣と改む。通稱を内藏之助と云ひ、後文久二年中御門家より富士亮の通稱を賜はる。命名の文書家に存せり享和二年九月廿三日駿河國庵原郡北松野に生る。父名は好吉、母はのぶ。世々醫を業とせり。麗山はその長子なり。幼より畫を好

み、十四五歳の頃、同國沼津の畫工、キケイに學ぶ。既にして家をその弟柳恭柳恭の弟喜惣治あり、他家を嗣ぐに譲り、文政九年四月終に志を立て、京都に上り、岸

駒、岸岱の盛名を聞き、その門に入り、留まること數年にして郷に歸る。畫名漸く近國に聞え、駿甲遠豆の諸州に歴遊し、終に有渡郡中吉田に

一小菴を構へてここに住し、又屢々京都に遊べり。天保十二年上京の時、岸岱より白石の名を與へらる。その命名の書に曰く、名白石、字云白

石、號白石、別號麗山、天民堂。萬壽無疆、天保辛丑冬與之同功、筑前介岸岱印又その居を不二菴、岸岱の書せし金鳳亭正二位明經博士清原宣明の書せし麗山に存すと號せり。庭田重胤卿宰相右近衛中將正三位の知を辱

うし、安政四年その幣使として東下せし時、愛藏の富士石靈芝石を稱すを贈り、又その囑に依りて富岳圖を畫く。重胤卿これを孝明天皇に獻じ、叡賞

の餘、天覽の印金鳳紐、銀長方印、黑檀、形亦天覽の二字を刻せりを麗山に賜はる。重胤卿の富士石の歌の色紙及短冊家に存せり、麗山が愛せるふじ石を見て、宰相中將重胤、上代の書のひかりもあらはれて、な

世々を祝ふかな、幸たけのうごきなさいし、短冊、又一書あり、曰く、昨年幣使參向之節、所望、富士真景、歸路之後、内々捧大君、敬慮相叶、喜悅之事、二候任上京、其旨、諸記者也、安政五年春、花押、神戸麗山に、岸岱これに附せし書に曰く、一、右、昨年幣使云々、御書、庭田宰相中將重胤卿、神戸麗山に所賜、余又知其事、因記之、云爾、安政五年戊午春、越前守岸岱印文久二年五月十七

日、享年六十一にして歿す。郷里先塋の側に葬り、法名を富山院麗照居士と云ふ。一女にり。名は知惠、同村田中佐十郎に嫁す、その麗山性寡慾、清廉、平生酒

を嗜み、時に或は連日痛飲す。遺作郷里に多く、畫風頗る壯勁なり。好みて富岳圖を畫き、これを以て稱せらる。靜岡淺間社に富岳圖、額あり、天覽の印を

も同圖、額あり、田中家に麗山の富士圖、孔雀圖等の佳作を傳ふ、又同家に麗山の京都より岸岱の猛虎圖碑、裏面に神戸節三の父睦嗣の書を富士山頂の傍、現在に立つるや、麗山その

圖に竹石を合作し、山下にて碑石の概形を面璞し、これを頂上に致して刻せしめきと云ふ。以上神戸節三、田中貞吉二氏の談に依る

柴田泰山、通稱正平、駿河庵原郡庵原村の人なり。父を宇右衛門と云ふ。柴田勝家の末裔にして、庵原の一良家なり。母名はきく。泰山はその次

子なり。文政三年九月十五日生る。幼より穎悟にして畫を好み、嬉戲常に武者繪等を畫く。六歳の時、父これに孝經の讀を授くるに、初め一紙

を教ふれば全篇則ち通誦せり。七八歳の頃より同村の畫人山梨雀山に就いて畫を學ぶ。九歳の時、上野の宮に召され、御前に於いて畫を作

る。時に昭平と號せり。後徳大寺中納言に召されて又畫を作り、神童と稱せらる。十五歳の時、畫きし父宇右衛門の肖像、今尙其家泰山の姪の子に和十郎現在

在り。十六七歳の頃病に罹りしに、徳大寺中納言これを聞き、特に醫を遣はしてこれを治せしむ。時にその母爲に太平記を枕頭に讀みてこ

れを聞かしめしかば、泰山これに由りて頗る人倫の大義を悟り、後四書、五經等を讀みて、みづから徳行を修む。弘化四年歳二十八にして範

京都に上り、岸岱の門に入りて更に畫を學び、業成りて郷に歸り、嘉永四年居を駿府札之辻に卜して揮毫の需に應じ、兼ねて駿府城代の師

たり。その名漸く近郡に聞え、殊に畫鶴に長ざるを以て稱せらる。既にして泰山が温良恭謙にして、父母に事へて至孝なること郷黨に名高

く、終に官に聞え、安政六年正月十三日賞金五貫文を賜はる。事は左の文書柴田和十郎藏に詳なり。



覺

今十三日、於御白洲、御直ニ御舉之上、御褒美頂戴仕候。右御請證文差上候段、町ニ届有之ニ付、別紙心得を以、相觸申候。已上。

差上申御請證文之事。

正平儀、去ル丑年、父宇右衛門一同、町方に借宅致し、畫工家業いたし罷在候處、困窮相暮し候へ共、朝夕父に仕へ方、急度日々食事之義も、好み候ものを調へ遣し、自分ハたばこ、酒等不相用、飢食を致し、菓杯貰候へ者、不殘父にすゝめ、外向に畫料之謝禮相贈候節、不當金錢差越候而も、少も不足ケ間敷義ハ不申、其儘父に申聞、受納いたし候。且又在所庵、原村弟、子家内多病、暮し難澁致し候を、宇右衛門茂心配いたし候ニ付、氣休之ため、自分手元を成丈儉約を用、其餘ハ弟方へ遣し候由、先年兩度妻を姫候へ共、父之氣請不宜迎、離縁いたし候後、獨身ニ而、去々巳年冬比、宇右衛門儀老病罷在候處、日夜心を用、藥用ハ不及申、厚看病いたし、孝心之趣相聞、寄特之事ニ付、烏目五貫文爲被遣候。

一。宇右衛門義悻正平孝心之趣相聞、寄特之事ニ付、御褒美烏目五貫文爲被遣候間、其旨相心得、相憐遣べし。  
右之通り被仰渡候。承知奉畏、難有仕合ニ奉存候。仍之御請證文差上申處如件。

札之辻町、利助扣店

宇右衛門(印)

同人悻

正平(印)

安政六年未正月十三日

御番所様

右正平、宇右衛門に被仰渡候趣、私義茂承知仕候ニ付、奥印仕、差上申候。以上。

札之辻町、丁頭

永五郎(印)

かくて泰山は明治十七年九月十四日、六十二歳にて歿す。靜岡片羽町瑞龍寺に葬り、法名を覺應泰山居士と云ふ。遺作駿河に多し。その家は十六羅漢圖の大幅を傳ふ。畫風能く岸岱の法を守れり。以上主として、同村西ヶ谷可吉の報告に依る

岸規通稱隣内、長門の人岸なり。岸岱に學びて岸氏を冒すことを許さる。その子岸明天保四年生辭書、父に學びて亦畫を作れり。



第二百九十八 醉李白圖 岸駒筆

絹本着色

竪四尺四寸九分、横四尺一寸五分

京都 中川徳右衛門君藏

(第五百七十九頁參看)





「我亦明白，但社會上有一種『三不』的現象，即『不讀書、不讀書、不讀書』。讀書之『不』，有別於心『不』，以『不讀書』為『不』。

(續五百廿十次與筆談)

中川 辭古辭門 卷五

第四八圖 七武發射圖 八一七五發

歸水齋

策一百六十八 雜學白圖 崇禎辛



百子仲夏  
華陽堂









第二百九十九 樹下三嬌圖 岸駒筆

絹本着色

竪五尺三寸九分、横三尺二寸五分

(第五百七十九頁參看)

越前國木津群平君藏





(雍正百廿十式夏參卷)

蘇蘭圖 木箱雜半舊藏

總正只三十七式登辦三只二七正衣

附本舊藏

卷二百廿十式

蘇丁三總圖

單圖筆











第三百 竹鶴圖屏風 岸駒筆

紙本金砂子淡彩

竪五尺一寸一分横一丈一尺七寸四分

(第五百七十九頁參看)

加賀國金澤 横山隆興君藏





二華集卷之八

賦別謝金翁謝山劉興茂

知五八一七一林謝一六一八七十四

謝本金翁年謝

策三百 官謝圖報恩 畢謝











第三百一 自畫壽像 岸駒筆

布地着色

竪五尺五寸、横三尺六寸

(第五百七十九頁參看)

東京岸穎吾君藏





（原註）同書第十一卷附錄一

國語入道七附二八六

通韻錄

卷三百一

自臨御殿

皇極經世

東京皇極經世書局



明和天明之間都下畫苑名手競起各自成一家雖不相參亦  
後家運漸降人世骨力百家相假手指同振鄧衛郭松栢能操  
自故而其傑無獨出焉獨大旗於中原者唯天霖堂翁一人  
而已翁諱昌明一名駒年貢無咤依伯氏葬歸同切館又号  
芝湖堂加賀畫師人其父文右衛門本職中富山屬士致仕  
從加賀而生翁翁  
自安永畫中年遊  
四方後入京以画  
仕於

右福田王府賴雅宗  
助後爲

天朝生六宮人任主  
殿大属又轉越前  
介壽草堂

宮中畫事

天保七年十二月以  
其職歸寺高僧補  
藏人而後叙從五位下進越前守九年十二月五日疾  
而卒年九十五

宣延二年三月十五  
日享年九十歲葬  
廿五日葬于京極  
光了山本禪寺釋  
氏藏之此碑面所  
稱翁公人係翁氏  
爲智惠他人又善  
治生故富饒僧者  
第一座寺以居又  
此一祭於山陽郡  
天淵宮又以自号  
雲高藤氏生三男  
二女長女嗣家能  
曰天島村室

脚不地 永德明高 藤賢謙念 昂：蒙治 藤落心  
田 廣龍神也 兼走山川 藤根藤王 茂興龍美 名  
產

天延 藤龍堂 寺也遊美 龍骨子始 英愛子記  
從四位上大學頭 藤龍堂









京都御所皇后宮御殿

第三百二 駒迎圖小襖 岸岱筆

絹本砂子地着色

竪各面二尺二寸横一尺四分

(第五百八十一頁參看)





（總計六十一款）

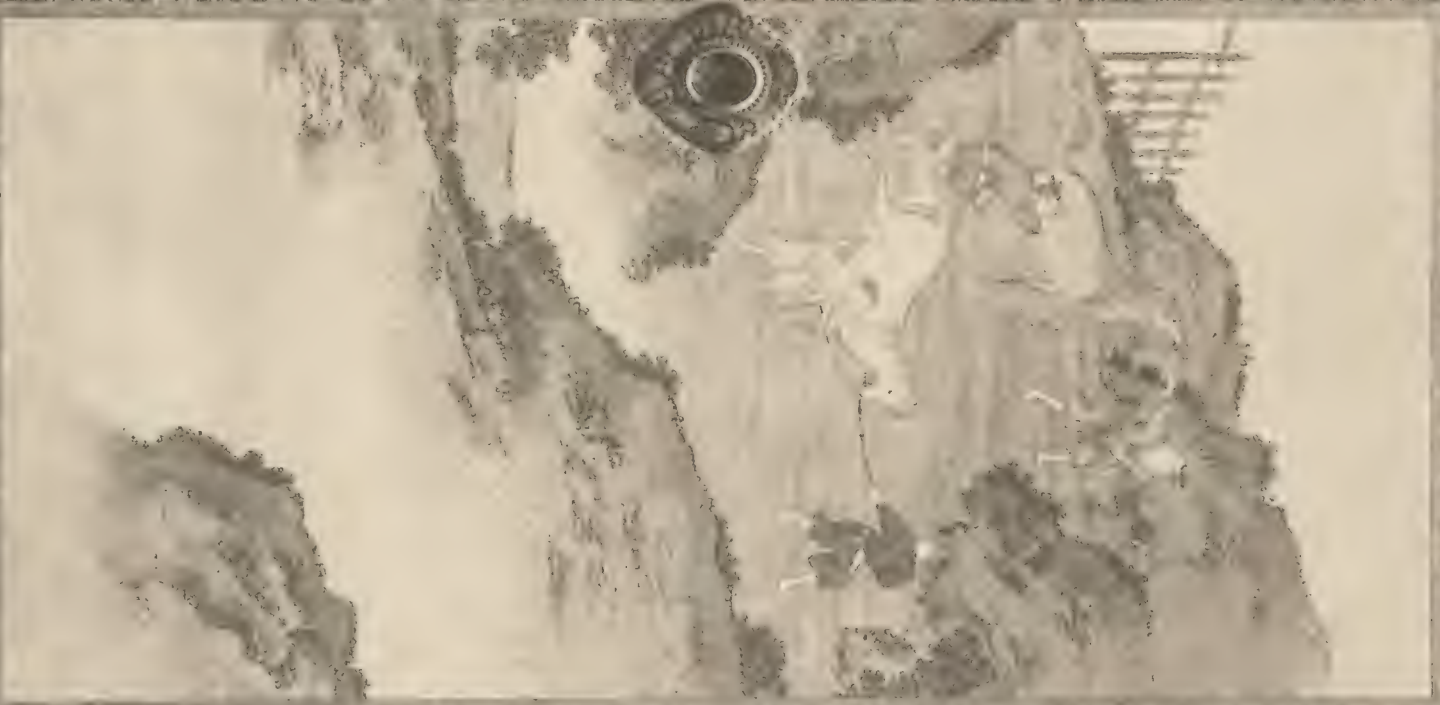
聖谷面二只二十瓣一只四卷

備本朝王族御用

續三百一 御坂岡小磨 畢登平

意准賜預皇氣宮賜與











京都御所御學問所御襖

第三百三 蘆雁圖 岸連山筆

紙本金砂子着色

竪五尺八寸五分、横一丈一尺四寸

(第五百八十二頁參看)





（卷正百八十二頁從舊）

題正以八十五卷歸一第—八四七

題本卷每午頁四

卷三百三 蠶繭圖 景紙山筆

京陽閣初晴景開初曉新











## 第九章 原家

原家の技風

在中

純乎たる土佐派にも非ずして邦俗の有職人物を畫き、加ふるに明清風乃至近古京派圓山、四條、岸等の山水等を兼ねて一家を成せしものを原家とす。その流派としての旗色稍著明ならざる所あるのみならず、血脈歴代の外、門流さまで繁からず、さりて爾餘の諸派にも攝すべからざるを以て、原家としてこれを本章に別叙す。その祖原在中諱は致遠、字は子重、臥遊と號す。その所生を尋ぬるに、若州小濱の藩醫原某の女、その君に仕へて一兒を生み、私にこれを抱きて京都に至り、親族の家に寄る。この兒人となりて後、京都に住して釀酒を業とせり。原性圓印名類部云ふ、在中は即ちその子なり。故に原家の紋圖にかたばみは、小濱藩主酒井家の紋章を略せしものなりと云ふ。幼より畫を好み、家業を喜ばず。石田幽汀の門に入りてこれを學び、更に諸寺に歴寓して元明の古畫を臨撫すること五年、終にみづから一家の風を成し、又故實を研究し、土佐派に倣ひて有職畫を作る。畫乗要略に曰く、「法明人古蹟、筆墨沖潤、名馳遠邇。古畫備考に高島千春の談とて記して曰く、應舉門人、所々相勤メ、畫業ノ繁ランコトヲ求メシ人也。應舉歿後、其門人ニ非ズト稱ス。岸駒惡之。自往テ難之。在中不肯シテ門人ニ非ズト云。岸駒夫ヨリ應瑞方ニ至リ、其由ヲ中、門人帳ヲ見ルニ、在中自筆ニテ入門ノ名簿アリ。果して事實なりや否やを知らず。寛政禁裏御造營の時、命を奉じて常御殿小御縁座敷北方杉戸南表木芙蓉、裏表老瀧を畫けり。文化十年の平安人物志には聖護院村に住せし由見え、平安畫工祝相撲には西の關脇に列せられ、文政五年の人物志には中立賣室町北同十三年の人物志には小川中立賣北に住せし由見えたり。曾てみづから壽像圓頂、十徳を畫き、みづから圖上に記して曰く、

唐我朝の智者達の沙汰し申さるゝ詩作文章博識の學問にも非ず。たゞ心正直にして、親に孝行さへあれば、國家は作り、身も納ると思とりて、外に別の仔細は候はず。五常五倫の教あれど、皆な正直孝行にこもり候なり。此外詩作にはこり、博學に慢じ候えば、聖賢のあわれみにはすれ、本心にもれ候べし。博學多才と雖も、一文不知愚鈍の身となして、文盲のともがらに同じく、智者のふるまいを爲すして、只一向正直孝行をなすべきことなり。

文政十三年庚寅仲春、八十一翁原在中身畫并に記。

天保八年十一月十五日

忌辰、録名印部類、鑒定便覽等廿八日とす、今原家の過去帳に從ふ。

享年八十八。

爲せるは誤なり。

寺町三條上る天性寺に葬り、法名を臥遊室樂譽在中倒立居士と云ふ。

過去帳、四子

在正、在明、在善、在親。

あり。次子家を嗣ぐ。在中の逸話のその家の口碑に傳はれるもの左の如し。

原在泉談、大澤芳太郎記、京都美術協會雜誌に出づ。

在中性剛直ニシテ、情ヲ矯メ俗ニ徇フコト能ハズ。故ニ繪畫ノ揮毫ヲ請ハンガ爲、始メテ來リシ人ト雖モ、己ガ意ニ適セザレバ、叱責シテ退クルコトアリ。其門人ニ對スルヤ、頗ル嚴正ナリト雖モ、之ヲ指導スルニ當テハ、惇々誨ヘテ倦マズ。至誠至ラザル所ナシ。

在中ハ圓山應舉ト親ミ最モ厚ケレバ、往來常ニ絶ヘズ。時ニ或ハ畫法ヲ評論シテ、研究ノ料トセリ。在中曾テ夏毛ノ硬キモノヲ用ヒテ畫筆ヲ製シ、之ヲ應舉ニ示ス。應舉試ニ之ヲ使用シ、大ニ其佳ナルヲ知り、交ユルニ柔毛ヲ以テシ、畢生之ヲ愛用シタリ。世ニ之ヲ圓山筆ト云フ。在中特ニ本願寺法主ノ眷愛ヲ受ケ、多ク揮毫ヲ命ゼラル。曾テ應舉ヲ誘フテ同寺ニ至リ、法主ニ紹介セシガ、爾後應舉亦屢々同寺ノ命ニ依リ、繪畫ヲ調製セリ。

當時小川通中立賣上ル地ニ住シ、其子在明ノ爲、中立賣新町東入ル地ニ家宅ヲ建築シ、且山樂ノ宅址ニ庭苑ノ其儘存在セシヲ見テ、大ニ之ヲ喜ビ、悉



ク購ヒテ樹石ヲ新邸内ニ移シ、且ツ舊形ノ損センコヲ恐レ、自ラ其工ヲ督シ、繼デ己モ亦此宅ニ轉住セリ。山樂ノ舊地ハ新町、武者小路上ル地ニ在リテ、今尙狩野ノ圖子ト云フ。

在中演劇ヲ好ミ、屢興ニ乗ジテ劇場ニ至レリ。俳優モ亦タ往々在中ノ宅ニ來テ、談話ニ時ヲ移セシコアリ。蓋シ在中ハ彼ノ藝ヲ見テ己ガ技ニ資シ、彼ハ故實ヲ質シテソノ技ニ益センガ爲ナリキ。

在中ハ時々兵庫ニ遊ビ、又屢高野山ニ登リシガ、毎歲必名古屋地方ニ遊歷スルヲ以テ例トセリ。是各地ニ在ル門人ノ請ニ依ルナリ。故ニソノ筆跡殊ニ名古屋近傍ニ多ク、門人モ亦アリ。高倉在孝ノ如キ、亦彼ノ地ニ於ケル門人中ノ鏘々タル者ナリ。

在中ハ禪僧ト交ルヲ以テ大ニ樂ミトナシ、又時ニ閑室ニ入テ茶味ヲ弄シ、以テソノ清淡幽雅ノ趣ヲ愛セリ。

在中ハ貴顯名族ノ眷顧ヲ受クルコ頗ル多カリシガ、仁和寺法親王、安井御門跡ハ在中ノ書ヲ學バレ、恩眷殊ニ厚カリキ。

在中ハ最モ密書ヲ好ミ、年老ルニ隨ヒテ益精密ヲ加ヘ、唐人物ノ繪モ彌多ク書クニ至レリ。朝廷ノ御用書ヲ調進セシコ屢次ニシテ、御涼所群蝶圖ノ如キハ、其最モ高雅清麗ナルモノナリ。當地大作ヲ傳フルモノ少シト雖モ、相國寺及建仁寺ノ襖繪、妙滿寺格天井ノ蟠龍圖（既に烏有に歸せり）ノ如キ、ソノ筆跡ノ一斑ヲ見ルニ足ルベシ。彼ノ本願寺漢陽宮屏風ノ如キハ、遺蹟中ノ尤物トス。

在中酒ヲ用ヒズ。常ニ薄茶ヲ愛シ、日ニ數椀ヲ啜リ、以テ例トナス。皆川淇園ト交リ殊ニ深ク、暇アル日ニハ必其家ニ遊ビテ古人ノ道ヲ談ジ、以テ快樂トセリ。又手島氏ノ心學ヲ好ミ、常ニ其書ヲ座右ニ置キテ愛讀セリ。在中慈善ノ心最モ厚ク、每歲末ニ至レバ、白餅ヲ四斗桶ニ盛り、門人及家僕ヲシテ、之ヲ洛北木瓜原ノ貧者ニ施與セシメ、又同地ニ於ケル貧兒ヲ憐ミ、家族ノ古衣ヲ集メ、之ヲ惠與セリ。

在中年八十八ニ及ブモ手尙筆ヲ放タズ。日夜丹青ニ從事セリ。宮津侯京都ニ町奉行タリシハ、屢在中ヲ召シテ有職故實ノ事ヲ尋ネ、ソノ老テ益盛ナルニ感ジ、時ニ長壽ノ術ヲモ問ハレシガ、冬時ハイツモ巨燧ヲ與ヘテ、閑話數刻ニ及ベリ。

在中ハ常ニ山樂ヲ景慕シケレバ、死ニ臨ミ遺言シテ曰ク、余ガ墓石ハ必山樂ノ碑ニ倣ヘト。

在正

在中の長子在正字は子榮。

原家傳、鑒定便覽及名印部類は名近義、字子信、齋乘要畧は字子學とせり

文化

六七

の平安畫工視相撲には行司の第三位應瑞の前に列せられたり。曾て鷹司公の命に

依り、弟在明等と共に梅花百種を畫けり。畫は巧なりしか、惜むらくは操行修まらず。文化七年十月九日、享年僅に二十六歳にして、父に先だちて歿す。天性寺に葬り、法名を皎月院覺峯在正居士と云ふ。

過去帳及原在中以下詳傳

在正の弟在明字は子德、寫照と號す。

文化十年人物志、中立實室町東、平安畫工視相撲行司第五位

父に學びて畫を善くし、且故實家松岡辰方、

吉田社祠宣、安房介

山田以文久留米藩士等に學びて、頗

る有職故實に明なり。寛政三年正七位下に敘せられ、同五年縫殿寮史生を以て若狹目

文化、文政人物志

に任ぜられ、同十二年從六位下、天保五年正六

位下内舍人、同六年兼大和介、同七年兼内匠大允、

天保九年人物志

同十三年正六位上に敘任せらる。その天保五年十二月廿二日、正六位下内舍人敘任

の時、甘露寺徳大寺兩傳奏御面前にて仰を渡されし御沙汰は左の如し。

若狹目平在明



臨時祭御再興御即位大嘗祭、仙洞修學院御幸等節々、舊儀御調、古圖墨書並ニ彩色御用之度々注進、依之、被止縫殿寮史生官位等、被推任推叙内舍人正六位下

同日職事頭辨萬里小路建房卿前書之趣被仰渡、且仰詞御書付御渡書左の如し。

臨時祭再興、御即位大祀、仙洞御幸御衣之紋等、時々徴故典、能存古風、摸寫精巧、且彩繪御物、以調進之多年勤勞、有之賞。

かくて臨時祭に用ゐらるゝ、缺掖の青摺及摺袴繪の調進は、在明毎にこれを命ぜられ、毎歲袴繪の料玄米六石、青摺の料若干石を賜はりき。又春日繪所は從來勝山家これに任ぜしが、往々勤務を缺きし爲、一乘院、大乘院兩門跡の議にて、在明これを命ぜられ、爾後歷代これを勤む。二十年めこの改造に際し、その社殿及器財を彩繪するに、毎に三年を費しき。在泉曰く、繪所職は淨衣を着、烏帽子を被り、一刀その畫名籍甚し、畫を求むる者甚多く、潤筆の收入虚日なかりしことは、當時の日記に徴してこれを知るべし。在明深く意を顔料に注ぎ、原產地よりこれを取りて、多く良品を貯へ、賈人往々分與を乞ふことありき。又曾て御室八十八箇所の圖を製せり。天保十五年六月十五日、享年六十七にして歿す。

原在中以下詳傳天性寺に葬り、法名を臥遊室内匠大允厚譽子德在明居士と云ふ。過去その肖像烏帽子家に存す。

在明の弟人物志は在親の弟と爲せり在善字は子至。文化文政の人遊蕩を好み、畫事聞えず。天保七年四月十六日歿す。法名安靜院至道在善居士。原在在照、在謙の二子あり。在照家を嗣く。

梅戸在親

在善の弟人物志は兄とす、今在親字は子民、人物志臥龍天保以後と號す。花山院右府公畫を在中に學びしかば、在親をしてその諸大夫の一なる梅戸家の絶えたるを續がしむ。原在仍りて梅戸氏を冒し、紀伊守人物志以後に任ぜられ、小川中立賣北天保九年及嘉永五年人物志に住せり。安政禁裡御造營の時、命を奉じて小御所南廂襖四枚、和歌之意、極彩色及常御殿北御縁座敷杉戸東面葡萄架風西面葵猫中彩色を畫げり。歿年詳ならざれども、慶應三年の平安人物志にも出でたれば、明治に亘りし人ならむ。その子在延、在勤あり。原在泉談

在照

在明の子在照は原家の第三代なり。字は子寫、觀瀾嘉永慶應人物志又夕鸞と號す。幼より畫を好み、嬉戲常に筆を執る。父に學びて最も有職人物に長ぜり。父の後を嗣いで正六位下、内舍人、兼近江介天保以後人物志に近江介とありに叙任せらる。夙に宮中の繪事を勤め、安政禁裡御造營の時、命を蒙りて小御所東廂襖十八枚、和歌之意、極彩色御學問所御下段、岳陽樓圖、極彩色雁御間東御縁座敷杉戸、南面極北、面詩之意、中彩色常御殿御寢間御襖、竹菊群鶴、中彩色御小襖南方八枚、十二月花鳥、北方八枚、六所玉川圖、中彩色御小座敷東御縁座敷南方杉戸、南面安樂、二舞、北面皇太后宮花御殿新建南之御間、松鶴草木、皇后宮新建櫻間、繪、墨同常御殿一御間繪作、中彩色等を畫げり。平安畫家評判記に「大上上吉吉字の飛白」八百三十兩文藝の次、一蓮の前として市川團藏に比し、「此先生は上京の親玉顔にて、御かみ事も能お心得有り、かつたりご出来升が、些淋しいと申升、去ながら親玉顔と見え升」と評せり。文久二年八月内匠少允に任ぜらる。

内舍人兼近江介平在照

多年書道出精、克徴故典調法、内外御用無懈怠勤仕之賞、兼任内匠少允介如舊被推任候事。



和宮關東降嫁の時、御乗用の糸毛車の圖を調へ、朝廷より御賞詞を蒙り、又御降嫁御用の繪卷物製作を命ぜられしかば、爾餘の御用盡多きを以てこれを果さゞりき。終生多くは禁廷の御用盡のみを作りしかば、その盡の世に流傳せるもの多からず。繪畫の餘亦みづから髹飾を能くせしを以て、宮中御用蒔繪の下盡は、常に在照に命ぜられき。明治に至り土佐光文、狩野永祥、鶴澤探眞等と謀りて如雲社を立て、以後進の誘掖を圖れり。明治四年十二月廿一日、享年五十九にして歿す。天性寺に葬り、法名を臥遊室定響、在照是心居士と云ふ。その子在泉嘉永二年生。後を嗣いで現在す。以上原在中以下詳傳に依る

在謙

原家の門人  
高倉在孝

畑在周

在照の弟在謙亦盡を能くす。常に備前、播磨等に歴遊せり。明治十六年十一月歿す。享年七十。原在泉談、歴代の畫印現存す同氏藏  
原家の門人は在中に學びし者に高倉在孝あり。在明、在照に學びし者に畑在周あり。高倉在孝字は子止、後素と號す。六軒町一條北に住せり。  
文化、文政、天保、嘉永の  
平安人物志に出づ 後名古屋に住す。名印その部類 孝資類共に出づ 畑在周の傳はその碑銘在周の嗣仙に詳なり。左にこれを掲ぐ。

故北面武士兼大内守衛職畑君碑銘

畑君仙齡與余有舊、自東京寄書、屬以其先府君碑銘、余之不文、何足以垂於後而取信於世也。辭至再三、君終不聽、乃不獲已、按狀曰、君諱綱之、字子樵、號在周、本姓源氏、京都人、遠祖内大臣久我通親、仕土御門帝、承久之變、帝之南遷也、男從三位具重扈從、遂家土佐國畑莊、因以氏焉。其裔孫法眼經親、徙越前國坂井郡高須邑、男經之復徙京、仕後桃園帝、授北面武士、遂爲世職。是畑氏中興之祖也。考諱親之、經之四世之孫、叙從四位丹波守、妣登喜子藤木氏、加茂縣主阿波介經女、君其次子、階正五位、任肥前守、尋加大内守衛職、文久慶應間、四方勤王之士聚闕下、物論洶然、君與大和吉村虎太郎、伴林光平最善、長藩騎兵隊某々及佐賀藩某等、逼幕吏之逮、君私營別宅而匿之、周旋備至、產雖爲破、欣然自得也。君外疎放、内眞摯、蓋重大義、趨人之急、多類此。王政維新、遷都東京、明治三年致仕、自以爲迂濶背時、遂有絕世之心。君善畫、嘗學於原在明、研尋六法、於是專事丹青、游歷諸國、惟以山水爲樂、故人通顯者、或勸之再仕、君笑而不應、終絕交於朝貴云。君又精于有職故實、平生所作歷史圖、人爭獲珍之。晚卜居三州岡崎、愛其風土、遂有終焉之志。適男經長在東京舉嫡孫、君喜劇、迺出都、無何、獲病而卒。子經長家、時明治廿八年三月十八日、距生文政八年七月、享年七十三。茶毗於豐島郡代々幡村、納遺骨於京都大谷派本願寺祖師廟。夫人栢子深尾氏、內藏寮近江介福就長女、方君之觸幕吏嫌忌也、栢子幾不免、有姻屬仕于掖庭者、乃因匿焉。遂仕爲女官、敍正八位、後君九年而卒。享年六十八。茶毗納骨一同君、經長號仙齡、夙學畫於鈴木百年、純宗北派、設彩雲畫塾、聚徒以教授、可謂善繼述矣。君二女、長適陸軍大主計鴨脚光麗、早夭、次適高知縣士族岡崎俊衛、孫男女各一人。今茲明治卅七年五月、岡崎人某々相謀、樹碑於城北隨念寺、以耀潛德、嗚呼、君之見孚於人、亦可以見矣。銘曰、君之盡國、不慕華軒、流行坎止、希蹤前賢、宋末沙社、後漢逸民、片石代傳、古寺千年、

明治三十七年五月

美濃木蘇牧撰



## 第十章 若冲、月僊及狙仙

圓山、四條、岸、原等の如く一流派を爲して師資數代相繼承せるもの、及明清風諸家次章に敘すの外、各々一箇の機軸を出し、名を一世に馳せし畫人亦少からず。小家數の作者に至りては、殆ど枚舉に遑あらざるなり。その關西に於ける大家にして、上記流派中の何れにも攝すべからざる者を擧げて、左の三家を本章に列敘す。

伊藤若冲

若冲の傳記は大典禪師の撰に係る碣銘最も詳なり。左にこれを掲ぐ。

居士名汝鈞、字景和、平安人、本姓伊藤、改爲藤氏、父名源、母近江武藤氏、以享保元祀二月八日、生居士于城中之錦街、居士爲人斷々、無他技、唯繪事是好、從爲狩野氏之技者遊、既通其法、一日自謂曰、是法也、狩野氏之法也、即吾能之、不超狩野氏圈績、不如舍而之、宋元也、於是取宋元畫學之、臨摸累千百本、又自謂曰、步趨之技、肩終不可比耶、且彼描物者耶、吾又描其所描、是隔一層矣、不如親即物而砥筆也、物乎、吾何執、當今時無有麒麟、凌烟、及夫冒雪吟詩者之態、而露髮月額、褊被之人、弗堪也、山水所目、亦未遇上幅者、無已、則動植物乎、孔雀鸚鵡、曾不可恒觀、唯司晨之禽、閭閻所馴、其毛羽之彩、可五彩施、而吾自此始矣、畜鷄數十窓下、極其形狀、寫之有年矣、然後周及草木之英、羽毛虫魚之品、悉其貌、會其神、心得而手應、其下筆賦彩、盡以意匠、無一毫蹈襲、雖於古人韻致、如有不合、而骨力精練之工、可以卓然名家矣、又喜用白紙易滲者、作墨畫、乃用其所滲界濃淡、而花之瓣、與羽鱗之次、區分爲態、其運筆也、曼漉似暗中模、及乾劃然、濃淡不紊、蓋筆之所至、圓熟不滯也、一種風流、世未嘗有、觀者咸服其妙、遂以此易斗米取給、於是乎有斗米菴之號、然居士質直少飾、不欲以技術當世、嘗造丹青三十六幅、實愜心合度之作、又摸張子恭釋迦文殊普賢三幅、幅極大、精綯無耻其本、慨然以爲、售之一時、不如傳身後、供之世俗、不如藏之名山、乃盡喜捨諸相國、以充莊嚴云、錦街銚菜之肆、旦旦負擔者、輻輳爲市、塞戶隔牆、即居士家、日租其地、亦足以爲利、乃居士則耽繪事、不欲外物混之、屬家其仲、而異宅焉、久鬚頭不食葷肉、無妻子、欲以季某爲後、先死、於是預圖百歲事也、與里人約、輟宅爲里有歲分其假貸之廩、施諸相國、以奉父母及己祀、請其子院松鷗掌香火事、既又乞松鷗之地三尺、卜佳城所、立碣表焉、而碣之不可無銘也、來請于余、余曰、異哉、可以銘乎、昔者陶潛以文自祭、司空圖坐壙而賦詩、王績白居易爲窀穸誌、皆老而自遣也、吾子歲僅半百、其自果也如是夫、雖然、吾子所以家于技者、名遂矣、事畢矣、由斯以往、將何所營、乃腰不折而斗米可得、優遊以卒歲、則所謂畢宰墳鬲之望、知所息於今日也、且余與吾子交十有餘年、自顧羸弱、恐不能後吾子、夫吾子之知所息、與余之恐不能後、是宜若可以銘然、然吾佛有言、心如工畫師、無法而不造、則吾子苟擇於自造也、寧徒描士恭所描爲得哉、是真知所息矣、是爲銘、銘曰、生邪死邪、刳盡而土安者此邪、逝將固濟子邪、

畫乘要略に曰く、若冲常畜鷄數十、日伺其狀、寫之、數年後、能窮靜勁鳴啄之態、然不務形以貴寫意、晚閑居深草石峰寺側、以其畫換斗米、因自號斗米庵、造石像五百羅漢、今見其像、往々隨其自然、不復加彫琢、亦不務形似也乎。梅泉、石像の事、續く石亭畫談に出づの類を畫かず。又曰く、禪法を黃檗伯珣に問ふ云、又復曰く、若冲は西洞院青物問屋の主也。故に戯に菜蔬を連て釋迦涅槃の圖を作る。蘿蔔を以て釋迦像となし、午房、胡蘿蔔、茄子等の類を以て、或は菩薩となし、或は羅漢となし、獸畜禽鳥となして壹圖となす、圖格尤奇と云。此畫今京都誓願寺の什寶となると云。若冲一日感悟する所有て、忽ち平日摹す所の稿本を燒捨て、別に寫生の眞面目を開く。その筆を下す、鷄より



創云。若冲の號は俗稱若狹屋仲兵衛より出づ。明和五年の平安人物志にその名出でたり。膝如鉤、字景和、號若冲、高倉錦小路上ル町碑文中言ふ所の花鳥大幅は、その一二散逸せるもの、如しと雖も、相國寺よりこれを獻じて、今は御物と爲り、その丹精を凝らし、大作、眞に名山に藏せられつ。若冲知るあらば、應に大いに喜ぶべし。その款識に依りて、寶曆九年前後の作なることを知る。若冲は寛政十二年九月十日、享年八十五歳にて歿せり。深草石峰寺に葬らる。忌辰錄及畫人傳補遺後貫名苞その墓表を建つ。畫人傳補遺前出の銘を刻せし壽碑は、今も相國寺方丈北舊慈光院墓地に在り。平安通志

### 第三百四 伊藤若冲筆紫陽花雙鷄圖

逸人畫史に曰く、其畫風の出る所を知らず。墨色他にことなりて、善く鷄を寫す。世に若冲の鷄と稱す。著色最精し。畫乘要略に曰く、初學狩野氏、後摸元明古蹟、兼用光琳之筆意、別爲一格。謂はゆる光琳の筆意を用ゐるとは、若冲の畫の裝飾美を主とせることの、光琳の畫に似たる質あるを以てなり。筆意、彩調は決して光琳風に非ず。光琳の作は逸雅の趣高しと雖も、若冲の作はその彩調華縟に過ぎ、その布局餘りに文様に陥りて、且繁雜に失せり。こゝを以てその拗邪の弊殆ど蕭白と相似たる質ありて、人多くはこれを好まず。こゝに出せるは前にも記せる三十餘幅の一にして、若冲が會心の傑作、最もその技風を観るに宜しき遺品なり。

月僊

僧月僊名は玄瑞、要畧、辭書は元瑞に作る字は玉成、要畧、辭書は元瑞に作る月僊はその號なり。忌辰錄には又尾張櫻町の人

後伊勢山田の寂照寺に住す。逸人畫史、山中人饒舌等

初め江戸増上寺の學寮に居りし頃、畫を櫻井山興に學び、逸人畫史、後京都に上りて知恩院に居り、古畫備考

更に圓山應舉に學び、近世叢語、圓山應舉、辭書又元明の古蹟に法り、

參ふるに燕村を以てし、要畧、終にみづから一家を成す最も山水、人物に長じ、名一時に高く、四方これを重ず。要畧、山中人饒舌

逸人畫史に曰く、世人其畫を渴望する、事早天の雨の如し。人の需に應ずるや、先價を定めてこれを收めしかば、或曰、その畫の人物も世に乞食月僊と呼ばれしかど、その積

む所の財を以て、寺を建て、經を購ひ、貧民を救恤せり。文化六年正月十二日寂す。歳八十九。その行蹟の諸書に錄せられたるもの略左の如し。

月僊與吳月溪同書妙法院親王屏障、終日經營、迨暮歸、歸則又有乞屏風畫者、左手執燭、右手揮毫、立成、有生意、畫乘要略、梅泉）一時名譟四方、請求者麤至、當揮灑際、夜以繼日、致貲巨萬、晚年建山門、修佛殿、廣買經疏、振救貧民、遐邇頗遍、山中人饒舌、近世叢語亦略同じ仙以貧落聲價、死後以其納金於官、以備賑救、人始服焉、亦奇僧也、人請畫仙必題自作之詩、曰、避人題惡詩、山中人饒舌、近世叢語亦同じ此師戲場を見る時も、小童に筆紙をもたせ、演戲中見るべき所あれば、即寫せしとぞ。逸人畫史

伊勢國度會郡中地藏村寂照寺月僊上人行狀話。住職中専ら繪を致され、世間にて賞美致候て、其畫を請もの多く、甚行はる。然るに其禮謝みな金子にて收納せられ、繪よりも先に、頼候時に差出し候例にて、其多少によりて多かれけり。總じて繪と申ものは、自分の思入よりもあしき時あり、又存之外よく出來たるものあるべきことなるに、其高下の差引自在とかれし由、其邊のものはよく覺えて、これは何程の繪、これはいかゞなどあて候由、かく謝物を先納にせられしは、存より有ての事なるを、世人わけをしらざれば、さある事はあるまじきわざとそしるもあり。しかるに天性慈悲深くして、みづからは諸事けんやくをむねとし、夏も白木綿のひとへもの、冬もそのごとき質素なる體にていらるゝに、困窮なる者には、過分の金銀を



めぐるゝ事實なれば、其土地の者は深く感じ尊みけり。件の謝物にて、外を勸化もなさずして、本堂、大門、くり、僧坊のこらす新規に建立せられしが、以前に十倍して、美麗に造られたり。且當所の町に火災ありて、二町が間悉くやけたることありしに、上人より、一軒に金壹兩に米一俵づゝあたへられしと也。是莫大の費なり。かく財用も心のごとくなりしかど、寺の莊嚴か窮民をすくはれ候より外は、少しも散財せられず。平生の事皆繪を以て取かへられし也。商人も定價より餘分にいだして其繪を得て、却て其益を倍せし故、何方も繪を求しとぞ。其後公儀へ金三千兩差出し、永代その利息を以て、二宮の者のまづしき者に下し賜り候様願はれて、儀定となりしとぞ。入滅の前に後事をくはしく認置れあり。金悉く三十兩づゝ、弟子并其子へ配りつけ候由。せんだくばゝへ十兩遣しけるとぞ。其外出入致もの、少しの縁にて參者、皆書付られ候と也。或時寺へ薪を牛に負せて參候者へ、茶漬を與へられ、さて其者に、牛をよく見たき間、かし候へどて庭につながせ、つくゝとしはしがほご見られて、時々筆とりて寫なごせられかへされけるが、翌朝牛のぬしいそぎ來りて、昨日牛を御うつし被成候につき、夜前牛斃申候、一飯の事にて大切の牛を失ひ、難儀至極のよし歎きしに、打笑ひ、それはけしからぬ事也、去ながら、なかゝ此方らが筆先にて、牛の精神を寫取て、牛のおちけるなご申やうなる繪にはあらず、されど牛をなくして、さしあたり迷惑とあれば、氣毒也とて、金拾兩出し、是にてかはりの牛を求べしとて、遣されければ、其者存よらぬことにて、大に悦、前の牛は八兩にて買候也、拾兩にてかへば、前の牛よりも天晴まされる牛買れ候、悦かへりしと也。予いへらく、右の話のごとき事、いにしへも例あり、唐の事をこゝのことにしたる由申候へば、あるじ申候は、此事更に虚説にあらず、伊勢はせまき所にて、その先もしれ居候也、其近村にて鹿海村に住者の牛也、鹿海今はかのめと申候由。ふしぎなる事也、古書備考、天保二年十二月四日、南傳馬町一丁目伊勢屋ト申紙店ノ主話、(中略、勢州者也)

天保六年二月廿二日、文晁先生へ參話の節、月仙上人の事物語ありしを記す。元來増上寺の僧にて、繪を好み、櫻井山興に學べり、(中畧)其後知恩院の役僧になり、御門主様の寵遇を蒙り、世上にては書を能せしゆゑと申せども、如何あらん。久しく勤仕せし所に、宮様の思召には、都近き所にて、一寺の住職になし遣し度由仰ありしが、月仙の望みには、いかほご小寺にても、滅罪のなき寺に住申度とのことにて、所々近國までも尋られしが、その寺とてもなかりしに、漸今の寂照寺を聞出し、住職に定りぬ。此寺兼て望のごとく、且家一軒もなしといへども、遊里等にて繁花なる古市は、此寺の敷地の中にて、又芝居のある所も、同く寺の地所なれば、上納多分有之、且家あるにも増りしが、かゝる俗喧の地ゆゑ、是迄の住僧身持宜しからず。寺は大破に及ぶうへに、代々の借財多分なる由。されども願通りの寺は類ひ少き故、此所になをり候て、下向いたすにつき、存付たることありて、知恩院の内にて、世才ある出家を見立、暫く同道の願を立て、打連れ伊勢に下り、外にいとなむこともなければ、自分繪を書て、其所化を以て、諸國より來る旅人の宿へもたせ遣し、始は壹枚二百文づゝにて賣せけるに、もとより能書なれば、頓て弘まりて、國々よりも誂へ來ることとなり、寺産も豊に成りし時、大破も修理を加へ、追々再建し、經文もさらになかりしを買集め、自分の榮耀には少しも費すことなく、ひたすら再興の志たゆむことなかりけるに、生國の尾張の櫻町といふ所に、自分の兄町家にて有徳なりしが、早く没して、其子幼少なる故、くわんぼうの手代共私慾をなし、主家の財を貪りしより、親類相談して、一家の斷滅に及ばんことなれば、是非とも月仙に、還俗ありて家督を繼れ候様、一同にすゝめけれども、ひとたび出家せし上は、俗家にいかやうなる事有とも、歸俗せんこと決てあるまじきと也、殊に宮様の厚き御恩を蒙りながら、さる事以の外の由にて、うけがはず。又色々に申けるに、一年の家事を檢することは、私には答へがたし、宮様へ伺の上にて、御ゆるしあらば、其節ばかりは、簿帳なりとも一見すべきと申事にて、遂ての上、其時節



には勘定を見候て、私なければ、家事も能整候て、年經て、幼息も自分其業に臨む様になりしかば、是迄の恩義を謝せんさて、寺再興を厚く助けしと也。輪藏を建候時に、古市其外にても其德義を感じ、勧めずして法財を寄附し、志願の如く、山門迄も出來しと也。其後肥田豐後守殿山田奉行の時、修造の殘金を悉く奉行所へ差上、それより三年目に遷化せしと也。賣畫の事、世にそしる者多し。如此行狀をしらざれば、只今其德義の咄語候由被申。文島。一とせ上方へ登り候節、寂照寺へ尋參り、二夜逗留いたし候處、殊の外悅着致され、畫談のみなりしが、曉方まで話し付られ、少しも目を合せ候事なく、好み候事ながらも、困り候と語被申候也。〔古畫備考〕

月仙水戸へ下り、磯部村地紙屋吉右衛門方に、二三年程逗留いたし、吉右衛門伴彦助事月仙の畫を學び、當時水戸町在へかけての繪畫なるよし。同上、已卯八朔承）

曾て一名妓あり。其名を聞き、人をして來りて畫を請はしむ。月仙まづ價を論ず。其人歸り告ぐ。妓曰く。價は宜しく其欲する所に従ふべし。已にして畫成り、月仙躬から携へて往く。其妓客あり。盛宴を張るに會ふ。即ち月仙を延いて席末に就かしめ、金若干を攫み、抛ちて之に與へて曰く。金を以て畫を買へり。賣畫人の幅は掲ぐるに足らざる也とて、起ちて自ら其褌を解き、之を壁上に懸け、笑て曰く。雅軸を得すといへども佳褌を得たりと。一座爲に目を掩ふ。月仙熟視して愧づる色なく、金を收めて歸り、後益其價を貴うし、其獲る所の金を稱貸して、以て終に巨萬に至る。玆に於て佛殿を修造し、經論を購求し、且宮川の渡船は、金を出して其賃を除き、間の山の惡路は、金を出して之を修め、其餘金を散じて窮人を救恤し、之に頼りて身を立つるもの甚多し。遺す所の金後に存じ、伊勢人之を稱して月仙金といふ。以て其行事の非凡なるを知るに足れり。文化六年死す。著すところ列仙圖、耕織圖、月仙畫譜あり。〔繪畫叢誌〕

第三百五 月僊筆衆盲圖卷一部

山中人饒舌に曰く。觀仙畫、人物簡而疎朗、無迫塞處、雖因多作漸致精熟、又是天趣、比諸時輩、迥異。畫乘要略に曰く。識者惜其格陋、然身在偏鄙、馳名於海內、不亦偉乎。〔げに月僊の人物は面相往々恠醜、描法頗る輕佻にして品格較々卑し。竹田が「近史人物、衣鍬用長心筆、輕々拖去、無頭尾、無起伏、曲折無勢、幹旋無力、與鐵線蘭葉諸描法不同、恐非古也。〔山中人饒舌〕と曰へるもの、元來四條派人物畫の病を指せるなりと雖も、月僊の癖最も克くこれに中れり。然れどもこゝに掲ぐる衆盲圖卷の如きは、この癖未だ生ぜざる頃の中齡の作にして、恐らくはその遺品中の最も佳なるものならむ。〕

月僊の門人、  
世繼寂窓

月僊の門人に世繼寂窓、谷口月窓、佐々木月岱等あり。立原杏所も亦曾て月僊に學べり。〔國山應舉〕と云ふ。世繼寂窓名は眞員、字は伯周、希僊文政及天保人物志又台六と號す。京都の豪商にして、通稱を岐阜屋八郎兵衛と云ふ。好みて松毬を畫く。殊に妙なり。繪事の外、點茶及連歌を能くし、又みづから茶器を作り、魚禽の味に精し。人名辭書文政五年及天保の平安人物志文人名辭書に出で、三條高倉西に住せし由見えたり。谷口月窓名は達、字は孟泉、伊

森狙仙

勢の人、月僊に學びてその筆意を得、山水、人物、花鳥を能くせり。佐々木月岱名は泰、尾張の人なり。人名辭書森狙仙名は守象、字は叔牙、要畧居を靈明菴、通稱を花屋八兵衛と云ふ。浪華人傳浪華人傳と爲せり。逸人畫史、崎陽の人、浪華に住す」と記せるは誤なり。の人、森周峰徹山の父の



弟なり。寛延二年船町<sup>浪華畫人組合三幅對に住せしならむ</sup>に生る。幼より畫を好み、初め狩野派を學び、後みづから一格を出し、畫猿の妙を以て世に聞ゆ。逸人畫史に曰く、初め瓊浦にあるの日、獵者に托して一猿を買ひ得たり。是を庭樹につなぎ置て、其傍に横臥し、紙筆を出し、寫すこと數遍にして、一日絹本に淨寫せり。しかして來舶の某氏の鑑を乞ふ。某氏云く、惜むべし、此猿は人家の養育の形にて、山中自在の趣にあらずと言はれければ、又山中に入り、切瑳すること兩三年、終に其眞面目を得たり。<sup>假名世説</sup>畫乘要略に、畫猿、其形似殆逼真、雖悅俗眼、然非雅賞、と曰へるは、蓋し評者のこの風を好まざるなり。浪速人傑錄に曰く、近代之寫生家之名手にして、殊更猿猴之畫に於ては、古今獨歩なること、世の知る所也。或人より天滿祠に畫馬奉納に付、野猪の圖を頼まれしに、何卒其眞形を寫さんと、和州より小猪を買求め、庭に飼置て描かれしに、其畫群に秀たると、見る人賞譽せし。寫生に意を用ひられし、の篤きを見るべし。猶奇なる話一條を舉ぐ。藝州宮島の繪馬堂に、狙仙先生自筆極妙之猿之畫馬有しが、或人其前へ猿を連れ行きたりしが、其猿目を怒らし飛かゝりし事有之。依て狙仙氏之猿畫の妙成事を、其頃彼地に於て專尊して驚歎せしとかや。此一條はたしかなる事にて、浮たる話にあらず。狙仙初め狙仙と書せしが、柴野栗山が長古一篇を寄せしより後、狙仙に改めぬ。事は五山堂詩話に出でたり。曰く、浪華有狙仙者、善畫獼猴先生<sup>栗山有贈畫生狙仙歌云、狙仙所祖抑何仙、猿狙描法誰處傳、</sup>楊州中口嫌尙、手縛秋毫更尖圓、日々掃來百數幅、突目嚙口愁胡鶴、長絹矮紙無不可、大類蹲兔小類拳、千態生動欲脫紙、如聞清嘯落耳邊、君不見衆狙昔被狙公憐、朝三暮四呆昞然、獨有老點不受欺、別服靈砂飛上天、長風吹落瀛海東、浪華城外受一塵、記得昔日遊侶態、寫向市人戲換錢、自愧蠢質非人類、托言祖系出偓佺、有識致疑時相詰、逃形遁辭玄又玄、栗翁雙眼爛如電、一睨々破繆糸纏、狙仙祇賴諱不得、承認狙仙非狙仙、山中人饒舌にもこの事を言へり。曰く、栗山翁贈七古一篇、稱揚甚勤、名益彰矣。かくて狙仙は文政四年七月廿一日、享年七十三にて歿す。<sup>人傑錄、忌辰錄は月、時年六十九歳、靈明狙仙書にあり</sup>天滿西福寺に葬らる。その養子徹山は圓山派を學びぬ。<sup>前狙仙の門人に森春溪、浪華畫人組合三幅對の劈頭に出づ</sup>森雄山<sup>同上に、月峯養子狙仙弟とあり</sup>りあり。又浪速人傑錄に曰く、因に記す。文政の初の頃、南江戸堀三丁目に君山の門人に月居崔仙と云畫工ありし。猿畫をみづから描き、狙仙の印刻を贋作して、他處え持行、狙仙先生の自筆なりと偽り、高價に賣りし事有。狙仙氏存在の時すらかくの如し。狙仙の畫の當時に賞せられしこと、亦以て知るべきなり。

第三百六 森狙仙筆群猿圖 全圖及一部分

第三百七 同筆封侯圖

第三百八 同筆雙猿圖 三幅對の一幅

第三百九 同筆秋鹿圖



山中人饒舌に曰く、如韓幹之馬、戴嵩之牛、莽齋水仙、日觀葡萄之類、專工一種、名足不朽者也。近大阪府有祖仙者、善獼猴、自攀援飛騰、逮剝果掠蝶拾蟲抱兒、諸狀意態曲盡、具究其妙(中畧)或曰擦毛不用筆、唯入室弟子、始得傳法、但其人目不知丁、工致有餘、而風趣不足、不得不遜一籌於古人也。げに狙仙にして文學に通じ、人品更に高からしめば、或は更にその畫品をして向上せしめけむとも憶はるれど、その畫猿の巧は、別に評賞の言を費すに及ばず。破筆輕擦の獸毛、骨格隱起の妙、眞に擅場の技にして、前人の未だ能くせざりし所なり。こゝに掲ぐる諸圖、一として佳ならざるなきを觀るべし。



帝室御物

第三百四

紫陽花雙鷄圖

伊藤若冲筆

絹本着色

竪四尺七寸九分、縦二尺六寸五分

（第五百九十四頁參看）











寶曆二年秋  
平女御御  
居士善冲造









第三百五 衆盲圖卷 月僊筆

紙本淡彩

鑒一尺一寸二分

(第五百九十六頁參看)

京都知恩院藏



（續正百五十六頁）

第一頁二十二行

附註

續三百五 樂日圖卷 貝謝雅

京師成德堂











第三百六 群猿圖 森狙仙筆

絹本着色

竪三尺二寸六分横五尺二寸四分

(第五百九十七頁參看)

東京 男爵伊達宗曜君藏





（新正百六十才頁集）

東京 櫻井書齋宗廟刊

經三八二十六卷正八二十四卷

備本并

卷三百六 雜錄圖 森山山



















第三百七 封侯圖 森狙仙筆

絹本着色

竪三尺五寸五分横一尺三寸

(第五百九十七頁參看)

東京 木村長七君藏



新刊百部十計百選

聖三十八正正卷附一八三

補本錄

東京 木林貝小書齋

卷三百十

桂樹圖

森鹿山筆





祖仙字







第三百八 雙猿圖 森狙仙筆

絹本着色

竪三尺四寸五分 橫一尺二寸八分

(第五百九十七頁參看)

東京 侯爵伊達宗陳君藏





（附註頁八十頁卷末）

東京 翁齋堂 影宋刻本

三三四七正卷附一頁二十八卷

附本卷

卷三百八 雙猿圖 森山山











第三百九 秋鹿圖 森狙仙筆

絹本着色

竪三尺四寸五分橫一尺二寸九分

(第五百九十七頁參看)

東京 侯爵伊達宗陳君藏





(改正百式十廿頁書)

東京 獨徭母 滋宗 刺 孫 燕

三三三 正位 一以二七式

本 書

三三三 煉 風 圖 森 里 山 井











明治四十二年十月十五日印刷  
明治四十二年十月二十日發行

(東洋美術大觀第六冊奧附)

不許複製製



發行所兼  
印刷所

編輯者  
兼  
行

田島

志

一

東京市京橋區新肴町十三番地

株式會社 審美書院代表者

東京市京橋區新肴町十三番地

株式會社 審美書院活版部主任

印刷者

神田輝

夫

東京市京橋區新肴町十三番地

株式會社

審

美

書

院

(電話 新橋三〇五五番)



印鑒  
陳行  
兼視

東京市京田町三〇五番地  
（東京市京田町三〇五番地）  
美 書 刻

印 陳 香 轉 田 聯 夫

東京市京田町三〇五番地  
（東京市京田町三〇五番地）  
美 書 刻

印 陳 香 轉 田 聯 夫

東京市京田町三〇五番地  
（東京市京田町三〇五番地）  
美 書 刻



開 前 四 十 二 年 十 月 二 十 日 發 行  
開 前 四 十 二 年 十 月 二 十 日 發 行

（東京市京田町三〇五番地）



















Blank Page Digitally Inserted



SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES



3 9088 01652 2492